

# わいふ

投稿誌

特集◆私の健康法

座談会●家庭の中の会話

新連載●嫌疑

読んで書いて、みんなで作る



286

# 農文協

〒107-8668 ☎03(3585)1141

東京都港区赤坂7-6-1

【税込定価】

http://www.ruralnet.or.jp/

☆「地域型食生活」再創造の原点

## 日本の食生活全集

CD-ROM版 バージョンアップ2000年版

Windows95 / 98 / NT / 2000に対応 ●120000円

書籍版50巻のデータを一枚に収録。料理15000種、カラー再現写真15000枚。

テキストデータ中のすべての語句を対象にした【高速全文検索】機能。各都道府県ごと、テーマごとに自由にすばやく食を探求できる便利な【ガイド検索】機能で、マウスクリックだけでどのページも、本のページをめくるようにじっくり読むことができます。

●13000円  
**あなたも化学物質過敏症？**  
 暮らしにひそむ環境汚染  
 石川哲・宮田幹夫著 農薬・添加物・住宅・衣料用化学物質、電磁波などが様々な不調を起こす仕組みと回復法を詳述。

●13000円  
**こうして直すシックハウス**  
 エコリフォーム 賃貸から持ち家まで  
 船瀬俊介著 農薬・環境ホルモンなど化学物質まみれの住宅を改善。危険度チェックと安心建材の利用法。連絡先も大公開。●16000円



# 化学物質過敏症・家族の記録

朝はなかなか起きられず、出かけようとすると体が重くなり、頭痛や腹痛を起す。帰宅するととても疲れてイライラして…。(本書より)

小峰奈智子著 住宅内に使われた殺虫剤が原因で化学物質過敏症になった家族は、身近にある微量のありふれた化学物質でも体調を崩すようになる。多発する食物アレルギー、子どもたちは学校にも行けなくなった…。それでも化学物質の被害と闘い、絆を取り戻した家族の5年間のありのままの記録。

## あなたの子育て 診断します

母親の個性を生かした「子育て」を

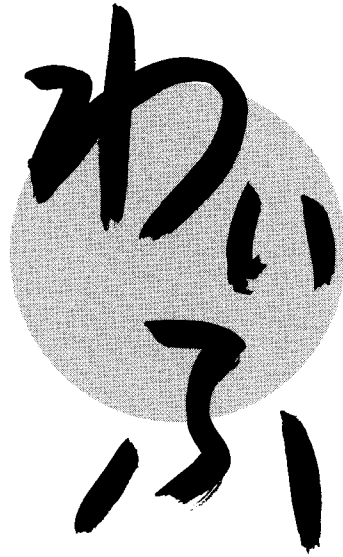
◆子育てを診断するなんて、嫌な感じ！なんて思わないでください。そうでなく、あなたの性格に合わせて一番やりやすい、いい子育てができるガイドブックなのです。

◆五種類のアンケートと、その答えからあなたのタイプがわかるチャートがついています。●権威型 ●保護型 ●受容型 ●放任型 ●流され型の五つです。

もちろんどれがいい、どれが悪いという問題ではありません。自分のタイプを知った上で、自分に一番ふさわしい、そしてやりやすい子育てのしかたが見つかる本なのです。ぜひお試しください。

◆それぞれのタイプがよくわかる、すごく愉快な子育ての実戦記がついてます。

田中喜美子+NMS研究会著  
 定価一三六五円(税込み) 小学館刊



「わいふ」を読む

「わいふ」に書く

あなたの人生が開ける

# わいふ

読んで書いて  
みんなでつくる

286号

## 目次

デザイン/宮塚真由美  
題字/石渡希和子  
表紙イラスト/箕輪絵衣子

イラスト/ 荒田ゆり子  
イシノフミ 小沢恵子  
カステラネンコ 粟田笑  
弘法堂建二 小林正子  
佐藤瑞江子 田沼千恵  
西宮さき 橋本美智子 渡辺美帆

4 わが家の歴史写真

八人きょうだいの努力と協力

神奈川県横浜市 三田サキさん

写真提供・文/三田サキ

### 特集 私の健康法

10 ダンベル記念日 鴨川典子

13 健康食品の魔法 作部径子

15 玄米御飯でダイエット 三田サキ

18 西式健康法 長野栄子

23 おすすめの一冊 高橋ひろみ

80 嫌疑 野村浩子

最終回

いのち、はるか ―老親介護の日々― 小林智枝

96 子育てフォーラム ●NMSのページ●

由美あき子・柴尾恵子・林直美・後藤晶

105 おすすめの一冊 和田好子

106 フリートーク

匿名・森菜美・家守恭子・伊藤琴子

115 情報コーナー

116 コミック これが子供の生きる道 18 栗田笑

120 あなたへスマッシュ

鈴木貴子・末永真理子・新井純子・小笠原安紀子

126 ブック情報

連載3

リラの花 桜の花 浅野素女

ゆれつごく主婦像 田中喜美子  
家事と仕事のはざままでエッセイスト・クラブ  
布施幸子・榎雅子・砂原富美子

息子に裏切られつづけて 大味恵子

一筆両断 18 西田淑子

座談会 私も言いたい

家庭の中の会話

安村豊子・林夏子・大久保れい子・大久保博子

思春期病 西尾裕子

パソコンワールド  
後藤美幸・ゴル私の意見・あなたの意見  
麦穂

アメリカの老人ホーム探訪記 桜井淳子

おすすめの一冊 田中喜美子

コミック 毎日が平日 海砂

私のおひらき

渡辺早苗・小林薫子・布施幸子・本間美恵

浅田節子・加藤智恵子・栗林八重子・トト安田

小笠原安紀子・柴尾恵子・末長真理子

後藤美幸・伊藤琴子・吉田淑子・山橋ゆり

太田啓子・藤野 恵

スタッフから わいふインフォメーション

募集します 投稿のきまり

編集だより

自費出版はわいふへ 115 バックナンバー 129

152 149 147 150 148

我が家の歴史写真

八人きょうだいの

努力と協力

神奈川県横浜市

三田サキさん



↑ 父没後48年目でようやく石碑建立

倒れる寸前の鶴我家を建てなおした  
宋一兄（向かって右、実家にて）→



この石碑が出来上がるまでのわが家にはこんな歴史がある。父没後四十八年目でようやく石碑が建立された。私達の知らない間に次男（栄一）が決して裕福ではない日常生活の中から、石碑を立てるのに積立てをしていたと言う。

父は裕福な家庭で超大事に育てられた結果、労働に耐えられない人間になってしまった人であった。そして父の代になって生活苦の中次々と子供が産まれ、九人（内一人死亡）もの子供たちとなった。貧乏のどん底で父は昭和二十六年に他界した。残されたのは長男が二十歳、末っ子が一歳の八人の子供である。その時は麴屋を営んでいた。母を中心に三人の兄達が会社勤めのかたわら家業を手伝うようになった。その時から商売は繁盛し仕事はほとんど



↑ 通男兄 ブラジル行き出発の前日家族全員で  
後列向かって左通男、前列右端私（昭和33年）



← 私 独身時代 会社で働いていた頃  
うすよこれた女（昭和51年）

ん増えた。私も自転車での配達で大忙し  
だった。皆毎朝三時起きである。こうし  
て家族全員が一丸となって働いたので、  
二、三年で父の残した借金は片付き暮ら  
しも楽になった。

こうして一段落ついた頃から、兄や弟  
達がそれぞれ自分の進む道へと向かい、  
長男は家を出て結婚、三男はブラジル、  
四男は警視庁へと巣立っていった。次女  
も東京で暮らす事になった。次男の栄一  
兄は、後に残された幼児と母の生活のた  
め一生懸命働き続けた。兄は自分の青春  
は全く犠牲にして家族に尽くすのみの生  
活であった。

ブラジルの兄、子供4人 →



← 弟の息子、警視庁勤務  
(平成12年)



↑ 鶴我家の身内、母の初盆





↑ 三田家の家族全員、福島へ花見に行つて（平成7年頃）

が、生活苦は又やってきた。その頃から母が宗教に凝り、家庭をふり返る事がなかった。宗教嫌いの兄と対立して家庭内は大荒れに荒れた。

そんな中、精神的・経済的苦痛に兄は必死で耐え頑張り通した。努力の甲斐あって倒れる寸前の鶴我家を見事に建て直した。それは全く兄の忍耐と意志の強さの賜であった。

そして昭和三十九年三十二歳にて、兄にもようやく春が訪れ良き妻を娶り幸せになった。巣立つて行つた兄弟達も、今ではそれぞれに良い家庭を持ち幸せである。四男の娘と息子は警視庁に入り活躍している。ブラジルの兄も四人の子供を成長させ、二人の孫を相手に幸せな日々を過ごす。

私もここまで来るには苦難の道だったが良き夫に恵まれ、この人に会って私の人生は開けた。人生六十四年をふり返ると、今が最高の幸福をかみしめている時である。こんな日々を刻んだ父没後四十八年、ずっしりと重いこの石碑が出来上がったのである。

**社会思想社** <http://www.shakaishisou.co.jp/>  
 (価格は税別)  
 東京都文京区本郷3-25 ☎03-3813-8101  
 書店品切の時は代金引替宅急便380円

**大反響!**

**年金で豊かに暮らせる町**

主婦の投稿誌わいふ編集部編



四六判・1600円

老後は、年金が一・五倍に使える町に移住しよう!  
 安心の町30カ所を解説付で紹介。

その町とは——交通機関が通っている、安くて豊富な食料が手に入る、病院が複数ある、老人ホームがある、温暖な土地である。農園や園芸ができる、家賃が東京の50%以下、その上温泉が近い……。この条件に合った30の自治体を選び、老後を年金だけで豊かに暮らせる町を資料・解説付で紹介。気に入った町があれば、すぐにも移住計画がたてられ定年後の人生設計を考えるガイドブック。

**新版日本流行歌史 (上中下)**

矢沢寛他編 日本初の流行歌歴史事典 ◆各五五〇〇円

**日本を知る事典**

大島建彦他編 習慣風俗等伝統文化事典 ◆八七三〇円

**歴史の研究 (全3巻)**

A・J・トインビー 著者の代表的著作 ◆各二四〇〇円

**定訳菊と刀——日本文化の型**

R・ベネディクト 日本論の古典的名著 ◆一五〇〇円

**教育史料出版会**

〒101 千代田区西神田2-4-6  
 ☎03(5211)7175

自分にあつた学校をえらぶ私立高校ガイド

**ハイスクールレポート**

入学してからでは遅すぎる!  
 服装・頭髮規定は? 生活指導の自身は?  
 どんな行事があるのか? 力を入れて  
 いる教育内容は? 進学への取り組みは?  
 学校生活がこの一冊で見えてくる!

**関東版** わいふ編集部編 4月末刊 ★2000円+税  
**関西版** 公立校も収録 / 5月末刊 ★2000円+税

**子どもはなぜ** ★1500円+税

**渡辺位 学校に行くのか**

**自分にあつた** ★1602円+税

**早川裕子 高校のえらび方**

●生徒・父母・教師が綴る 私の北星余市物語

**やりなさいか 書けなさいか**

北星学園余市高校編  
 中退生を受け入れる北の学園!  
 ★1500円+税

# 特 集

# 私 の 健 康 法



# ダンベル記念日

静岡県小笠郡 鴨川典子 (46歳)

無い、ナイ、無い、ナイ!。大枚三

万円也をはたいて買ったドクトルリングを失くしてしまった。血液サラサラ効果があつて、身につけるだけで血液状態改善や、自律神経系の活性化を促す成人病予防アクセサリーを通販で買って二か月後、家の中の掃除をしていて紛失してしまったのは五月のこと……。

「生活習慣の改善が必要だねって、お葉書が来たから十月六日はダンベル記念日」(万智さんをマネてみました)。

「高脂血症を認めます。医療機関で受診して下さい」と書かれた、町の検診結果の通知が来たのは、忘れもしない昨秋十月六日。医者も薬も嫌いな私が蒼ざめて早速押し入れから取り出し

たのは、一組のダンベルだった。

人口約二・五万の我が町に、ダンベル体操の祖・鈴木正成先生が来た三年前、勇んで駆けつけた私は最前列でお話を聞き、赤いおしゃべりなダンベルを無料でもらったのに、その時はわずか二週間でギブ・アップしたのだった。

現在八月初旬、体操は十か月続いている。毎夜入浴後に自室に落ち着くのが九時半。当初はマニュアル通り十五分厳守だったが、じきに飽きた。が、今度は止められない。その日の気分であかした部分強調した振りをつけたり、週一回行っている3B体操のダンスの動きも混ぜて消化している。途

中で本を読みたくなったり、眠くなったり面倒になったり。そのうちに、そうだ、今日の昼間には力仕事をしたから少しオマケだと、はしょってみたり。一五分はけっこう長い。

初めて一か月後、手の平の筋肉がダンベルを握りやすいように変化したのを感じた。いつもなら冬期に体重が増えるのだが、今回は増えず、現在までに徐々に五キロ減った。(五八→五三)冬にやせるのは難しいそうなので、「自分をほめてやりたい」心境。

実は四日間休んだ。次男の大学入学手続きに他県へ泊まった日、伊豆一泊旅行の日、風邪で不調だった日、近所のパーベキュー・パーティーで深夜帰宅の日。

先日、長男にダンベルを貸してと言われ、渡したら大男のくせに重いと、返してきた。〇・五キロのはどこだよと言われて、私の頭は大混乱。以前も買ったのは〇・五でどこ何か月使っていたのは、昔誰かが買った一・五と判明。実は開始時にダンベルが重くて、座っ

てやっていた。筋力のないせいだと思  
っていたが、なんといきなり適切重量  
の三倍のを使っていたのかと、今にな  
ってわかって納得（まあ、いいでしょ  
う、この件に関しては）。

鈴木先生によると加齢でエネルギー  
代謝率の悪いからだになるので、それ  
までと同じように食べていると、はけ  
ないエネルギーで体重増加、それが病  
気を招いてしまう。

防ぐには筋肉を増やして基礎代謝率  
の良からだにすれば良い。介護が控  
えているから「女は鍛えろ！」（男は

やせろ、です）というお話だった。

検診結果の通知が来てから三か月後  
に、秋に思わしくない結果の出た人対  
象の、医師による健康講座があり、そ  
れに出ると無料で再検査してくれると  
いうので、出かけた。

さて高脂血症——「自覚症状無し、  
でも放っておくと血液中の増えすぎた  
中性脂肪やコレステロールが、血管壁  
にへドロのようにくっつき、血管内側  
を狭くする。それがやがて血管の弾力  
を失わせ、動脈硬化など生命にかかわ  
る重大な血管障害を引き起こす。狭心

症、心筋梗塞になる確率が非常に高く  
なる。日常生活では肥満にならぬこと、  
コレステロールが多い食品を控えるこ  
と。アルコール適量、タバコ禁止、ウ  
ォーキングなどの軽い運動を続けよ」  
というお話。

胃腸がとても丈夫で、グルメの牡牛  
座。三人の息子と一緒にあって、つい  
つい食べ過ぎていたのが障ったのか。  
両親ともやや肥満体なので遺伝的素質  
も充分ある。この健診ではそれまで高  
めだった、総コレステロール値と、い  
わゆる悪玉コレステロール値が正常値  
になったのでうれしかった。

それにしても血管に欠陥があつては  
困る。食生活を変える必要を思いしら  
された。お茶の県静岡に住んでいな  
がら、数々の効用が唱われているとい  
うのに、緑茶をほとんど飲んでいな  
かつた。主に飲んでいたのは牛乳とドク  
ダミ茶。今では一日に何杯もお茶を飲  
んでいる。四十にしてお茶のおいしさ  
がわかつた静岡県人である。コレステ  
ロール値が高い鶏卵、ししゃも、イク





を食べる量をぐっと減らした。糸引き納豆を多く摂り、みそ汁の汁も飲むようになった。(なぜか長年、実のみみずべて汁は捨てていたので、このことでバチが当たったのかもしれない)。乳製品も大幅に減らした。腹八分を心がけているが、つい九分を超えてしまうのが反省点。

そしてまだ克服できないのが、チョコレート誘惑。お守り役だった祖母にこれでエづけされているので、「百円の板チョコ一枚でとつてもいい子」(つまり幸せな気分)になれる私は、チョコ食べたさに無い頭を絞った。妥協案として二日で一枚、又は個装のを買って一日五粒以内に行っている。

二月に農協主催の骨密度検査を受けた。これはいつか測ってみたいと思っていたので、この「個人的健康ブーム」のおり、渡りに舟だった。同年齢の1・一倍もあって大満足。二十歳の平均よりも多い数値が出た。

ある小冊子によると四十五歳から六十四歳は「中年期」と言い、からだの機

能が徐々に落ちる時であり、それまでの「壮年期」とは異なるストレスがあるので、状況に合わせて上手に生活や生き方を変えて、新しい人生観・健康観を構築していこう、と書いてあった。

そうか、「新しい自分」か、と半ばうっとりしながら、七月初旬献血した時のコレステロール値がまたまた正常値だったことと、先日久しぶりに会った知人に「顔が引き締まったみたい」と言われことを思い出し、満面笑みとなりかけた頭の隅で「きょうはまだダンベルやってみませんか」という声あり。書き忘れていたが、ストレスというものも、多分に血液状態を悪化させるそうである。締め切り迫るこの原稿を書いていたら、もう深夜近い。

今夜はダンベルをしなかった五番目の日となるのか。ああ、そんなことでは生活改善が……と、やみくもにストレスにみまわれた私。多目にはしよった体操の後、チョコレートのことでも考えながら、安らかに眠りにつこうと決めたのだった。

# 健康食品の魔法

東京都武蔵野市

作部 径子 (42歳)

私の健康法は、ズバリ「健康食品を摂ること」。二十代後半から婦人科系をはじめ、消化器系、循環器系とさまざまな持病を抱えてきた。ただしどれも命に関わるようなシリアスな状態にまではいかずじまい。

タフな人ならば見過ごしてしまうようなちよつとした不調の連続だったと思う。でも虚弱な上に敏感な私の体は、小さな不調も重大に感じとり、全身でこたえてしまう。疲れやすい、肩こり、偏頭痛、胃痛、下腹部痛、めまい、体が発するいろいろな信号が出るたびに心配し、「家庭の医学」などで生半可な医学知識を仕入れ、ますます心配が高じて医者通い。検査をしても悪い所

が見つからない、見つかっても様子をみましょう、と言われるくらい。どこも悪くないから大丈夫といわれても、体調不良はつきりせず、何とか健康になりたい、頑健になりたい一心でいろいろな健康食品を試してきた。

まず高齢出産で産んだ子供の、育児疲れからスタミナ切れになった時、実家の母にんにく卵黄のカプセルを勧められた。にんにくは強精剤としてもよく知られているし、卵黄のレシチン成分も強壮に良いということで毎朝食後に二カプセルのみ始めてから体がしつかりし、風邪をひきにくくなったように思う。九州の健康食品の会社の商品で一か月千六百円也。

さらに風邪をこじらせた時に、自然療法に凝っている友人がプロポリス液を勧めてくれた。ブラジル産の純度の高いものは高価だが、天然の抗生物質とも言われているように、感染症や炎症にも効果があり、またガンなどにも効くと言う。毎日寝る前に五、十滴、口の中に落とす。風邪をひきそうかな、と思ったときは量を増やし、一日二十滴くらい。そのせいかどうか風邪は本当にひかなくなった。三〇ミリリットル入りのボトルが五千円くらいですが、半年くらいは持ちそうなので一か月千円ほど。

にんにく卵黄＋プロポリスの併用で、かなり満足できる健康状態を保っていたのだが、年齢のせいかな、あるいは持病の子宮内膜症のために月経過多で貧血になったせいかな、春先から体調がすぐれなくなってきた。そんな時、娘の幼稚園のお母さん友達からキレート水なるものを勧められた。ピンに入った真つ黒の液体でほとんど無味無臭。大豆やとうもろこしなどの原料に

特殊な土壌菌を移植して発酵させたもので、ミネラル成分の吸収を飛躍的に高めるといふ。朝食前におちよこ一杯分。このキレート水はしばらくの間好転反応が出て、お腹の調子が悪かった。今あまり効果は感じないのだが、実際に飲んでいる人たちがあまりにも元気そうなので、いつかはそうなるかと期待して続けている。一か月に一本で、五千円ちょと。

さらに極めつけは、体調がすぐれないと言う私のために、夫がインターネット通販で買ってくれた天然ペプタードの粉末。九種の必須アミノ酸を体内で吸収しやすいようにペプタード（単体ではなく数個つなげたもの）化したもので、個別包装された少量の粉末を水にとかして飲む。「ダージリン風味」とあるが、牛の血液から抽出された天然ペプタードはどことなく獣臭い。毎晩寝る前に一気にぐーっと。これは三〜四日で体の調子が変わってきた。一か月一万三千円也。

健康食品を摂り始めると、しばらく

すると体調が良くなったように感じる。疲れにくい。食欲が出る。便通が良くなる。体が軽く感じられ、若返ったような気持ちになる。

特に体験談が載った効能書や「ガンに効く驚異の〇〇」などという本などを読むと、自分の体の中のガン化しかけている細胞が浄化され、正常な細胞に生まれ変わるようなそんなイメージが頭の中に生まれる（私は暗示にかかりやすいタイプ?）。

ところが悲しいことに少し体調を崩すと、健康食品の魔法はすぐに消えてしまう（暗示にかかりやすいだけならまだしも、暗示から覚め易く、たちまち懐疑的になるのも私の性格）。

いろいろな健康食品を摂って、お金もかけているのに、こんな調子が良くないなんて何か悪い病気がかかっているのでは……? そう言えばこのところ体重も減っているし、会う人ごとに「痩せた」「頬がこけている」と言われるし……。などと考え始めるとガンノイローゼになるのに半日もかからな

い。その心配を解消するのにまた病院で各種検査をしなければならぬ。私は立派な「心気症患者」であるようだ。最終的には「異常なし」の診断をもらい、胸をなでおろすのがおさまりのコース。そしてまた健康食品を性懲りもなく摂り始める。

これでは健康食品で健康を維持しているのか、ますます病氣ノイローゼを助長させ、健康食品依存症になっているのかわからない状態だ。健康食品に費やすお金を貯金に回して、家族で旅行にでも行く方がよっぽど有意義だと自分でも思うのだが、健康食品を摂らないで体調を保てるか心配なので、今日も飲み忘れることなく各種健康食品を摂取している。





# 玄米御飯でダイエット

神奈川県横浜市

三田

サキ (64歳)

私に必要な健康法と云えば、先ず減量である。心臓のまわりについている脂肪をとり除き、心臓の負担を軽くしなければならぬのである。それには食べすぎないこと、運動をすることが最大の課題であるのが分かってはいるが、だらしのない飽食時代のまん中にこの肥満の身体を置き、右往左往してダイエット作戦である。

時はさかのほり昭和四十九年の頃(独身時代)、会社勤めをしていた時のこと、仕事は肉休労働であった。しゃがんでうつむいて仕事をする時は、心臓を圧迫するので息をするのに、はあはあ言っても苦しいのである。これは何とかしなければいけないと思い

ある人に教わって玄米ダイエットを始めた。当時圧力なべが一万円したので、私には一寸痛かったが、まあ思いきって買ったのだからやりとげようと自分に誓った。

一日一合の玄米を圧力なべで炊き、それを三食に分けて食べ、そして蛋白質はハム二枚だけ食べる生活である。他には間食等いっさいしてはいけないという厳しいおしおきである。

## 減量は苦しい

そして労働は普段通り、残業や休日出勤を続けているので、相当のエネルギーを消耗しているはずである。こん

な苛酷なダイエットだから効き目は抜群である。減量を始めて一日目二日目三日目と、銭湯で体重計に乗るのが楽しみになってきた。

でも根っからの甘党なので、甘い物が食べられないのが苦しくてたまらなかつた。しかし減量が順調に進んで行くのは嬉しかった。

会社では同僚が沢山いるので、軽くなってゆく私の姿を見て意地悪をする人もある。三時のおやつ等もちろん、いっさい食べないでいるのに、ある時突然、「やきいも、やきいも」という声が聞こえてきた。

すると先輩が早速どっさり買ってきて、「鶴我さん(旧姓)ほらおいしいやきいもよ、ほかほかよ」と言つて私の目の前にさし出すのである。お腹はすいているし、大好きなやきいもが目の前にある。周囲はしつこくすすめる。一瞬ふらふらつとやきいもによるめきかけたが、今ここで負けてはならない。一万円もかけて購入した圧力ナベをフイにしてはもつたないと思つて、何



とかその場は打ち勝つ事が出来た。

そのあとも何度も同じような形で甘いものの誘惑はあり、とにかくそれに乗りこえて行つた。ダイエットは苦しいものであると痛感しながら一年の歳月が流れた。

その頃には、はあはあ言つて苦ししい呼吸をしていたのがいつの間にか直つて静かになつていた。六十五キロあった体重が五十三キロまで減り、このダイエットは大成功だった。

### 苛酷なダイエットは良くない

でもこんな無茶なダイエットを、よくも続けられたものだと言ふと考えると、よく身体をこわさないですんだとつくづく思う。ダイエット中、白い御飯が食べたたくて夢の中にまで銀飯の姿が現われた。むちやな減量でかえつて身体には悪い事に気がつき、結婚と同時にやめた。

無理な生活を一年も続けたせいか、結婚してからは退職して身体は楽になつたはずなのに、度々風邪をひいたりしてすぐ熱を出すようになった。ちゃんとした栄養をとつていなかったため、後になって良くない結果が現れたのだと反省させられた。

### 二度三度とダイエットは続く

私は根つからの甘党である。一日三回の食事をきちんと食べているのは良いことであるが、その夕食後のおやつに舌のとろけるような甘いお菓子をたべなければすまされない。結婚してなれない主婦稼業をこなすのに大変だったためか、三年位はダイエット無しでも痩せた身体を保つ事が出来た。

だが結婚して三年目に入る頃から精神的にも肉体的にも、ものすごく楽になつてきたので又ぶくぶく肥り始め、とうとう六十キロを越す体重になつてしまった。ここで又ダイエットの始まりである。こんな生活の中風邪はよく

ひき、ひけば発熱するのは依然として続いた。

こんな私を見て主人が、「養命酒を飲みなさい」と言って買ってきてくれた。私の健康を見守ってくれる主人の気持の優しさに感謝しながら、毎日朝夕に養命酒を飲む生活が始まった。この生活が一年位続いた頃からじわじわと効いてきたのか、熱を出すのは無くなってきた。

こんな生活をしながら、八年の歳月が流れ、私は五十歳の後半を迎えた。その頃から足のひざに支障をきたし骨粗鬆症と分かり、医者にも減量しなさいと宣告された。いよいよ本気でダイエットをして足の負担を軽くせねばならなくなつた。心臓の保護もお留守に

なつていたので、今度こそは絶対になしとげなければならぬ。

そして始めたウオーキングは、私にとって大恩人である。

ひざを患つて杖を使わねば歩けないし、医者にも見放された位の重症だったのが、ほかの医者のすすめで一万歩、歩くことを始めた。

この歩きを始めて、一年位続けた頃から効き目が現われ、足の痛みは相当に軽くなつてきた。そして今では軽くびっこそひくが、杖を使う等の不自由さはなく、嘘のように良くなり快適な生活になつた。これでもう少し体重が減ると楽に歩けるのだから、仲々そうはいかない。ダイエットは苦しい。目の前にお菓子を常に置いてある環境

の中で、それを食べないことを続けるのはとてもむずかしい。

食べないことを実行出来た晩の翌朝は、ぼよんと体重が一キロ減っている。しめしめと思ひ胸の高鳴りを抑え次の日もこれを実行しようと思つていながら、もうその翌日は気がゆるんでおやつに手がのびている。そんな時の言いわけは「いいやいいや、もう私も年で先が短いだから、好きな食べ物位食べてしまおう」というのである。

こんなしまりの無いだらしない食生活をしながらも、肥満が進まず今の重量を維持出来、又元気でいられるのは、次の事を実行しているからだと思ふ。それは一時間半の歩き、一時間のラジオ体操、二千四百回の青竹ふみである。以上が私の唯一の健康法である。

一万歩歩いてきて、続けざまの青竹ふみと体操は、この暑い時期には相当こたえる。とつても苦しい。でも健康を維持するためには何としても続けねばならないのである。何としてもである。



# 西式健康法

石川県小松市 長野栄子 (47歳)

「死にたい！」こうした叫びで私の朝は始まる。今日も地獄の一日が……。一四歳ぐらいから三十年余り朝の地獄は繰り返されてきた。死への傾斜から何とか意識をそらせるため、枕元に漫画か軽い本を置き目が覚めるやそれを目を通す。

この朝の儀式抜きには、私は一日を始めることができなかつた。うつ病、それが私の病名である。三十年余り、精神医療はこの苦痛を癒やすことはできなかつた。

## 西医学との出会い

私は二十代後半から全国「精神病患者

集団」という「精神病」者の全国組織に参加している。この組織の発足当時から会員のTさんは精神分裂病であり、発病当時医師に「治らない、人格荒廃にいたる」と宣告された。彼女は精神病院にも入院体験があり、現在も精神医療を受けてはいるが、抗精神病薬（メジャートランキライザーといわれるいわば強い精神安定剤）を一度も服用することなく、病名からいえば奇跡的な状態を保っている。彼女の指導で私は西医学と出会った。

それ以来私は全く服薬していない。しかし朝の地獄は二度と私を訪れていない。

この三十年余りの「医療」は何だったのか？

私の青春を返せ！ と叫びたくなるほどの効果が西医学によってもたらされた。

西医学に基づく養生はかなり手間がかかる。昨年十月に西医学の医師に診察を乞い、指導された処方に基づく私の日課をご紹介します。

まず睡眠は平床・硬枕とあって、板の上で眠り枕はちようど丸太を半分に分切ったようなもの。慣れない内はなかなか眠れない方も多いらしいが、私はむしろ気持ちよく、とくに硬枕を使うようになって肩こりがとれた。

朝起きたら、まず裸療法。ローブリールというフランス人の考案した療法で、窓を開け裸になり、テープに合わせ毛布や布団を着たり脱いだりする。裸の時は体を動かし、着ているときは安静にする。裸の時に西式の体操をす

る。金魚運動、毛管運動、合掌合蹠運動である。この裸療法が三十分。裸療法が終わるとやはり西式の背腹運動と  
いうのを十分間。

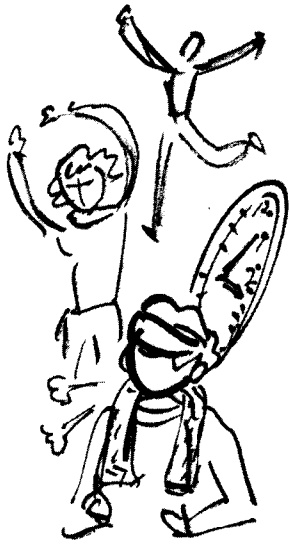
緩下剤である水酸化マグネシウムを飲む。朝食は有害であるというのでとらない。

夜また裸療法、そして温冷浴と言つて、水と湯を交互に入る入浴法を行う。

食事は基本的に小食が原則、あまり脂っこいものや肉を大量にはとらない。主食は玄米をお粥にしたものか、あるいはふすまの入った黒パン。一日に生野菜二五〇グラムから三〇〇グラ

ムを二食に分けてとる。生野菜は葉と根を半分ずつ五種類を、ミキサーで泥状にすることになっている。そして生水と柿茶を毎日各一リットルずつ。

医師には裸療法および各種体操を、一日三回という指導をされているが、どうしても三回はできないでいるし、水もなかなか一リットルはとれていない。生野菜も泥状にするのは夕食だけで、昼食は刻んだままで食べている。時間のない時はサンスターの「おいしい青汁」ですますこともある。ちなみにサンスターの社長は西医学の信奉者で、この青汁は多種類の生野菜が入っ



ているのでお勧め。もつとも何といても自家製で生野菜をとるのにはおよばないが。

以上をきちんと毎日繰り返すのは、かなりの意志と信念が必要なことはご理解いただけるだろう。仕事で出張が重なったりしてこの日課が守れなかつたり、あるいは好きなもの食べ過ぎたりすると、確かに体調が乱れるので、それなりに効果を身体で納得することができると。

## 西医学とは

西医学とは西勝造という人が戦前に公にしたもので、彼は医師ではない。戦前および戦後すぐはかなりポピュラーだったので、お年を召した方はご存じかもしれない。最近現代医学の行き詰まりから再評価が進んでいるようである。

西医学の理論はかなり難解で、私自身完全に把握していない。したがってこれから述べることは友人からの指導

と、西医学の医師の本を読んでの私なりの理解である。

現代医学がそれぞれの臓器をバラバラにとらえ、対症療法に終始しているのに対し、西医学では身体を統一体として一つのものと見て、病の原因を取り除くことで万病に対処する。

さらに「症状即療法」と考え、症状こそを回復の過程として、自然治癒力を支える養生で症状をむしろ出し切り、本復すると考える。

これだけでは代替医療はどこでも言うことだし、西洋医学でも、たとえばナイチンゲールは症状こそ回復の過程であり、症状が苦しいはずはなく、苦しいとしたら看護の仕方が悪い、と述べている。西医学では自然治癒力を支える養生として、具体的な方法を綿密に述べているところがユニークかもしれない。

人間はまず直立することにより、文明生活に入ったのだが、それゆえ本来四つ足で歩いていれば梁としての機能を持つている背骨を柱として使うこと

になった。必然的に背骨のゆがみや脱臼が人間には付いて回ることになる。さらには直立による内臓下垂により、腸が屈曲し腸壁にしわができて宿便が生じる。

また食べ物に火を通して食べるようになり、人間が体内で生産できないビタミンC不足に陥る。さらに生食であれば少量で済む食事が、火食により必要栄養量を満たすために大量にとる必要が生じ、これが内臓に負担をかけて老化を早める。

そして衣服をまとうようになり皮膚の機能が不完全となってきた。皮膚呼吸能力の低下は体内の酸素欠乏、一酸化炭素の増加をもたらしガンの原因となる。

四つ足で歩く動物の生活から、あまりにかけ離れた人間の文明生活が人間にして病の器としたのである。宿便、体内の酸素不足、背骨の脱臼、ビタミンCの欠乏をすべての病の原因とするのが西医学だ。

西医学ではこれに対して様々な方法

で対処する。

背骨の脱臼に対しては、平床、硬枕、種々の体操。皮膚機能を高めるために裸療法や温冷浴。宿便を除くために小食や断食、水酸化マグネシウム（西医学で唯一使う薬）、生野菜、生水の補給。体操は腸の動きをよくする目的もある。ビタミンCを補うために柿の葉茶、生野菜。

## 西医学と精神病

西医学を実践する医師の本を読むと、さまざまな難病からの回復例が報告されており、「ほんとかね」と眉唾に感じる人も多いかもしれない。わたし自身、すべての医師に見放され死しかないと言うところで西医学と出会ったわけではないので、他の病気のことについては分からないとしか言えない。しかし私が一番魅力を感じたのは西医学の精神病に対する考え方である。

いわく「精神などという匂いも形も

ない形而上学的存在が病気になるはずがない」。

私が発病したのは十四歳頃、現象的には登校拒否、本人としてはともかく疲れて疲れて、動けない、でもまわりは学校に行けと強要するので死にたい、という自覚症状だった。

内科的にはどこも悪くないということとで児童精神科にかかったが、その医者というのは、精神的自立ができておらず母親に依存している、母親の過保護が問題だということ。そして甘えているから学校に行けない、はってでも学校に行け、スポーツをしろ、というのが彼の方針だった。

この医者の言葉はいまだに私にトラウマとして残っており、私自身今のうつ状態は、実はこの児童精神科医の医療ミスによる後遺症ではないかとすら考えている。

内科の病気ならこんなことをいう医者とは一人もいないはずなのに、精神科と名が付いたとたんに、心構えや、性格人格を非難される。

そして「精神療法」という心理的拷問にかけられることになるのだ。

こうした精神医学に対して「精神が病むはずがない」という西医学は何と魅力的かつ明白だろう。

もちろん現代医学でも生物学的精神医学が主流であり、精神病は脳内化学物質の代謝異常が原因とされる。うつ病でいえばセレトニンの代謝異常といわれている。しかしなぜ代謝異常が生じるのか原因は不明であり、対処としては抗うつ剤で化学物質代謝異常を補い続けるしかない、という結論になる。

そして生物学的精神医学においてすら、うつ病は抗うつ剤ですぐ治るはずなのに、治りにくいのは人格障害であるか、職が保障されていたり親がかりであったりして甘えている人間である、などという発表が学会でされ、相も変わらず人格非難がなされている。

たしかに病気一般において社会学的心理学的要因は無視できない。たとえばホームレスの結核において、社会的要因は無視できない。血糖値やコレ

ステロール値も心理的ストレスで増大するといわれている。精神病においても同じことは言えるであろう。しかし精神病に対してはあまりに心理的側面が強調されすぎており、そしてそれは患者の人格非難へと直結している。

西医学では精神病は宿便が原因であり、宿便の結果左右の脳をつなぐベンチ体というところの血行不良が生じている、とされている。もちろんこれは科学的には証明されていない仮説であるが、仮説といえど脳内化学物質代謝異常も仮説である。経験的に向精神薬が症状を抑えているということだけが根拠である。同様に経験的にいえば、宿便がなくなれば精神病が治るといって報告は、西医学でもいくらかもある。

## なぜ西医学

「精神は病むはずがない」という言葉の魅力もさることながら、西医学のよいところは、病気は医者が治すのも薬が治すものでもなく、ただ自然の

みが治すという点であろう。

自然治癒力を支えるための努力は自分次第なのだ。専門家である精神科医にただ従って依存していくのではなく、まさに日々の自分の具体的努力が治癒につながるという点、そして一生薬を飲み続けなければならないという悲観的な傾向が精神医学にはあるが、それに対して明確に治癒への道筋を示している楽観性が、私を力づけてくれる。

まさに私たち患者をエンパワーしてくれる医療である。

現代精神医学も仮説、西医学も仮説であるなら、少なくとも自分が納得できる仮説に基づき自分の努力で養生していきたい、というのが私が西式に取り組んでいる基本的姿勢だ。

そして現実に私の症状は劇的に改善している。

ただこの文章を私の仲間である「精神病」者が読んでいるとしたら、付け加えなければならないことがある。私の先輩が発病した時代とは異なり、今

らない」などと言わないし、実際現代医学で十分治り普通の生活をしている「精神病」者はいくらでもいるし、特におつ病など短期間の服用で回復している例はあまたある。第一西医学の煩雑さに比べれば、薬を飲むだけで済む現代医学の方がはるかに安易であるし、手っ取り早い。とりわけ症状を抑える点では、現代医学は西医学の比ではないだろう。

何らかの医療観や哲学あるいは現代精神医療に対する徹底した不信感がなると、西医学の実践は続かないだろう。

さらに健康法として西医学を採用するならともかく、何らかの病気を治そうとするなら、西医学を採用している医師の指導は欠かせない。

とりわけ薬を飲んでいる場合は、いきなり断薬すると離脱症状から最悪の場合には死に直結する場合もあるので、医師の指導は不可欠である。

症状即療法の考え方から、一時的な症状の増悪は当然ありうるので、その

の点はいくら強調してもしすぎることはないと思う。

西医学に取り組むには以上のような条件が必要だが、試してみる価値は充分あると考え、読者にご紹介した次第である。

#### 参考文献

『西式健康法で薬に頼らず病気を治す』

渡辺正著 K K ロングセラーズ

『背骨のゆがみは万病のもと やさしい西式健康法』

甲田光雄著 創元社

『家庭でできる断食健康法』

甲田光雄監修 創元社

『小食が健康の原点』

甲田光雄著 たま出版

『断食・小食健康法』

甲田光雄著 春秋社

(え・カステラネンコ)



女性の再就職

再就職アドバイザー 原田静枝 著



原田静枝著  
毎日新聞社  
本体1500円+税

静岡県浜北市 高橋ひろみ

週に一度はテニスに行きたいし、土日はやっぱり休みたい。月に四〜五日はボランティアに行かなきゃいけないし、月に二回のおけいこ事もやめられない、これが私の言い訳。言い訳をしているうちに、とうとう四十歳になってしまった。末っ子も中学生になり、いよいよ時間を持って余すようになって、気付いたら、私は職がない。最近友達に会うたび、

「誰か私に仕事を世話して!」と言うのだけれど、誰も本気にしてくれない。

こんな私だけれど、この本を読んでも目が醒めた。半端なブライドで仕事を遠ざけていたのは私自身だ。はつきりとお金を得ることも大切と認め、最初から「満足できる仕事でない」といやだ」とこねるのはやめよう。

再就職アドバイザーの筆者は、二十年に及ぶ取材を通して様々な再就職を見てきた。その経験から、「小さい仕事でもまずやってみよう。一区画の切符を買って出かける気安さで、出来ることから始めてみよう。」と励ましてくれる。チャンスは前髪しかない、見送ったらおしまいだけど、一歩足を踏み出さなければ、その前髪にさえ出会えないのだ。

この本には資格の紹介、具体的な求職活動の様子、面接での注意から、家庭内での問題解決のヒントなどなど、再就職のための情報がどっさり。なにより、再就職を果たした先輩達の体験談は、読むだけでも力になる。(それに比べてなんて私は甘いのだろうと、自分に嫌気がさしてしまったのも事実だけれど……)

もう少し早く、もつと気力のあるときにこの本と出会っていたら、私の人生変わっていただろうな。だから特に、再就職を考えている子育て真っ最中の若いお母さん達に、お薦めしたい。もやもやした気持ちですっきりして元気になりますよ。

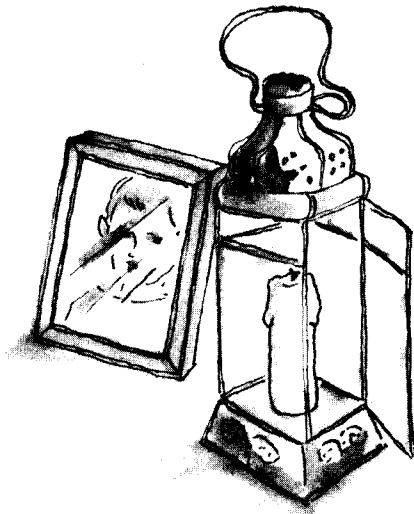
この本の中で自分と重なる人と出会って、そのパワーをいっぱいもらってください。

# リラの花 桜の花

浅野素女

この夏も、息子のギョームは、父親アダムと二週間を田舎で過ごしてきた。

二年前の三回目の裁定で、ようやくアダムの面会権に決着がついた。ギョームは、二回に一回の週末とヴァカンスの半分を父親の元で過ごすことが、家庭裁判所の判定で決まった。父親の面会権として、これはフ



ランスではごくごく一般的な判定である。フランスの夏休みはたつぷり二ヶ月ある。だから本当は一ヶ月の別離を余儀なくされるところだが、去年は初めてだったので、二週間ということで同意してもらった。今年も、互いの事情で、残りの二週間は夏休み後の週末で振り替えるということになった。

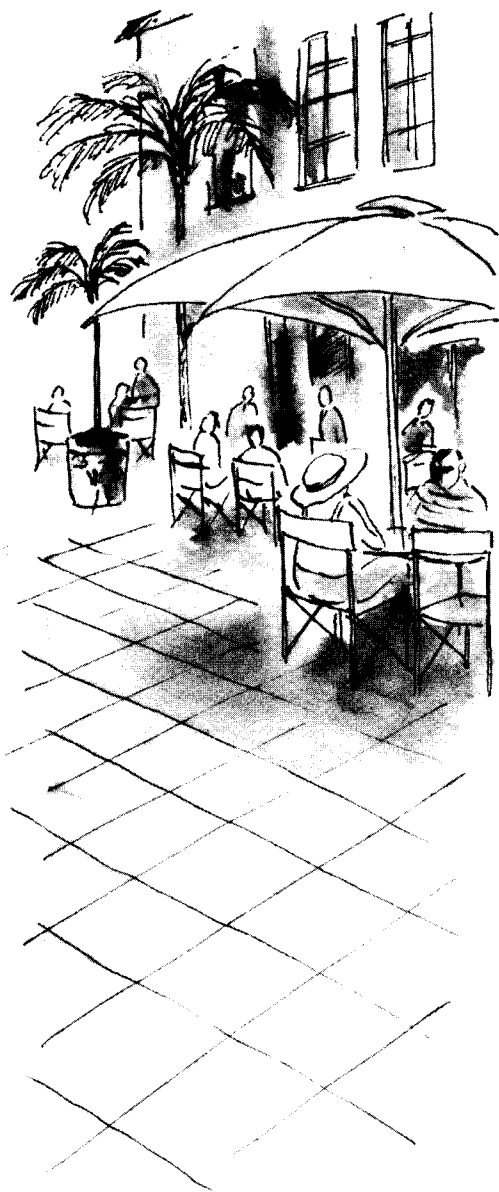
夏休みばかりか、とにかくフランスの学校はしょっちゅう長期休暇がある。だいたい、二ヶ月に一回くらいの割りで二週間のヴァカンスが訪れる。その半分といえは、かなりの時間である。

私とアダムの場合、結婚していたわけではない。アダムは家庭のある身だから、私たちといっしょに暮らしていたわけでもない。ギヨームが四歳になった時点で、まだ認知もされていなかった。

私たちが決裂した時はそういう状態だった。だからいっそう、判決は理不尽に思われた。フランスでは、

結婚していいようがいまいが、法律上の父親であれば、同じ扱いになるのだ。私の弁護士も言っていたが、最近の家庭裁判所の判定基準は、父親に有利に働いているようだ。子どもはこれまで一度も父親と暮らしたことがありません、と主張しても鼻も引っかけてもらえない。父親が求めれば、裁判官はその面会権を制限する理由はないのだ。

子どもの前から姿を消してしまふ無責任な父親は多い。憎しみや恨みといった感情に流されて、父親を子どもの人生から抹殺しようと画策する母親もたくさん



いる。また、かつては、子どもにとって母親といっしょにいるのが一番、という母親偏重主義のもと、父親の権利があまりに軽んじられてきたというのも事実だ。そうしたことへの反動もあって、子どもの世話をしたいという父親は裁判官に歓迎されるし、面会権は厳密に守られている。個々の細かい事情など、考慮に入れてくれない。だいたいこの手の裁判は、二十分くらいで片をつけるのがふつうだ。裁判官にとっては、父親か否か、共同親権があるか否か、そうした事実関係しか重要ではない。非情ながら、裁判とはそういうものだ。

どうして裁判になったかという点、少々話は長くなる。しばらくここで、別れた後の男女のごたごたの経過を追わねばならない。

私の「浮気事件」がきっかけで、私はアダムとの関係をきっぱり清算する決心をした。取り返しのつかない事態に追い込まれなければ、私は彼と訣別するきっかけが掴めなかった。無意識のうちに自分を窮地に追い込んでいたような気もする。

訣別から数カ月後、アダムはギヨームを認知したいと申し出てきた。そうすればまだ私と縋りが戻せるとも思っているのだろうか。そう内心疑いながらも、彼が父親なのだから当然のことだ、と思って同意した。認知されたことによって、ようやくギヨームは、半

分フランス人であると正式に認められることになった。父親がフランス人であるなら、日本のパスポートにも *GiYome* でなくて *Guillaume* という名前の表記が認められる。それは喜ばしいことだった。

認知に引き続き、アダムは、今度は共同親権を認めてほしいと申し出てきた。これを拒否していれば、その後が続く長い裁判沙汰は回避できたはずだが、後の祭。彼に共同親権を認めてしまった。

私は、子どもにとって父親は母親に勝るとも劣らず大切なものだ と確信していたし、いまでもその確信は変わらずにいる。個人的な経験や「フランス家庭事情」の取材を通じて、母親が父親を無視したり、「ないこと」にすることの弊害もとことん痛感していた。子どもには、ちがう性を持つふたりの親が必要だ。子どもはふたりの親の間で、自分のアイデンティティーをつくってゆくのだし、ひとりの親が、子どもにとつての「すべて」になってしまうことは、実に危険なことだ。

父親の問題については、いずれ後、もう少し深く考えたい。その時は、ギヨームを育てることに自分でも責任を持ちたいというのだったら、どうぞどうぞ、という気持ちだった。

「何である時、相談してくれなかったの」

自身、夫と別れて娘をひとり育て上げた友人は、後にこう言つて私を咎めた。共同親権にしてしまうと、

教育、宗教、病気の時の処置など、子どもにかかわる大きな問題に関しては、双方の同意が必要となる。私の一存で勝手には決められないのだ。双方が敵対している場合、意見の一致を見ることがほとんど不可能に決まっている。争いの原因をわざわざ招くようなものだ。そのたいへんさがどんなものか、私にはわかっていた。いなかっただ。

それにしても、なぜ、アダムは私との別れが決定的なものになった後で、ばたばたと認知や共同親権を求めたきたのか。それは、私が彼のもとを去ったことで、突如、自分以外の人間が父親になることも可能なのだ、という事実が気がつかされたからだと思ふ。

彼の当時の手紙を読み返すと、君を喜ばせたいからではなく、君のような女が母親では、自分の居場所がわからない子どもになってしまうから、というようにことが書き連ねてある。果してそれだけだろうか。

私の友人が、ある時、アダムに向かって「ギヨームはしよせん私生児じゃない」と、正面切って言った時、彼の顔色がさっと変わった。私生児というフランス語には、雑種という意味もある。社会の目から見れば、ギヨームは血統書のない雑種、つまり私生児以外の何者でもないのに、それを言葉にすること、つまり現実を直視することを、アダムはずっと拒否してきた。

私が彼とつながっているうちは、子どもともつなが

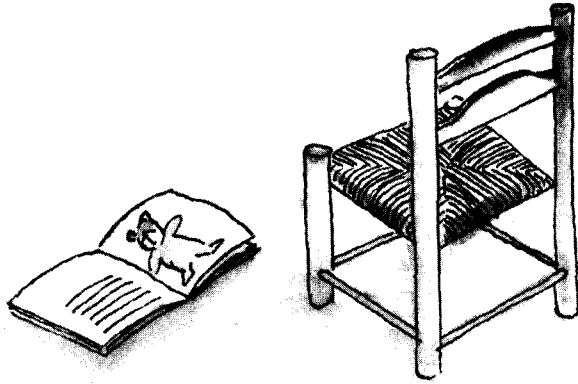
っていられた。しかし、私と切れてしまったら、まさに彼と子どもの間には何にもない。子どもが私生児であるという事実には、彼はその時はじめて向き合わせられたのだと思ふ。

アダムは、ギヨームが三歳くらいになった頃は、比較的定期的に会いにくるようになっていた。毎日、五分でも、顔を覗きにきた。事実として父親をやっていたら、そのことは認知という形式など凌駕すると、彼は豪語していた。一見、本当のようである、それはやはり嘘だ。愛情をかけるのと、社会的な認知と、ふたつは別のことだ。どちらがどちらを兼ねるといふものではない。ふたつの間に優劣があるわけでもない。男女の間のことならともかく、子どもに関しては、ふたつがそろって、ようやく親であると言える。

私は私で、子どもにとって父親の存在が必要だと、ひしひしと身にしみて感じていた。だから、与えられるものがこれだけなら、文句を言わずこの状況に甘んじよう、その方が得だ、とどこかで自分をごまかしていたに違いない。双方の生き方の帰結として、破局は当然のことだったろう。

決別後、私はさまざまな形で、アダムから精神的なリンチを受け続けた。言葉の暴力というのは、たしかにある。

私と口を大きくことをいっさい拒否し、その替わり書



面と告げ口で、アダムは私を徹底的に攻撃した。そしてそれは、三年も四年も続いた。まさにハッカーである。三年目くらいから少し落ち着いてきたが、どうやらそれは裁判官の目を気にしてのことらしい。手紙は証拠となつて残るから、場合によっては不利になる。理由はどうかあれ、第三者の目を気にして言葉を抑するなら、それはそれで喜ばしいことだ。裁判官という赤の他人の視線によつて「言つてはいけないこと」の境界を引かれなないと、歯止めなくどこまでも逸脱してゆく人だということを、私は思い知らされる。

彼は文学にも通じている人だったから、なかなか高尚な言い回しで、人の心をずたずたに引き裂くことに長けていた。裏返せば、それは彼の心がずたずたに引き裂かれていたからで、あれは彼の断末魔の叫びだったのだ。送られてくるファックスの文中には、私の知らない高度なフランス語の罵詈雑言が飛び交い、時には辞書を引かされるはめになり、あれでずいぶんフランス語の勉強になった。いまになっては、そう思うことができる。

しかし、当時はとてもそんな余裕はない。投げつけられる言葉のひとつひとつにまともに傷ついていた。最初の長い手紙をもらった時など、あまりのシヨツクにびりびり破いてごみ箱に投げ捨てた。自分が懸命に生きてきた歳月に泥を塗られるのは、誰にとつても耐

えがたいことだ。しかし、気を取り直して、私は泣きながらごみ箱から紙片を拾い集めると、震える手でそれをセロテープで接いでいった。こうした手紙をとっておけば、いつか何かの証拠になってくれるかもしれないと思ったのだ。

男女の別れに罵声や涙はつきものだ。だから、当初は、これも仕方ないことなのだと思いますようにした。しかし、彼の攻撃は異常なほど執拗だった。私がいかにふしだらな女であり、だめな母親であり、平気で嘘をつく信頼のおけない腹黒い人間であるかということ、私の周囲の人間にことごとく言いふらして回った。私の親にまで手紙を書いた。私がほかの男性と関係をもったという私の「不埒な行状」を、そんなこととはまったく関係ない友人にまでふれ回ったりした。息子のベビーシッターや、私が短い間関係を持った男性のもとを、日本語の通訳同伴で訪れ、私の行状を「調査」し、みなを答を書面にして、それにサインさせるといふ探偵まがいのことまでやった。

私、子どもを他人に預けて遊び回っている無責任な母親だと証明しなかったのかもしれない。しかし、女がたつたひとりで子どもを育てている時、他人の手を借りずに育てることなどできるだろうか。外国住まいの私には、頼れる家族もなかった。恋人に会いにくくような場合にも、もちろん子どもを預けなければならぬ。しかし、アダムが私に会いに来ていた間は、一体だれがアダムの子どもの面倒を見ていたのか。自分の行動は省みずに人をそこまで批判できるのか、私には不思議で不思議で、ただ哑然とするばかりだった。

こんなこともあった。認知や共同親権に続いて、今度、ギョームの姓を私の姓から自分の姓に変えたいと言ってきた。私が時期尚早として拒否すると、脅迫に移った。私の社会保障手当で不正受給の事実を訴えると脅すのである。これは最大のショックだった。

私は、その頃、劇場関係者やテレビ関係者など、非定期雇用に関わる者のための社会保障システムに加入していた。当時、私はテレビの仕事から手を引いていたが、私の滞在許可証更新の時期と重なっていたこともあって、そのシステムに引き続き加入していた方が手続き上、楽だった。それで私の収入を、彼のプロダクション会社を通じて、給料という形で支払ってもらっていた。形式だけのことから、不正といえば不正である。

異国に住む者なら、こうした行政上の問題で誰かの助けを仰ぐことが、一度や二度は必ずあるものだ。しかも、アダムの強力な勧めと協力があつてやったことだった。それを、反対に訴えるというのだ。私を長年、守ってくれていた人間が、私を滅ぼそうとしている。この脅しによって、私のうちにいくらか残っていた彼

に対する信頼のかけらは微塵に砕け散った。

「ユダヤ人である彼が、人を『密告』しようなんて、どうかしている」と、共通の友人であるアシッド医師は唸るように言った。アシッド医師もユダヤ系で、家族のほとんどを強制収容所で失っている人だ。アダムを知るほかの友人たちも、彼の数々の行状に、「なんであの頭のいい人が、そんなみっともないことを……」と信じられない顔だった。

私を突如、失って、彼は錯乱状態に陥っていたのだろう。まさか、私が彼を捨てるとは思っていなかったのだ。まさに、彼は飼い犬に手を噛まれた。そう、私は彼の「飼い犬」だったらしい。

アダムは「飼い主」としては、最高の相手だった。従順を誓えば限りなく守ってくれる人だった。しかしひとたび、自分に牙を向けた相手は、世界の敵として攻撃し、どこまでも指弾する。「もしかして自分が悪かったのでは」などとはちらとも思わない。自分はいつでも犠牲者の役で、それを正当化するためのシナリオをあらかじめしっかり組み立ててから攻撃を始める。シナリオを書くのは彼の仕事だから、得意分野だ。

アダムだけではなく、人間だれでも、自分に都合のいいストーリーを組み立てて、それを真実と思つて暮らしている。そうしておけば安心だし、自分を守れる。

私も、アダムとの十三年間、そうやって生きてきた。いまこうして文章を書きながら、私は自分がそうしたストーリーから本当に抜け出すことができたのか、自分を試しているのかもしれない。

一回目と二回目の裁判の間のことだった。裁判官の勧めで、専門の民間団体による調停を受けていた時のこと、調停員ふたりを交えて話し合いのまっ最中、彼がこう叫んだことがある。

「僕は生き延びなきゃならないんだ！」

前後の子細は忘れたが、こう叫んだ時の彼の悲痛な姿を、私は忘れることができない。いったい何だつてそんな芝居がかった言葉が口を突いて出たのか。勝手な解釈はしたくないが、あの言葉は、自分をごまかしながら、何とか統一体としての自己をぎりぎりのところで支えている者が、思わず洩らしてしまった苦悶の叫びのように響きわたった。あの時、私は、彼という人間に心底、哀れみの情を抱いた。

アダムは父親を早く亡くし、強烈なファザー・コンプレックスを抱えていた。彼にとって、子どもの中に自分の姿がどう映るかは大問題だった。妻を裏切り、子どもを裏切り、愛人をも裏切ったことがある男が、いや、自分は誠心誠意みんなを愛してきたんであって、すべて悪いのはあの女だ、と必至に言い募る。自分を欺いていることすら忘れて、自分の作ったストーリー



に酔ってしまふ。その姿の哀れさを、私は自分の哀しさとして受け止めていた。ストーリーが崩れたら、彼自身が滅びてしまふ。そうだった、生きるか死ぬかの瀬戸際に、彼は立たされていたのだ。

認知の後、アダムはアダムの仕事仲間のピエールを通して、「同意書」なるものへのサインを求めてきた。その草稿を見せたいということで、ピエールがうちへ乗り込んできたことがあった。彼はアダムに代わって、私にあれこれ質問を浴びせた。「ギョームは本当にアダムの子なの？」とまで、私に聞いた。疑っているなら、認知などせねばいいのに、とそれを聞いた私の友人は憤慨した。

その「同意書」は、ひどい代物だった。子どもは、母親と住む。子どもには、自分が会いたい時に会う。養育費は自分が適当と認める額だけギョーム名義の口座に振り込む。養育費の請求や面会権を制限するために、絶対裁判を起こしてはならない。教育その他の重要事項には、双方の合意が必要云々。

要するに、アダムは私にしていたのと同じことをギョームにもしようとしていた——会いたい時、自分の都合のつく時に会う。経済的義務は負わない。あげたものは義務ではなく、善意としてあげる。彼の愛情の定義とは、そうしたものだ。

サインしてしまつてからも事態は悪化の一途を辿るのだが、友人の勧めもあつて、私は気を取り直して民間の司法相談に赴いた。その時、この「同意書」を相談員に見せた。女性相談員は呆れたように言った。

「なんてマツチヨな人なの！ あなた、ばかにされていきますよ」

呆れたことに、他人に言われるまで、そうは思わなかった。十数年の歳月の間に、私はまさに精神的な彼の「飼い犬」になっていたのだ。もちろん、彼の言動はひどい。しかし、そうした「暴力」をはね除けるための力を、前もって封じられてしまつていた。そのことに気づいて私はぞつとした。

ドメステイック・ヴァイオレンスを受けている女性の大半が、「お前はだめだ」と言われ続けているうちに、本当にそうだと思ひ込んでしまつて、伴侶の肉体的、精神的暴力の魔手から逃れられなくなると言われるが、私も少し似た状況だった。自分のイメージを徹底的に汚されて、それがおまえだと繰り返して耳元でなげられて、私は人の足で踏みつけられて喘ぐみみずの姿よりも、もつと惨めな自己嫌悪の淵にのめりこんでいた。

「何で裁判を起こさないんですか」

相談員は言った。第三者から見れば、養育費をもらつて当然だった。好きな時いつでも子どもに会いに来

るんでは、私の生活が成り立たない。面会権もはつきり決める必要がある。他人の言葉に促されて、私は過去をひとつひとつきっちり清算していかなければ、新しい生活もあり得ないということを自覚してゆく。その時から、私は資料を整え、いつでも裁判を起こせるよう、準備を始めた。

しかし、それはしばらく後のことで、その時は状況に流されて「同意書」にサインしてしまった。とにかく攻撃されてばかりの、このひどい状況から抜け出たい一心だった。彼の気持ちを落ち着かせたかった。

アダムとピエール二人が待ち構える所にひとり出て行くのはいやだった。ピエールという、完全にアダムの側についている証人がたつたひとりでは、不公平だ。それで、残っている力を振り絞って、私の側としても証人を立てたいと申し出た。立ち会ってもらったのは、先にも触れた私たち共通の友人で、私のかかりつけの婦人科医であるアシッド医師だった。

実は、アダムはアシッド医師に、ギョームの受胎時期に関する証言を求めて、断られていた。彼は、そんなことまでしたのである。友人であつても医者なのだから、医療の秘密保持の大原則を破るわけにはいかない。もちろん、彼はアダムの要求をはねつけた。

その後も、アシッド医師は影にひなたに私を支えて



くれた。彼の毅然とした態度は、ほろほろの私にとって貴重な支えだった。彼は、感情に流されず、毅然とした態度で闘うということを私に教えてくれた。

アダムは、私が彼をだまして故意にギヨームを孕んだと、私を弾劾していた。「同意書」の件で、私がピエールに尋問まがいの質問を受けた時、私がそのようなことを口走ったからだ。実際の事情はもともと複雑だった。私自身、どうやってギヨームがやってきたのか、わからない。

アダムが一時期、私の子どもを望んでいたことは以前に書いた。その時は、私はその気になれなかった。彼の熱意に負けて同意はしたものの、結果的には子どもはできなかった。

私が子どもを夢見たこともあった。私たちの関係の綻びが見えてきた時期、関係を建て直すことを願い、彼の子どもを持ったなら、という考えが脳裏を過ぎったことは一度ならずあった。私はその事実罪悪感を感じていたから、そう思ったことをたしかにピエールに言った。しかし、これまた不思議なもので、自分でほしいと思う時には子どもは授からないのである。子どもというのは、いつも思いもけない時にやってくる。どうやら、人間が勝手に決める範疇のものではないようだ。

それに、いつどうしてギヨームを授かったのか、そ



れをとことん突き詰めようとしたら、性行為にかかわる非常に個人的なことを語ることになる。私は相手がピエールだろうと裁判官だろうと、それだけは語れないし、語る必要を感じない。

アダムは、私が彼に黙って意図的に妊娠したという大前提のもとで、彼のいっさいのストーリーを構築していた。つまり、彼は被害者で、彼自身にはいっさいの責任がないというところから、ストーリーを始めたわけである。

最初に見せられた「同意書」の草稿には、私が勝手に妊娠して勝手にアダムから離れたのだから、私は裁判を起こすことができない、という文まで挿入されていた。これでは個人的な糾弾書である。当然、抗議してその文は削除させた。

さて、「同意書」にサインした数日後、今度は共同親権行使の書類に、裁判官の前でサインした。裁判官の部屋を出た時の光景を、私は決して忘れないだろう。

アダムは私の腕を強く掴むと、憎しみに歪んだ顔を近づけてきて、目をぎらぎら光らせながら、「これで君たちは、僕の許可がなければフランスから一步も外に出ることはできないんだよ」と、私の顔に吐きつけるように言った。

海外に行く時は、もう一方の親の同意を得るということになっている。夫婦の国籍がちがうことなどごく

当たり前のフランスのこと。外国に子どもを連れ去って、帰ってこない親もいないわけではない。しかし、休暇で私たちが日本に一時帰国しようという時に、権利を振りかざしていやがらせをするのだった。いやがらせをするのもエネルギーがいることだから、ほとほと感心してしまう。

彼が指定した書式とやり方で、彼の「ご許可」を仰がなければ、日本には発たせない脅すのだ。すでに書面で、日本行きのこと、連絡先などは知らせてあった。だが、アダムは、空港の国境警備員に宛てて私を告発する手紙を書き、それを私のもとに送りつけてきた。どうやら、私が彼の手を離れ、自由なひとりの人間として行動するのが、彼には耐えられないことのようにだった。

彼はまだ私を支配しようとしていた。彼を突き動かすものは、自分の権威を黄門様の印籠のように掲げて人に認めさせたいという、ほとんど幼児的な欲求だった。これほどのマッチョだとは、別れるまで気づかなかった。あんなにフェミニストらしいことを言っていたのに、人間なんて、知的な上着をまとい変装した、ただの猿ではないか、と私は人間不信に落ち込むばかりだった。何より、人を見抜く目を持たなかった自分の浅はかさにうちのめされた。

彼の攻撃に対する私の対応にも問題があったのは明

らかだ。たとえば、彼が指定した書式で許可申請をする必要が一体、どこにあるのか？ そう言って、堂々と突き返せばいいだけのこと。いちいち振り回される必要はなかったのだ。しかし、ひどいことを言われたり、されたりすると、私はいちいち傷ついていた。

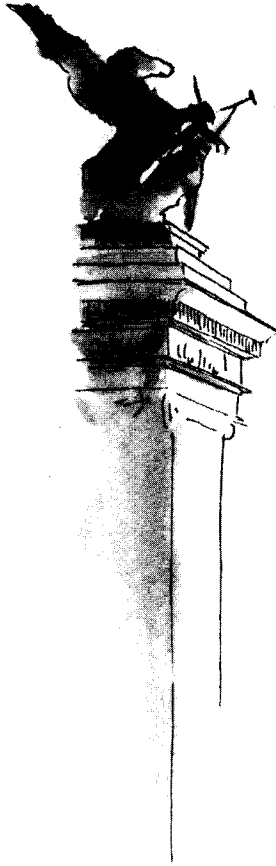
もちろん、私が傷つけば、彼はうれいしい。彼は私を攻撃することで、唯一、私と関わるができる。それが彼の存在理由になっていた。彼の手紙に私が同じくらいの負のエネルギーを注いで返事を出したなら、彼はますます喜ぶ。そうした彼の深層心理の分析は、まったくひとりだっただけでできないことだった。数少ないながら親身に私を支えたくれた友人や、いまは夫となった人と話し合うことで、私は少しずつ事態を客観視し、彼という人間を突き放し、彼の言葉から身を守

る術を身につけていった。

相手に共同親権を譲ってしまったがために、私はそれから三年の間に四回の裁判と、たっぷり十五時間の調停と、子どもも交えた心理学者との協議を何回か、経験することになる。

結果は冒頭に書いた通り、どこにでもあるありきたりの判定にたどり着いたまでの話。しかし、そこにたどり着くまでに、どれほどのエネルギーを投入し、争い、闘っただろう。彼にとってはもちろん、そしておそらく私にとっても、そうした過程が必要だったのだと、いまは思える。

「共同親権の話の時、どうして私に相談してくれなかったの」と言った友人は、いまはこう言っている。



「結果的には、ギヨームのためによかったのかもしれない。認知も共同親権もアダムに認めて、あなたは子どもにとってよかれと思うことはみんなやった。もしそうしていなかったら、いつの日かギヨームが、どうして僕の父親を認めなかったんだ、といってあなたを責めたかもしれない……」

共同親権を認めた以上、協力し合って子どもを育てると、裁判官の前で宣言したようなものだ。自分をずたずたにしようとする相手を、父親として存在させるのは、たいへんなことだ。そんな相手が、子どもにとって自分と同じくらい大切な親のひとりだと認めることは、たとえようもなく辛い。くやししいし、苦しい。「敵」となった相手といっしょに、これから十年以上、子どもを育てていかなければならないのだ。

裁判で「面会権」を獲得したというのに、アダムはすぐには、あれほど騒ぎ立てて獲得した権利を行使しなかった。ギヨームは私とふたりですつと生活してきた。私から力づくで引き離れたらどうなるか、彼にはその結果を引き受けるだけの勇氣を持たなかった。彼の妻が、それまで存在さえ知らなかった子どもを急に認めて、おいそれと家上げるわけもない。それで一年くらいは、土曜と日曜の午後会いにくるだけで、ギヨームを自宅に泊まらせようとはしなかった。「彼の成

長を待ちたい」というのが、表向きの理由であった。

土曜や日曜の午後の敷時間をいっしょに過ごすだけなら、生活とは言えない。映画にでも連れていけば終わる。子どもが喜ぶことをしてやって、それで「いいパパ」でいられる。父親は足長おじさんのように理想化されるだけだろう。

父親の権利をそこまで主張したなら、義務も受け入れて当然のはずだ。子どもにごはんを食べさせ、寝かせ、風呂に入れ、勉強も見て、必要なら叱って、というごく日常的な世話をするのが親の仕事だ。また子どもにとつても、父親が家庭でどんな風に振る舞っているか、その人間関係に触れて、日常の雑事の中で交わってこそ、現実の父親を知ることができる。

詳細は次回にまわすが、結局、私の側の実行使で、ギヨームは週末、アダムの家に泊まるようになった。ヴァカンスも父親と過ごすようになった。つい去年のことである。

ギヨームが不在の初めてのヴァカンスは、ちょうど下のトマの出産と重なった。私の心は新しいのちの誕生の喜びと、ギヨーム不在の悲しみの間で引き裂かれていた。

それまでだって、幼稚園の移動教室などで、一週間くらいギヨームが家を空けたことはあった。仕事があったから、ギヨームを預けるのには慣れていた。だが、

その時はちがった。子どもが「敵」の手に渡ったのだ。私とギヨームはいつもふたりで肩を寄せ合って生きてきた。ギヨームが頼れるのは私しかいなかった。だからこそ、この別離は、自分の一部をもぎ取られるような肉体的痛みを伴った。

いまごろになってなぜ、ギヨームを人手に渡さなければならぬのか。それも、私をこれでもかこれでもかと痛めつけてきた人に、ギヨームを取られなければいけないのか。母親を痛めつけることが、間接的にはギヨームを痛めつけることになっていることにすら気づかない人に。ギヨームは、父と母の間で彼なりの緊張を強いられてきた。

しかも、ギヨームは弟の誕生を誰よりも心待ちにしていた。私が産院に入ってしまったら、学校の後、シヤワーを浴びて頭のとっぺんからつま先まできれいに洗って、それから毎夕、産院に赤ん坊を見に通うんだと、出産の日を指折り数えて待っていた。

父親の家に引き取られたギヨームに無事出産を知らせ、産院も教え、時間があつたらちよつとでも弟の顔を見にパパに連れてきてもらったら、と伝えた。アダムはもちろん、そうはしてくれなかつたし、それどころか、私たちからわざと引き離すかのように、翌日、早々、ギヨームを山の方に連れ去ってしまった。私は産院のベッドの上で涙を流した。

どんな親も、いずれ子離れという道をたどらなくてはならない。しかし、ふつうはせめて子どもが十五歳になるくらいまで「猶子期間」がある。私は子どもが七歳の時、ある意味で子離れしなければならなかつた。ギヨームが父親と過ごしている間のできごとは、ギヨームの報告を通してしか知ることができない。子どもは、あまり多くを語ってはくれない。

「あんまり詰問調で聞かない方がいいよ」と、夫はやはり私に忠告した。

わかつていても、つい根掘り葉掘り聞いて、子どもに無言のプレッシャーを与えてしまう。子どもはおそらく「言つていいこと」と「言つてはまずいこと」を、幼いなりに判断して選り分けている。私はあえて無関心を装わねばならなかつた。切なかつた。自分の子どもが突如、自分の子どもでなくなつたみたいであつた。ギヨームが父親のもとに行つている間、ふと気づくと、自分の精神のバランスを取るために、彼のことを考えないようにしている。彼のことを無理やり、力づくで、頭から追い払っている。ギヨームが帰つてくると、彼のしゃべり方ややさしい行動に、父親の影を感じて苛立つ。

私は不安になつて、夫に言った。

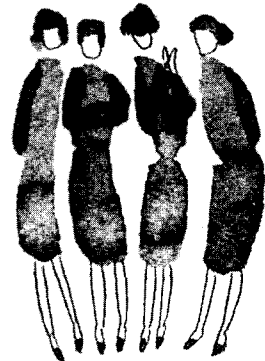
「ギヨームをこれからも愛していけるかしら」

(え・荒田ゆり子)

# ゆれうごく主婦像

家事と仕事のはざままで

分析・田中喜美子  
集計・山下 朋子



「わいふ」では一九九九年六月、二七九号の誌上で、読者のみなさまに主婦の家事時間調査のアンケートをお願いしました。

全部で一〇二通の回答が集まりましたが、集計・分析に予想以上の時間がかかり、発表がお約束より大幅に遅れてしまったことをお詫びします。ようやく結果を発表できる段取りができました。ご協力下さったみなさま、ほんとに有り難うございます。

まず回答者のプロフィールを紹介します。

●年齢 六歳以下の子のいる主婦五四人

その他の主婦（子なしも含む）四八人

●居住地区・首都圏五四人、それ以外の大都市圏十一人、その他十五人、不明二人。

●職業・有職四三人（うち週四〇時間以上二二人）、無職五六人、不明三人。

そもそも私たちがこの調査を思いついたのは、総理府などで調査・発表する主婦の家事時間の推移になっとくの行かない部分が多いからでした。

過去二〇年間の家事労働の軽減はめざましいものがあります。なのにそれが統

計にきちんと反映されていない感じがしてなりません。この際自分たちの手で調べる必要があるのではないか、と思ったのがこの調査に踏み切った動機のひとつでした。

さてここで、アンケートの質問項目の内容を抄録しておきます。1主婦が「家事」と考えているものは何か。2そのうち実際にもっとも時間のかかる家事は何か（家事時間を書き込む時間表つき）。3家事が好きか。4家事を手伝ってくれる人は？ 5家事以外にやりたい活動・



やりたくない活動は何か。の五項目です。  
最初に1の質問について。

問1次の項目のうち、あなたが「家事」  
と思うものにマルをつけ（いくつでも）、  
次にもっとも時間を取られるものを三つ  
選んでカッコのなかに順位を書き込んで  
ください。

- 1 掃除
- 2 洗濯
- 3 片付け
- 4 料理
- 5 皿洗い
- 6 買い物
- 7 家計管理
- 8 インテリアを美しく整える
- 9 客をもてなす
- 10 夫の世話
- 11 子どもの世話
- 12 子どもと遊ぶ
- 13 子どもを塾に連れていく
- 14 子どもを勉強またはお稽古をみる
- 15 ガーデニング
- 16 その他（複数回答）

- 回答。何を「家事」と思うか。
- 1 料理八六
  - 2 掃除八六
  - 3 洗濯八三
  - 4 片付け七九
  - 5 買い物七七
  - 6 皿洗い七六
  - 7 家計管理五五
  - 8 子どもの世話四八
  - 9 客もてなし二八
  - 10 夫の世話二八
  - 11 子どもと遊ぶ二七
  - 12 インテリア二五
  - 13 子の塾送迎二一
  - 14 ガーデニング一八
  - 15 子の勉強をみる一八
  - 16 その他二五（有効回答九一・無回答二一）

### 「家事」の内訳洗ってみれば

ごらんの通り、昔ながらの「料理」「掃除」「洗濯」の三つが「我こそは家事であるぞ」とトップの座を誇っています。その後につづく買い物、皿洗い以下7位までは誰が見ても「家事」そのもので、異論をさしはさむ余地はほとんどありません。

問題は8位以下です。子どもや夫の世話、客のもてなし、ガーデニング、子どもの塾通いの送迎などは「家事」なのでしょう。

「その他」の欄に「犬の散歩」と書き、一日に一時間以上もかかるからこれも「家事」と主張する回答者もありました。「犬の散歩」は意外に多いのですが、これも家事といふべきでしょうか。また育児は家事とは別物なのでしょうか。この問題はなかなか一筋縄ではいきませんが、考察を深める前に、まず「もつとも時間を取られる家事を三つ選んで順位をつける」という質問への回答を見てください。結果は次のとおりでした。

一位 料理四六 掃除二三 子どもの世話一一。（有効回答九一）

二位 料理二九 掃除一九 洗濯二三（有効回答九〇）

三位 洗濯一九 片付け二 買物三（有効回答八九）（各項目三位以下略）

ここでは料理がダントツで一位、そのあと掃除・洗濯とつづきます。

ところが回答者の三日から一週間における時間表の書き込みをみると、意外な現実が見えてきます。項目別に合計し、一日の平均値を多い順から並べてみた結果は次のとおりです。

- 1 料理 九一分（有効回答七九）
- 2 子どもの世話七一分（同 二四）
- 3 皿洗い 三八分（同 五四）
- 4 洗濯 三七分（同 七六）
- 5 片付け 三五分（同 五四）
- 6 掃除 三三分（同 七四）
- 7 買物 三三分（同 五七）

ダントツに首位を占めるのは、ここでもまた「料理」です。次に「子どもの世話」が続きますが、これは回答者の数がわずかに二四人だったので、検討するのは

後回しにして、回答者が五〇人以上ある

ものを見てみると、皿洗いは洗濯より、片付けは掃除より上位にきています。この二つは一見、取るに足らない仕事のように思われがちですが、合計すると意外にも多くの時間がかかっているということなのです。料理以外で「もっとも時間を取られる家事」というのは、洗濯や掃除より実際にはこまごました「片付け」や「皿洗い」であるという現実があまり出されたのです。

さて2の「子供の世話」だけを抜いて以上の家事時間全体を合計し、平均値を出してみると、主婦の平均家事時間は一日当り四時間二七分です。

この数字はいわば、家事の種類を限定して抽象化した平均値です。そのほかに「犬の散歩」など、実際に時間割に書き込んでくださった数字を合計し、一日あたりの実際の平均値を出してみると、四時間四七分となりました。

以上の数字は私たちの実感にかなり近く、なっとくできる感じでした。

## 子育て期の主婦の労働

ここで六歳以下の子どもを持っている主婦たち（今後Aグループと呼びます）五四人の家事時間総数を計算してみましよう。

一日三七分、即ち五時間二七分と全体の平均値をはるかに上回っています。

ただしこの五四人のなかには、フルタイムの仕事を持っている人五人がいます。彼女たちの家事時間の内訳を見ると、買い物と料理が主たるもので、日に二時間前後しか家事をしていない人もあります。

こういう短時間レコードホルダーがいるというのに、Aグループ全体の家事時間が多いのは、当然のことながら専業主婦の子育てにかかる時間の長さが原因です。

ここで一応、「子育て」を「家事」に繰り込んで考えたとすれば、乳幼児を持つ母親の家事は、おむつ洗いなどをはじめ、三大家事の絶対量も増えています。

その上子どもを風呂に入れたり、着替

えさせたり、ご飯を食べさせてやったりのこまごました世話が大変なのです。「寝かしつけ」だけに一時間近くかかっている人さえあります。

こうしてAグループのうち四人（四二%）が「もっとも時間を取られる家事は？」という質問に「子どもの世話」を選んでき、費やす時間は一日平均二二分にも上っています。その上「子どもの世話」は「家事」ではない、と計算に入れなかった人もいるので、その時間まで繰り込めば、Aグループの家事時間はさらにふくれ上がるに違いありません。

さてAグループに反し、すでに子どもの手が離れた時期の主婦たち（Bグループと呼ぶことにします）の家事時間は、老人介護を抱えている人以外は基本的に余裕綽綽です。家事は悠々と済ませ、余暇は読書をしたり、ワープロでものを書いたり、友達と長電話をしたり、お茶をたてたり。このグループの人たちの平均家事時間は二六三分、四時間二三分になっています。

## 有職と無職の差

ここで職業の有無による平均家事時間の差を見てみましょう。

### ●Aグループ（有効回答のみ）

1週四〇時間以上の有職者 五人  
二二九分

2その他の有職者 五人 三七九分

3無職者 二五人 三三三分

### ●Bグループ（有効回答のみ）

1週四〇時間以上の有職者 七人

二〇〇分

2その他の有職者 二四人 三〇六分

3無職者 一人 二二九分

Bグループは全体の人数がAグループより少ないですが、「その他の有職者」数がAグループよりはるかに多いのは、「子どもの手が離れてから働きに出る」という日本の女性労働の構造を示しています。

しかしA・Bグループともグループ2の家事時間は、グループ3よりも多いのです。

週四〇時間以下の主婦の家庭外労働は

家事労働を軽減しないどころか、むしろ増加させているのです。

ここで浮上してくるのが、主婦の家事労働を、他の家族がどれだけ手伝っているかという問題です。

### 家事を手伝ってくれる人は？

今回の調査で主婦の労働時間の総計は全体で四時間四七分であることはすでに見ました。

しかしこの家事時間を家族全体で分担すればどうでしょうか。核家族の家族数平均を夫婦と子供二人とすれば、他の三人が一日に一時間ずつ家事を分担してくれば、主婦の家事時間は一時間四七分ということになってしまいます。

現実はどうなっているでしょうか。

A・Bグループを通じて、家事を手伝う夫は四五人、子どもは二八人でした。

その他義母五人、義父一人、実父一人、実母三人、お手伝いさん二人です。

不思議なことに、週四〇時間以上働く妻の場合、Aグループの夫のほうが、B

グループの妻より手伝う率が少なく、よく調べると夫が単身赴任中であつたり、帰宅時間が遅かつたりと、家庭生活への関りを持ってない状態が多いことが分かります。これに反しBグループの夫で、家事を手伝わない人はありませんでした。

しかし双方を通じて、子どもの家事参加は驚くほど少ないと言えます。一人だけ三歳の子にきちんと家事を分担させている母親がありました。

ただし家事を手伝ってくれる家族がいる主婦の場合でも、全体としての家事時間の減少はわずか二〇分にすぎません。

Bグループで無職の妻の夫が意外に家事を手伝っているのは、五〇代、六〇代の人が多いので、働きざかりの男性より時間に余裕があるからでしょう。子どもは一〇代、二〇代になっている人がかなりいるのですが、この場合も家事を手伝う子はそれほどいません。

しかし全体として見ると、夫の家事分担の内容は実にささやか。ゴミ出し、風呂洗い、買い物ポピュラーな三点セット。その一方に一点豪華主義のようなガ

ーデニングや犬の散歩、休日の料理などが目立ちます。

結局浮き上がってきたのは、例外的場合を除いては有職、無職をとわず、家事のほとんどを主婦が抱え込んでいる現実です。

まれに夫が食事の後かたづけとゴミ出し、子どもは玄關掃きと皿洗いと洗濯ものたたみというふうには、家事分担が生活習慣として確立している書き込みに出会うとうれしくなります。

その上不思議なことに、家族の家事協力は、妻の職業の有無や、子どもの数などという条件とほとんど無関係なのです。妻が専業主婦であろうが、フルタイムで働いているかどうかには関係なく、家事分担のできている家庭はできているのです。

これはいったい何を意味しているのでしょうか。妻の家事の好き嫌いとの関係があるのでしょうか。

ここで問い3「家事が好きか」への回答を掲載します。選択肢は四種類です。

イ とても 口 まあまあ

ハ あまり好きではない 二 嫌い  
有職 イ 二人 四% 口 一六人  
三九% ハ 一七人 四一% ニ 六人 一四%

無職 イ 一人 一% 口 三五人  
五七% ハ 一九人 三一% ニ 二人 三%

(有効回答九八・無回答四)

全体として職業をもつ主婦のほうが、家事が好きでない人が多いようです。しかしその事実と家事分担にはつきりした相関性は見出せません。

決め手はどうも妻の主婦の姿勢にあるようです。意識的にせよ、無意識的にせよ、妻が家庭を自分の支配区域として抱え込んでいるのか、それとも家族全員のものにしていこうとしているのか。そしてその理由はどこにあるのか。

それは大きく見れば、妻自身の長い人生を、彼女がどう展開していきたくいかという意思の問題にもかかわってきます。次にその問題について見ましょう。

### 主婦のしたがる活動

「わいふ」では一九八〇年、「柏サークル」の会員たちが主婦の活動に関する意識調査を行ったことがあります。全部で九六組の三〇代の夫婦を対象に、一三項目の活動内容を列挙し、妻には「やりたい活動」を、夫には「妻にやらせたい活動」をひとつずつ選んでもらったのでした。

今回、この調査を踏まえて、アンケート項目の中にまったく同じ内容の設問をくりこみ、過去二〇年間の主婦の意識の変化を探ってみました。

それがらの「家事以外にやりたい活動・やりたくない活動」です。

最初に前回の結果を述べておきます。

#### ●妻の「やりたい活動」

#### ●夫の「妻にやらせたい」活動

- 1 趣味教養 妻の回答
- 2 読書
- 3 スポーツ レジャー

- 4 収入活動1
- 5 ショッピング・おしゃれ
- 6 ボランティア
- 7 園芸・家庭菜園
- 8 市民運動・消費者活動
- 9 昼寝
- 10 おしゃべり・近所づきあい
- 11 テレビ
- 12 収入活動2
- 13 夫の回答
- 1 趣味教養
- 2 読書 スポーツ
- 3 園芸・家庭菜園 レジャー
- 4 ショッピング・おしゃれ
- 5 収入活動1
- 6 昼寝
- 7 ボランティア
- 8 おしゃべり近所づきあい
- 9 市民運動・消費者活動
- 10 テレビ

13 収入活動2

有効回答総数各九六 妻の年齢・三〇代

注●収入活動1は、小遣いかせぎ程度で家事に支障をきたさないもの、同2は家事が犠牲になっても収入の多いもの、つまりフルタイム職業に近いものです。●同点のものは同じ順位としてくり、次の順位を空けました。中黒印でつながっているものは一項目です。

ごらんのとおり、夫と妻の選択の上位はびたり一致。趣味教養、読書、スポーツの三つです。

ただし三位以下は、妻と夫の間かなりの差があります。妻は昼寝やおしゃべり、テレビ視聴などを好んではないのにおき、夫は昼寝をボランティアより上位に選んでいます。

ところでこの調査のもっとも重要な結果は、「収入活動2」の不人気がはつきりしたこと。ごらんの通りは最下位です。この時の調査では付随的に、「妻のやりたくない活動」「夫が妻にさせたくない

活動」のデータもとったのですが、その最上位も両者とも符節を合わせたように「収入活動2」が占めています。あれから二〇年が経つたいま、何がどう変わっているのでしょうか。

主婦たちは変わったか

まず今回の調査結果をごらんにいれます（今回は夫の意識調査はしていません）。

●妻のやりたい活動

- 1 レジャー 趣味教養 各一六
- 2 収入活動1 一三
- 3 収入活動2 一二
- 4 読書 七
- 5 スポーツ 四
- 6 市民運動・消費者活動
- 7 ボランティア 昼寝 各一
- 8 園芸・家庭菜園
- 9 テレビ 各一
- 10
- 11

12 おしゃべり・近所づきあい

ショッピング・おしゃれ 各0

13 (回答数七六 無回答二六)

実に大きな変化が浮上しています。

一位と二位は前回と同じ傾向ですが、

三位、四位を「収入活動」が占めています。

しかも以前最下位だったフルタイム

職業が四位に浮上しているのです。また

以前は九位だった「市民運動・消費者活

動」と十位の「昼寝」が七位の「ボラン

ティア」と同位に昇格しています。

主婦たちは以前よりはるかに活動的・

社会的になったのでしょうか。

しかし早とちりは禁物。次の表を見て

ください。

今回私たちは、「妻のやりたい活動」

と同時に、「やりたくない活動」のデー

タもきちんと取ってみました。

●妻のやりたくない活動

1 市民運動・消費者活動 一三

2 収入活動2 一一

3 おしゃべり・近所づきあい 一〇

4 昼寝 八

5 園芸・家庭菜園 七

6 スポーツ 六

7 テレビ ショッピング・おしゃれ 各五

8

9 ボランティア 二

10 読書 収入活動1 各一

11

12 レジャー 趣味・教養 各0

13

(回答数七〇 無回答二六)

ごらんの通り、最下位の四つは「やり

たい活動」の上位三つと符合していて、

矛盾するところはほとんどありません。

問題は上位です。

一位は何と「市民運動・消費者活動」。

これは「やりたい活動」では七位に選

ばれています。

そして二位には「収入活動2(家事が

犠牲になっても収入の多いもの)」がき

ています。

これまた「やりたい活動」のほうでは

四位に入っているのです。

このズレをどう解釈したらよいのでし

ようか。

もしかすると二〇年前より「市民運

動・消費者活動」が身近なものになって

いて、それだけに拒否感をはっきり意識

する主婦が増えてきたのかも知れませ

ん。

いずれにせよ、「やりたくない活動」

のトップに「市民運動・消費者活動」を

あげた人は、「やりたい活動」でそれを

上位に選んだ主婦より、よりはっきりし

た意思を持ってこの項目を選んだ、と考

えてよいのではないかと思われま

す。では「収入活動2」での食い違いに関

しては、どうでしょうか。以前の調査で

は最下位だった「収入活動2」が今回は

「やりたい活動」の四位に浮上している。

しかしその同じものが「やりたくない活

動」では二位になっている。この大きな

矛盾！

主婦は二極分解しつつある

現在全体として、主婦の仕事に対する意識は、二〇年前よりはるかにシャープ

になっていることはたしかです。ダブル  
がはじけて、夫ひとりに頼る構造への信  
頼感がゆらいでいるせいもあるかも知れ  
ません。ますます高学歴の主婦が増えて  
きたせいがあるのかも知れません。

そんななかで、以前は最下位であった  
フルタイムの仕事が「やりたい」の第四  
位に上がってきたのは自然なことによ  
うにも感じられます。

「子育て」最中の若い母親の家庭内労働  
はたいへんなものですが、それも人生の  
わずか十分の一の短期間。その時期が過  
ぎて、四時間二七分という基本的家事時  
間を家族の一人ひとりが分担すれば、主  
婦が家にとどまる理由はかぎりなく希薄  
になってきます。

この構造のなかで、主婦たちが以前よ  
りはるかに鋭く、自分の生活を見直さな  
ければならなくなってきたことはた  
しかです。

今回のデータでもはっきりしています  
が、もつとも多くの主婦たちは「収入を  
伴う活動」より「レジャー」を、「趣  
味・教養活動」を好んでいます。しかし

彼女たちを含め、好むと好まざるとにか  
かわらず、主婦たちは全体として、家庭  
のなかにとどまることのできない時代の  
到来を肌で感じているのではないでしょ  
うか。

「収入活動2」が「やりたい」の四位  
に浮上する一方、「やりたくない」の二  
位にも選ばれているという矛盾したデー  
タは、こうした主婦たちの現実を示して  
いるように思われてなりません。

ここ十年ほどの間に、主婦たちの状況  
は大きく変わってくるでしょう。

また、今回のアンケート結果で、家族  
の家事分担については、主婦の有職・無  
職にかかわらず、最も大きくものをいう  
のは、主婦自身の意識であることがよく  
分かりました。現実の構造が変わらなけ  
れば、ふつう人間の意識は変わらないの  
ですが、この点についてだけはいまや  
「意識変革」がものをいう時代がきてい  
ると言えるでしょう。

**お友達に「わいふ」を  
おすすめください**

新しい定期購読者をご紹介くださっ  
た方には、次のように購読期間を延  
長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださる  
ごとに誌代プラス送料とも一号延長。

**「わいふ」年間分をプレ  
ゼントにお使いください**

●結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠  
方のお友達とのコミュニケーション  
にどうぞ。お申し込みいただければ、  
新読者に、贈り主のお名前とプレゼ  
ントのおしらせを同封の上、一年分、  
計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場  
合同様に、お一人につき一号分延  
長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引  
がございます。



# エッセイスト・クラブ

## 常の女

大阪市城東区

布施幸子 (68歳)

先日、和歌山にすむ友人の春子さんと、京都の円山公園を訪れた。京都出身の私が円山公園まで案内し、まず平野家でいもぼうを味わった。平野家は京風の老舗で、京芋と棒だらを煮つけたいもぼうが古くから名物だ。

春子さんと私は同年輩の未亡人である。どちらも七年前余り前にガンで夫をなくした。

「よい人やったわ。私の気ままを許してくれてね。ああ、後悔でしんどいわ、今でも」「私かて同じえ。罰が当たればいいと思うの」

などと言いながら「とろけそうにおいしいこと、しあわせ」と箸はよく動いた。やがて座敷窓から遠く、東の山際に見える長楽寺に気づき、話題はその方へと移った。

長楽寺は、建礼門院ゆかりの寺として名高い。平清



盛の娘だった建礼門院徳子は十六歳で入内、二十三歳で安徳天皇を産み、二十六歳で院号を受けている。だが盛者必衰。壇ノ浦で入水したが心ならずも命をとりとめ出家した。寂光院へ入る前に髪をおろしたのが長楽寺で、そのとき幼帝の形見だった山鳩色の直衣をこの寺に寄進したと伝えられている。

「ほととぎす治承寿永のおん国母三十にして経読ます寺、どんなにお辛かったでしょう」

と私たちは頷きあった。

食後、長楽寺を拝観した。観光客もまばらで静かにつつましい。が昔は大寺であり、修行僧が多かったという。

「今昔物語に『岩になった尼さんの話』があつてこの寺の修行僧が出てくるよね。幸子さん」「そうそう。若い僧が仏さんのお花とりに東山を登ってゆくうち日が暮



れてしもうて」「しかたなく野宿するのね。あくる朝、お経を読む声で目がさめるんでしょ」

声のする方へいつてみたが誰もいない。苔むし茨のからんだ古岩があるだけだ。姿の見えない怪物のしわざかと岩を見つめていると、急に動き出したから驚いた。苔にはひびが入り、茨はちぎれて飛ぶ。そして岩の中から現れたのは六十がらみの尼さんで、泣いていた。

「おうらみませ。長楽寺のお坊さん」

「な、なんで私がうらまれんなりまへんのや」「私は業



の深い女に生まれたが苦で、若いころから岩になる修行を積んできました。やっどこさ古ぼけた岩になれたと満足してましたんや。そこへ男前のあんたはんの色目。ぼうつと吾れ知らず人間に戻ってしもた。どうしておくれやすか？」

「そんなこと言われたかて弱りましたなあ。とにかくにんしてください。この通り」「この年で又はじめからの修行。自信ないけどもつと山奥で一心不乱にやってみるしかおへん」

尼さんは泣きながら更に深山へと去った。『三昧の境に達した尼僧さえかくのごとし。いわんや常の女は十分に罪深さを自覚すべし』といった説話である。春子さんが笑った。「長年の努力が岩砕け？尼さんは気の毒やのに、昔この話を讀んだときは笑えたわ」「私も。同じ尼さんでも建礼門院の悲話とは大違い。六十にもなってお色気が過ぎるって」自分が六十になるなんて想像もつかない年頃だった。

「けど、自分が六十代も後半になってみるとそないおかしな話でもないやんか」

「ほんま、六十なんてまだ若い。ハンサムな人見たら素敵と感ずるのが自然ね」

「この尼さん、還俗したらよかったのに。何ですってねえ、近ごろは奥さんに先立たれた殿方が、茶飲み友達探しにお熱らしいわ」

いつのまにやら大昔の説話が、現代の世相にまぎれている。今昔物語の編集者が聞いたらどう言うだろうか。

「茶飲み友達もええけど、主人以上の男はんはこの世にいないと思うし」

「同感。けど急いでよばよばになる必要はないえ。もうちよつと楽しみたいやないの」

罰が当たればいい、との先ほどの言葉はどこへやら、春子さんと私は「しばしの前進」を目ざし、元気な次の再会を約束して別れた。

私たち、やっぱり罪業の深い「常の女」なのだろう。

## 愛しのズッキーニ

千葉県船橋市 榎 雅子 (38歳)

今年も、ズッキーニの種を植えた。

この野菜に始めて出会ったのは、二十年近く前、大學生の夏休みにバックパッキングで、ヨーロッパを旅行した時だった。

安いレストランしか利用しなかったが、イタリアの食事が一番気に入った。料理の主役ではないけれど、

いつもナスやトマトと一緒にこの野菜が登場した。キユウリの様に見えるが、必ず火を通して調理してあり、口に入れるとやわらかくみずみずしい。淡白だが、ほのかな苦味と甘味がある。おいしかったが、何ものなのか分からなかった。

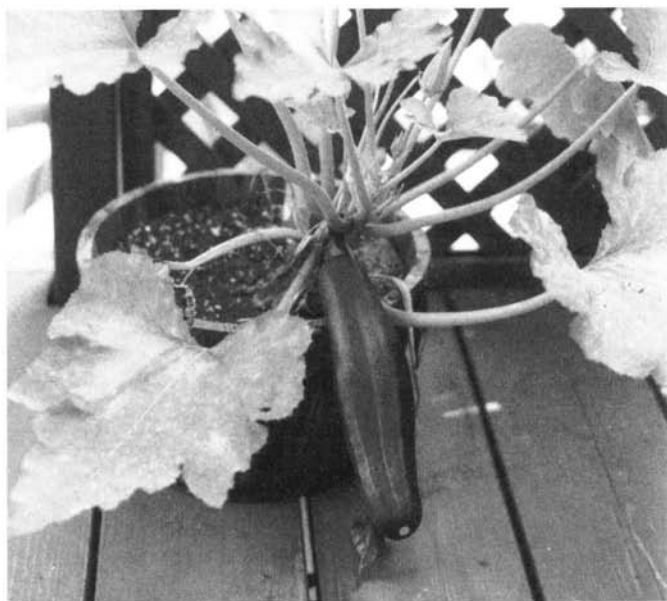
帰国して調べ、この野菜が瓜科の「ズッキーニ」と知った。手にいれたくて、デパートの食品売場、大きなスーパーと探してみたが、見つけれなかった。

五年位前、週末に都内まで遊びに行った時、ついでに立ち寄った麻布の輸入食品専門のスーパーで、予期せずズッキーニを見つけ、大喜びで二本ほど買い求めた。もちろんその日の夕食は、イタリア料理にした。ところが料理の仕方が悪いのか、期待はずれで青臭く、子供達は苦いと言ってベーと出してしまった。

「海外旅行で初めて食べた」という特別な状況だったので、ズッキーニをおいしいと感じたのか、イタリアで食べたものと種類が違うのかと、いろいろ考え悩んだ。

ところが昨年、信州で農園活動もしているエッセイストの玉村豊男氏の「田園の快楽」を読んで、大発見した。ズッキーニについて以下の様なことが書いてあった。繊細な野菜で、表面に傷がつきやすいため、日本の店で売っている者はだいたい長さ一二・三センチの幼果だが、もっと大きい成果の方が美味。大きくなったものは日保ちが悪いので出荷には適さない、と。

「ズッキーニを自分で育てよう」これしか方法がない。大きい園芸店で種を探したら、すぐに見つかった。それも約二十粒入りで、二百十五円と安い。



四月下旬、野菜用の大型プランターに種をまいた。五月に入ると、十三本も元気良く芽が出た。本葉が二、三枚になった頃、間引き、二株だけ残した。

それからは早い。手のひら型の大きな葉っぱがいくつもよきによき伸び、成長の勢いに驚かされる。発芽から三週間めに、黄色の雄花と雌花がつぎつぎに咲くと、虫に任せないで、私の手で受粉させた。あとは、水をたっぷりやって、液体肥料を時々与え、実が大きくなるのを待つ。種の袋の説明書きに、「開花後四日で収穫可能」とあったが、見る度に大きくなっていく。意外と簡単に育つ。

開花から二週間目、成果のズッキーニを収穫した。長さ二十八センチ、直径七センチ。ずっしりとデカイ。嬉しくて何枚も写真を撮った。

輪切りにして、塩、こしょうをし、ガーリック油で軽く両面を焼き、チーズをのせオーブンへ入れてできあがり、愛しいズッキーニに敬意をこめて、彼が主役のメニューにした。今度こそ期待通りの味だった。

二十年近くもかかってやっと口にできた。まさにこの味だ！」と冷えた白ワインと共に一口づつ味わっているそばで、子供達がばくばく食べている。

「ママの分まで食べないで！」あつと言う間に、ズッキーニは家族の胃袋に消えていった。

# 小さな家族

熊本県八千代郡 砂原富美子（43歳）

次男が拾ってきた白い子猫が、家族の一員になってから、月日のたつのは早い。名前は雪とつけた。子猫の時期は四か月ぐらいで、半年も過ぎると体も大きくなり、鳴き声も以前とは違ってきた。

初めて迎えたお正月も、こたつの中よりは外が気になるらしく、落ち着きがない。

家の外から、別の猫の鳴き声がする。

「BFができたんじゃないのか」

夫が、酒を飲みながら、笑った。

「まだ、半年過ぎたばかりなのに……」

と私が言うと、夫は真面目な顔をして言う。

「犬猫は人間と違って、成長が早いんだぞ」

夫は雪を抱くと、家の外へ出してしまった。

それから数ヶ月過ぎた頃。雪を抱いていた私の手にゴロンと何かがふれた。

お腹をさわると、それは動きはじめた。

「赤ちゃん、生まれる？」

次男が、雪のお腹に、そっと手をおく。

「わあ!! 動いている。いつ産まれるの?」

そう聞かれても、猫の妊娠期間など知らないのので、しばらく様子を見ることになった。

すると、部屋の中をウロウロしたかと思うと、階段の下へもぐったり、段ボールの中に入ったりと、まるで出産場所を探しているようだ。

私は、ダンボールの箱の中に古い毛布を敷いて、雪を入れてみた。一度は出てしまったが、気持ちがいいのかその後はその箱の中で眠るようになった。

夜の十時頃、雪が急に苦しそうな鳴き声をあげた。

白い体の毛が血で染まり、痛々しい。

出産が始まると次男が心配そうにやってきた。いつもと違う鳴き声に、驚いているようだ。

やがて、つるんと、卵が出るみたいの子猫が一匹誕生した。次男は、かわいい子猫を見られると思ってい

たらしく、目の前の現実にはショックを受けてしまった。

猫よりもネズミに似ていた。次男が、雪を拾ってきた状態になるまでには、二週間ぐらいかかることが、子猫の成長で分かった。

小学六年生の次男は、部活が終わって帰宅すると子猫の所へ直行する。近所の子供達にも三匹の子猫の存在は評判がいい。

そこで、気になるのが子猫の父親だ。近所には、ペ

ルシヤ猫、シヤム猫、アメリカン・ショートヘアなど、高価な猫が多い。少しは期待もしたが、誕生した一匹は母親にそっくりな白い猫だったが、残りの二匹は、のら猫のトラさんと同じ毛なみだった。



子猫の顔は三匹とも母親に似たので、オス猫だったのも幸運だったのか、一匹の白い猫を我家に残し、二匹はもらわれていった。

出産から二ヶ月後、雪は動物病院で手術をすることになった。初めて車に乗ったのが恐怖心に火をつけたのか、悲痛な声で鳴きわめいた。子猫から離されたことへの不安もあったのだろう。

雪は避妊手術を終えた後、子猫に乳を与えることができず、パンパンに腫れた乳房が痛そうだった。薬をしばらく食事に加える間、子猫は母親とガラス窓ごしの面会になる。

拾った時は手のひらに乗るくらい小さな雪だったのに、一年後は母親になっている。

動きまわる子猫を見ると、そんな雪を思い出す。それにしても母猫の育児はすごい。

誰に習うでもなく、生まれつきの本能で乳を飲ませ、砂の上での排便もちゃんと教え、時には、きびしく噛んで、しつけをしている。

我家に、小さな家族がまたふえて、楽しさも二倍になった気がする。

私も雪に負けないように、子育て頑張らなくっちゃ!!

(え・橋本美智子)

# 息子に裏切られつづけて

千葉県船橋市 大味恵子 (45歳)

平成十二年三月六日は、長男の高校の卒業式だった。厳肅な空気の中で、私はちょうど三年前の中学校の卒業式を思い出していた。

我が子を温かく育んでくれた中学校、それは小学校も含めて実に素晴らしい環境だったと思う。これでお別れ

かと思うと感無量だった。

在校生の歌った『大地讃頌』、そして卒業生の歌った『仰げば尊し』の歌声のなんと澄みきっていたことか。私も涙が止まらなかった。

しかし、こんなにも感動的な卒業式の数カ月後、彼があのように怠惰な高

校生活を送るようになるとは、その時の私には想像もできなかったのである。彼の高校三年間は過ぎてみればアツという間、しかし、それは私にとつて長い長い息子との戦いの日々であると同時に、私自身の葛藤の日々でもあったのだった。

## 墮落

中学校を卒業した日から、息子はひたすら遊び歩いた。小学校高学年からクラブ活動をしていた彼は、何年かぶりに塾もクラブも、自分を束縛するものがすべてなくなった状態になり、至上の開放感を味わったようだった。クラスの友達、クラブの友達……ありと

あらゆるグループの友達から毎日のように電話があり、気がつくとも部屋にいなかった。遊園地、ゲームセンター、カラオケ……よくそんなに行く場所があるとと思うほど遊んだけれど、それも入学式までと思ったから目をつぶっていた。そして、どうしても言うから、入学祝いにテレビデオまで買ってあげた。これが後に後悔することになるのだが――。

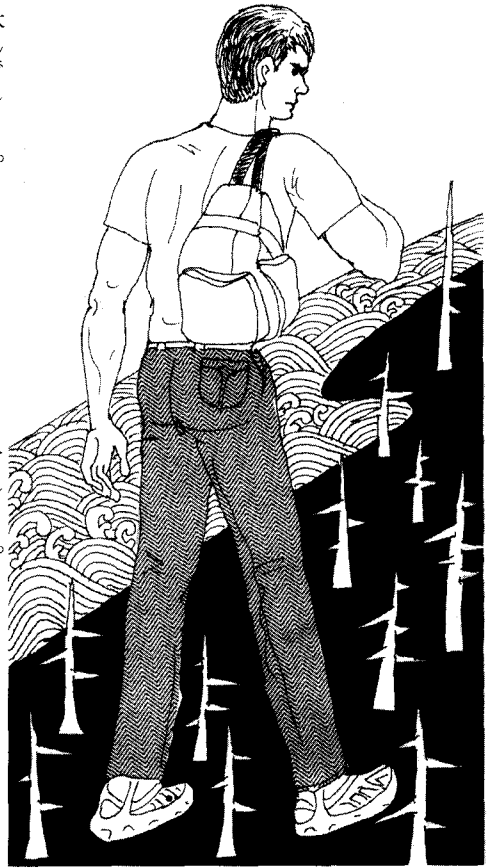


息子に裏切られ続けて

高校入学後、一カ月半くらいたったころから、入学当初の緊張感も解けてきたのか、体調が悪いと言っては遅れて行ったり、休んだりすることが多くなっていった。そんなある日の夕方、担任の先生から電話があり、  
「今日は学校へ来ていません」ということだった。最近の息子を見てみると、こんな時がいつか来るような予感が確かにあった。帰宅した彼を問い詰めると、電車で揺られているうちに眠ってしまった、総武線の千葉と三鷹の間を往復していたらしい。何と他愛のないことか。繁華街をうろついていた、ホッとしたものだった。  
しかし、彼の休みぐせはその後もずっと続くこととなった。夜遅くまで友達と出歩いているから、疲れて朝が起きられない。「二時間めから行こう」と思うがその時間になっても起きられない。そうこうしているうちに昼になり、午後の授業だけならもう行かない方がよい、ということになり、結局一

日休んでしまう。

高校は義務教育ではないから、欠席が三分の一を越えてしまうとその科目の単位はとれなくなってしまう。例えば週一日の割合で休んでいったとすると、一単位の科目、つまり週一度しか授業のない科目は十月ごろには、欠席が三分の一に達してしまうのである。二単位、三単位の科目も徐々に危うくなり、三学期を迎えるころには、もうほとんどの科目のタイムリミットが来



てしまう。

もうこのままで行けば留年かと思われるころ、朝、何とか起き出して学校へ休まず行くようになり、ぎりぎりセーフで欠時オーバーだけは免れる、というのが息子の毎年のお決まりのパターンだった。

高一の初めごろ、一応バスケット部に入っていた彼は、練習のため、帰宅時間も遅くなっていた。夏休みが近づいたころには、私はもう彼の行動が把

めなくなっていた。クラブに行ったり言いながら汚れたシャツを全く持って帰らない。

歯列矯正のため通院していた歯科の子約もしばしば無断でキャンセルし、親子で呼び出しを受けた。

「治す意志がないなら、はすしますよ」とまで言われた。

なまけ癖が抜けぬまま終わった高一の一学期であったが、夏休みという長期の休みを挟んで、それはさらにエスカレートすることとなった。後になつてわかったことだったが、息子は届け出制となっているアルバイトを勝手に決めて、クラブが終わった後に行っていたらしい。またPHSの契約も内証で勝手にしてしまった。印鑑、その他の証明書を黙って持ち出していた。もうやりたい放題の生活だった。

友達の家に泊まりに行つての麻雀、そのうち机の上には馬券までころがっているようになった。こんな状態だから、二学期からの生活がどんなものだったかは容易に想像できるだろう。



## バイク

朝起きられない日が続く中で、珍しく自分で起き、いつもより早い時間に出て行った日があった。ところがその日の夕方、学校から電話があり、今日も学校へ来なかったという。

「もしかしたら」と思い当たる節があ

った。

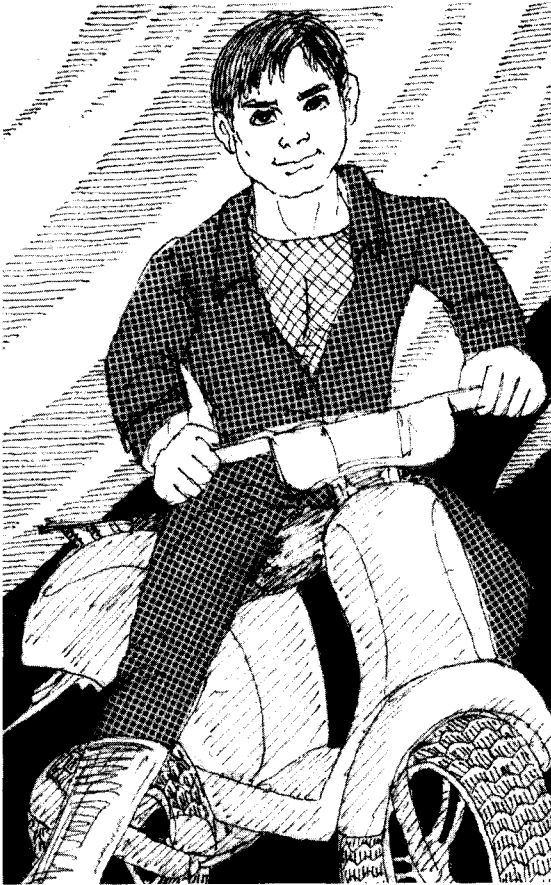
「バイクの免許、取りに行ったんでしょ」

と聞くと、

「行ってない」

と言う。しかし、確信があったので、しつこく何度も問い詰めると、

「ああ、行ったよ、だけど受かんなかった」



と、ついに白状したのだった。その後、その旨を担任に伝えたことを息子に話すと、彼は怒った。

「ふざけんな、何で言うんだよお、学校にわかったら停学処分になるんだぞ。受験に行っただけでもダメなんだ。殴ってやりてえ」

と、私に対する憎悪をむき出しにした。私が息子のことを『怖い』と感じたのはその時が初めてだっただろうか。

彼の友達の中にはすでに、バイクの免許を取得し、アルバイトで貯めたお金でバイクを購入した子もいた。原付きだったら、安い物で十三、四万で買えてしまうから、手の届かない物ではないはずだ。息子はアルバイトをしているとはいえ、今はまだバイクが買えるほどの余裕はないはずなので、当分は買う心配はないだろう。免許そのものは、原付きだと、ペーパー試験のみだという。内証で試験を受けに行った日から、私は彼がバイクに乗ることを考えただけで、居ても立ってもいられない気持ちになり、近所のバイクショ

ツブを何軒か回って、現金さえ持っていれば親の許可なしでもバイクを売ることかどうかを聞いて歩いた。本当は売るくせに、

「うちはそんなことはしません」

とうそぶいた店もあつたが、

「では、もしも息子さんが来た時には、仮契約ということにして、ご連絡します」

と言ってくれた良心的な店もあつた。その若いオーナーは、バイクはあくまでも正しく乗るべきだ、と考えているようで、

「学校でのルールを守れない人間が、社会でのルールを守れるはずがない」と言い切つた。県内の大部分の高校は、バイクに乗ることを禁止しているからである。交通事故は怖い。自分自身がけがをすることはもちろんだが、人にけがをさせることはもっと怖い。高校生の分際で一体どうやって責任をとるというのか、社会人が乗るのは、わけが違ふのだ。そんな諸々のことを話してみても、息子は全く聞く耳を持た



なかつた。そんな彼に業を煮やした夫は、ついに

「そんなに免許を取りたいなら勝手に取れ。ただし、学校を辞めてからにしろ」

と大声で怒鳴つた。

「俺のまわりでバイクに乗って事故に遭つたやつなんているかよ」

と、強気で言つてのけた息子であつたが、その後半年の間に、友人二人が相次いで事故に遭い、けがをした。幸い

命に別状はなかつたからよかつたものの、少しは応えただろうか。

あれほど「取つてやる」と大騒ぎした息子も、どうしたわけか、高二の夏も過ぎたあたりから、パタリと免許のことは言わなくなつたのである。後に彼が語つたことによれば、「今さら原付きだけ取るなんてバカバカしい。自乗車の免許を取れば一緒に取れるのだから」

と思つたかららしい。理由はどうあれ、私としてはともかくバイク関係のことは後まわしにして、今やるべきことを優先してほしかつた。

## 占い

息子のこんな状態を遠くから、とても気にかけている人たちがいた。私の実家の両親であつた。実は息子は、中学入学と同時に実家と養子縁組をし、そちらの姓を名乗つていた。

「どうも姓が変わつてから悪くなつたようだが」

と言った父の言葉に私は驚いた。そんなことは考えてみたこともなかったからだ。しかし、そう言われてからは、機会があれば姓名判断でもしてもらおうかと思っていた。元来、私はそんな所に足を運ぶような人間ではないのだが、たまたま近くに「当たる」という評判の占い師がいるというので、思い余って行ったのだった。

そこには、五十代半ばくらいの女性の占い師がいた。生年月日と名前の画数で息子の運勢を見てもらったところ、あまりにもピタリと彼の性格を言い当てたので驚いた。

「人から強制されるのが嫌でしょう。この人は。外柔内剛といって、人当たりはよく、周りの人間には優しいけれど、反面ものすごく頑固で、てこでも動かない。この人を怒らせたら大変ですよ。運勢というのは四、五年周期で変化していくもので、十六歳から二十歳までの今は最悪の時期です。だが二十歳過ぎてからは飛ぶ鳥落とす勢いで上向きになっていきますよ。この時期

にいい出会いがたくさんあります。この人の人生は波乱万丈です。三十代で再び低迷する時期があるけれど、それ乗り越えるとまた安定してくる。晩年はとても幸せに過ごせますよ」

こんな内容の話をしてくれたのだが、ともかく私は驚いた。本人を連れて行ったわけでもないのに、彼の性格、今の状況をあまりにもピタリと言いつてたからだ。未来を見る鏡でも見せて

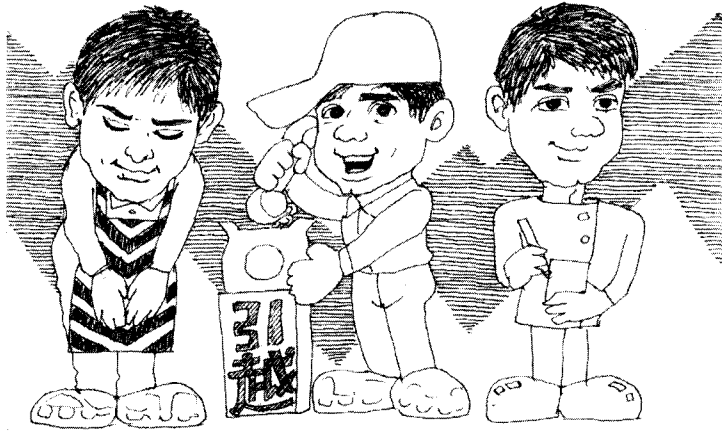
もらったような気がした。

(もし今が最悪の時期なら、これより悪くならないとしたら、まだましだろうか……)と気持ちの上ではかなり楽になった。すべてが、あの人の言うとおりになるとは思わなければ、やがて上向く時が来ると、私自身が信じなかったのかもしれない。その後長いこと、あの占い師の言葉が私を支えてくれたことは事実であった。

## 進級の季節

進級の時期が来るたびに親子で呼び出された。一年から二年になる時も、出席日数だけは何とかクリアしたものの、赤点の科目でレポート提出を指示されたにもかかわらず、出さなかったため、そこだけ斜線のひかれた通知表がきた。しかし、もう一度だけチャンスを与えてくださることになり、同じ課題が出され、無事提出するまで私の方が生き心地がしなかった。二年から三年になる時も、数「でひっかか





った。学年末のテストではかなりがんばったが、一、二学期の欠席がひびいて単位は認定されず、三年の一学期まで持ち越されることとなった。その間、数学の先生のマンツーマンの指導を十回にわたって受けることとなったのだ。私は公立の学校でここまで親切に指導してくださるということに、正直言って驚いた。

「何としても応えなければ」

と息子に発破をかけたことは言うまでもない。しかし、最初の数回はきちんと指導を受けに行っていたが、次第に休みがちになり、最終テストの成績も及第点には及ばず、単位を落とすこととなった。何とも情けない結果であり、担当の先生には申し訳ない気持ちで一杯だったが、ここまでチャンスを与えてくださったことには本当に感謝している。

## アルバイト

この三年間に息子はあちこちでアル

バイトをした。引越し屋、スーパーの店員、居酒屋のウェイターなど。高校生可というところは意外と少ないらしい。十八歳以上となっているのに、年齢を偽って雇ってもらったりしているのだから、あきれて物が言えない。最初から長期間続けるつもりもなかったのかもしれないが、一カ所に二カ月以上いたことはない。私がどうしても許せないのは、何度か無断で休むうちに行きづらくなり、自然消滅する、というお決まりのパターンになることだった。

「辞めるならきちんと言ってから辞めなさいよ」

と、何度同じことを息子に言っただろうか。家のすぐ近くのスーパーで働いた時など、知人もいたので恥ずかしいことこの上なく、しばらくは、そこで買物ができなかった。時間を守ることは社会の最低限のルールだと思おう。学校に遅刻していくのはもちろん悪いことだが、学校は月謝を払って行くところであり、仕事は給料をもらうのだ



から、それだけのことはきちんとしなければならぬわけで、根本的に違うのだ。その辺のことも繰り返し言うて聞かせたが何も変わることはなかった。

お金が入れば、右から左へ、アツという間になくなってしまふ。携帯電話の支払はその使い途の大部分だった。三カ月も支払わないでいると督促状が来た。それがさらに三カ月たつと「法的な手段を取らせていただきます」という最終通告書なるものが届いた。このまま放っておくと家庭裁判所から呼び出しが来ることになるらしい。ぎりぎりまで放っておいたが、それもバカバカしいと思い、一時立替えることにした。

が、結局普段のバイト収入では返せず、お年玉から差し引くことにいつもなってしまうのである。もともと息子の手元にあるお金ではないから、ちつとも懐が痛むことはないので、少しも懲りないのである。

お金がなくなつて、よくよく困つた

時に息子がしたことはと言えば、高校入学時に買ってあげたテレビデオを友達に売り飛ばしたことだ。また、三カ月分の通学定期を払い戻して現金を得て、なんと自分は高校を辞めた友達の定期を使わせてもらっていたのだ。そして私や主人の財布からお金をぬくことはしょっちゅうだった。だが、どんなに問い詰めても絶対に「取つた」とは言わなかった。弟の財布からもお金がなくなつた時は、夫の怒りもついに爆発した。

「お前みたいなやつは出て行け、試しに出て行つてみる。そうしたら金がなくなつたりしなくなるはずだ」と。

そんなこんなで性懲りもなく同じことを幾度となく繰り返した息子だったが、危ぶまれていた卒業もどうにかこうにかできることとなった。もちろん、卒業後の進路など決まっているはずもない。これから一年、予備校へ通つて来年受験することだけは、取りあえず決めたようだった。だが、果たしてど

れだけ真剣に取り組もうとしているのか。それは実行することによってしか証明する手段はあり得ないのだ。

卒業式から三ヶ月の後、『今度こそは一生懸命にやるだろう』という微かな希望も見事に息子は裏切ってくれた。予備校に払い込んだ四十五万円の年間授業料は、惜し気もなくドブに捨てられることとなったのだ。彼は五月の半ばに早くも予備校へは行かなくなっていた。

折しも、シンガポールへ転勤が決まった夫は、出発直前まで、

「今ここで受験を止めてしまうことは、これからの人生の選択の幅を狭めることになるんだぞ。取りあえず一年間頑張ってみろよ」と息子を説得したが、予備校へ戻らせることはできなかつた。

「何が悪かったんだらうね」

そう言いながら夫とともに幾度、嘆いたことか。何でこんなにも無気力で、だらしない人間に息子は成り果てたのか。

彼が高校在学の間中、私は考え続け、悩み続けた。私が、趣味の活動やPTA活動、そして仕事と忙しく駆けずり回っていたからだろうか。でも子供のことに無関心ではなかつたし、食事だって、多少の手抜きはあつたにしろ、きちんと作ってきたし、甘やかし過ぎたとは思わないし、厳し過ぎたとも思わない。ただ、少しうるさくは言い過ぎたかもしれない。

夫はと言えば、休日は、長年の趣味であるラグビーに決まって出かけて行った。実家の母からすれば、それは子供をちつとも構つてやらない無関心な父親、と思えるらしかつたが、私から見れば、決してそんなことはなかつたと思う。

言うべき時にはガチツと言って叱つてくれたし、自分が大切にしている世界があることはプラスにこそなれ、マイナスになどならないと思う。そんな親の後姿を見て何かを感じてほしかったが、残念ながら息子には、何ら影響を与えることなどはなかつたようであ

る。

私も夫も無責任な生き方などしてないし、何事にも全力投球してきた。そしてごく普通に子供を育ててきたのだ。息子のような人間に育つマイナスの要因など、あつたとは思えないのだ。もう、自分を責めるのは止めようと思つた。

たつた一つ進歩したことが息子にあるとすれば、アルバイトで無断欠勤や遅刻をしなくなつたことぐらいだろうか。新聞配達だけ黙々とこなしている息子である。

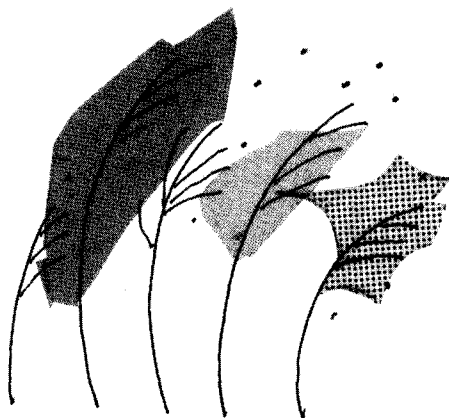
幾度となく期待しては裏切られ、失望した私であるが、その度に、いつかの古い師の言葉が脳裏に甦るのである。「二十歳過ぎてからは飛ぶ鳥落とす勢いで運勢が上向く」という――。自分の進むべき道を見つけ、目標に向かつて邁進する時がいつかは来るに違いないと、心のどこかでまだ期待している私なのである。

食品への異物混入騒ぎ、その後 ⑬



# 座談会 私も言いたい

## 家庭の中の会話



---

**出席者** 安村豊子 林夏子 大久保れい子 大久保博子  
**司会** 田中喜美子 **編集部** 和田好子

### 共通の趣味で会話

**司会** 今回は家庭の中の会話なんですけど、日本人で、子育てでも夫婦でもわりあい口をきかない。言語表現っていうのがへただなあと、私はそういう印象なんです。

皆さん、どうもうちでは会話が少ないなとか、あるいは話し方がへただとか、家庭の中で言葉を使うっていうことに対して、体験の中から自由に話していただきたいと思っんです。

**安村** うちにはけっこうしゃべるほうだと思います。

私、子ども産んでから、ちょっとストレスを発散する場が欲しいなって思って、プロレスを見るようになったんですね。もともと主人がテレビで見っていたのを一緒に見て、なにかスカッとしたので。それから一緒に試合見に行ったり、子ども連れて行ったりとかしています。

夫と私の会話も、利害関係のない共通の趣味の話で、例えば夫がうちに帰ってきていきなり「全日本プロレスの分裂問題は



うなるんだろう」っていうので盛り上がる。夫もバイクに乗っていたり、私もパソコンや旅行が好きだったり、そういう話もけっこうするし。

主人は、こうあるべきっていうことを表立っては全然いわない人なんで、妻とはこうあるべき、家庭とはこう、親とはこうあるべきとかいうのがない。だから子どもも、時にはフラットな状況で。子どももつうそついているわけじゃないんだけど、何かこう作っているような話、するんですよ。

ある日六歳の長男が学校から帰ってきて、「同じクラスの男の子が、道を歩いていたらおじさんに誘拐されそうになったんだ」っていうから、「へえ」っていったら「その子は空手を習っているから撃退したんだよ」って。小学校一年の子どもが、おじさん撃退できる訳ないでしょう。こりゃ作ってるなと思うけど、そこで「そんなのうそに決まってるじゃん」っていうとやっぱり彼も傷つくので、「ああそうなんだ、すごいねえ」とかって、盛り上がってあげて。お芝居っていうんじゃないんですけど。司会 すごくですね、それは。努力ですね。

**安村** しゃべろうと思っていたのに忘れちゃった、とか次の日思い出すと悔しいんで。やっぱり面白いほうがいいですよ。面白いて語弊がある言葉なんですけど、深刻になるより能天気なほうがいいかなあ、なんて。

**林** うちもけっこう楽しいんです。

今、上の男の子が中二で、下が小学校五年生の女の子なんですけど、主人と息子の趣味がチヨウチヨ捕りなんです。幼虫を育てたりとか、日曜日ごとに出行って。

主人の方が、最初子どもをタシにしていたんですよ、照れ臭いから。幼稚園くらいの時に、最初にチヨウチヨのサナギを見つ



安村豊子さん

けてきて、家で羽化したんですけど、それから息子がはまっちゃって。

東南アジアとか沖縄とかいろいろなところ旅行に行ったりするんです。二人だけで行くときもあるんですよ。今年はこの狙っているとかね、それぞれ目的があるわけです。

**司会** 二人がライバルになっている。

**林** ライバルなんですよ。

奥本大三郎先生って方が、会長なさっている昆虫協会の会員に二人がなりまして、それで採集会とか出かけて行って。奥本先生ってフランス文学ですよ。私もちよつとそういう勉強したことがあるんで、エッセイとか読むと楽しいし、そこから話題ができたりとか。

**司会** あなたも趣味的に一致して、お二人の話に参加なさる？

**林** そうですね。

もう中二くらいの子って話もしないんですよ。たとえばチヨウチヨの卵のカタログとか、送ってきたりしますよね。「こういうのがきてるよ」とか、「誰か載ってた？」とかね。あと野球や音楽も好きなんですけど、そういうのも話の種になる。

中二くらいの子と話すの、私は結構楽しかったりするんですよ。

お母様方と話す、全然うちでしゃべらないというお子さんもいらつしやるんですよ。中二くらいで、もう何かいうとうるせよとか、そういうのしか返ってこなくて、学校のこと何にも話してくれないとか。うちはすつごく悪いテスト戻ってきてても、見せるんですよ、一応。

## 夫婦ともに共同経営者

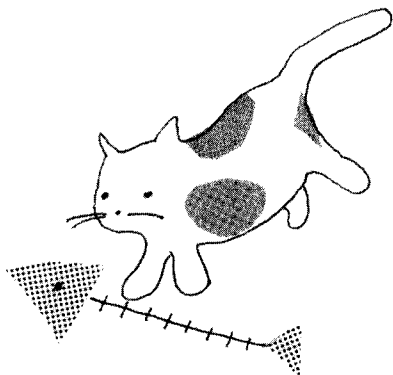
**大久保(れ)** 私は、夫と別々にコンビニエンスストアを経営しています。会話をする時間がほとんどありません。多くの夫と同じように、まあわかってるだろうという、暗黙の了解を夫の方が勝手に思っていて、時々、私が爆発します。

あとは、すごい姑がおります。

**司会** ご一緒に住んでおられる？  
**大久保(れ)** ええ、そうです。八十五ですけども、いまだに私の商売の小切手の名義なんかは姑になっています。ですから、まだ一家に君臨しているんですよ。

夫の店は二十四時間やっていますから、夫はほとんど不在です。そうすると、いちばん仲が悪くて話が合わないはずの私と姑が結局いちばん話す羽目になるわけですよ。

姑はもう仕事はしていないので家にいますけど、お料理とか焦がしちゃうからいろいろやってやんなくちやいけない。  
**司会** お仕事もしていらつしやるし、お家



にお帰りになるとお姑さんと。

**大久保(れ)** ええ、自宅と店舗が同一の敷地にありますから。年寄り話話したいわけで、会話の相手が欲しい。

**司会** ほかにどなたもいらつしやらないんですか。

**大久保(れ)** 長男・長女がいるんですけども、お勤めしているんで、それぞれが忙しくてあんまり会話がありません。ですからもし、この家に私がいなかったら、そこそ下宿家族です。

**司会** よくホテル家族とかいわれている、それなんです。

**大久保(れ)** そうですね、そういう状態になりかねない心配があまりまして。私も忙しいものだから、いわなくちやなんないっていうことはほとんどメモ書きしてね、玄関のところに置いておきます。

例えば、大久保家っていうバスが動いているとしますね。私がかかいうと、夫は、「いつも突然なんかいう」って思っんですよ、流れを知らないから。

**司会** だんな様は、自分が采配振っているってどう感じ？

**大久保(れ)** そこまでは強くないんですけども、もうわかってると思ってるのね。わかっているから、自分のいいことは伝わるだろうっていう、ちょっと楽観的なところがあります。

ですけども、そういうバスが走っているところに途中で乗ってきて、わーわーわーっていつて、また途中で忙しいからお店に行っちゃうでしょう。そうするといつも一からわからないで、五くらのところからきて、六くらしいしゃべって、ぱっと帰っちゃうもんですから、将来的には大変不安なところありますね。

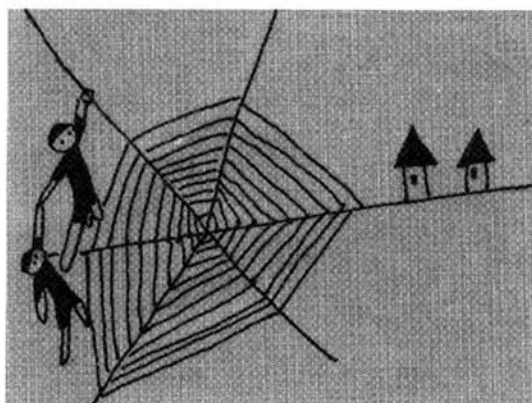
今日もね、おどかしてきたの。出かけるのは知っているんですけど、「本当はサ、ニコニコ離婚講座に行ってくるの」って。

一同(笑)

**大久保(れ)** 姑は行商やっていたような人ですから、すごい厳しい人なんですけども、夫は女房にね、うまく丸め込んで仲良くしてもらいたいっていう感じですね。すごくずるいところありますよね。口ではいわなくてもわかってくれていると思ってるんですよ。私はそこが甘いついてる。

姑と夫との会話っていうのはよくあるんですよ。

**司会** どんな会話？



**大久保(れ)** それこそ井戸端会議みたいな隣近所の話とか、世間話ですよ。それを夫が、ふんふんってね、聞いてやってる。

私はそこには入って行けないの。

**司会** そういう話でも、濃密っていうか、心の交流があるわけですか。

**大久保(れ)** ありますね。で、夫がいなくなつて、夕飯の時間になると私とおばあちゃんになりますね。そうするとまたそこで会話が成り立つわけ、私とおばあちゃんのこと。

**司会** どういう会話なの？

**大久保(れ)** 昔話からいろいろですね。聞いてやるのはちょっとしんどいですけども、適当に。

**司会** ちょっと魂縮んだけど、昔話ってどんな話？

**大久保(れ)** うーん、そうですね、越後の人で、すごい芯が強いもんですから、今の一般的なお嫁さんに対する「あんなんじゃしょうがない」とかね、そういうことはよくありますね。

私は、子どもとは努めて話すようにして、ますけどね、帰ってくるって電話してたり、音楽聞いてたりするから、なかなか難しいんです。ですから、私がいなかったら、この家はどっちなっちゃうんだらう。それぞれ横の話がね、ほとんどわからない。

**司会** お子さん達は何時ごろ帰つてらっしゃるの？

**大久保(れ)** 夜九時過ぎですね。もう、

捕まえて話すのが大変ですよ。相手にされないような感じがある、特に息子は。働いているんですけども、やっぱり教えておかないかなんないことっていうのはいっぱいあるんですよ。

**司会** 教えておこうとお思になるんだからすこいわねえ。

**大久保(れ)** 例えば子どもたちからね、家の修繕積立金として、一万円ずつ取っているんですよ。

一同 すこいー。

**大久保(れ)** いや、長男からは二万円取ってるんですよ。「もしこれで修繕しなかったら、だれが家建て替えると思ってるの、お母さん達じゃないんですよ」とかね。

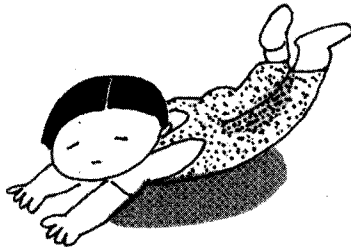
あとはまあ、近所の法事に行ったら、「もういやだったなあ、あそこの襖を開けたら、そのしきいがほこりだらけだったのよね」って。「お母さん、そんな人んちのこと、どうだっかっていい」っていうから、「何いってるのよ、お母さんの時あんたがそれじゃあ困るのよ」っていう感じだね。突然いうわけにいかないから、何かのきっかけに、あれもいおう、これもいおう、教

えとかなきやいけないっていうね。

**司会** それはいいですね。日本の親は割りに教えるよとしませんものね。

**大久保(れ)** そうですね。境界線とか、屋根の耐用年数がもう過ぎてるんだからとか。そういうことも含めて、家では、みんなが寄って話している時間がないんですよ。

**司会** 大久保さんが一人、クモの巣っていうと変だけど、巢の真ん中に座って八方に



アンテナを巡らして、家族がばらばらにならないようにしてるわけね。

意外とそういうお家、多いかもね。子どもが大きくなって仕事で出て行って。それで、帰ってくる時間がまちまちだったりするとね。

## 会話のない家庭

**大久保(博)** 私は親、父から虐待をすーつと受けてて、それで親とは一緒に住めないというところで、今は独り暮らししています。まず自分が学校でいじめられたときに、親にいじめられていることを話せなかった。

**司会** 親がちゃんと聞いてくれないわけ？  
**大久保(博)** すべておまえが悪いになるからと叱るだけで、「おまえはどうしてこうなんだ」「ためだめだめ」みたいな感じ。だからほとんど父親から一方的にいわれている。おれは家長だ、偉いんだ、みたいな。自分が法律っていうか、自分がルール。自分のいっていることは正しい、他人が間違っている。で、女房はついてくればいいん

だつて。

親に口答えできなくて、父が怖くて、家  
じゃ一言もしやべれない。結局その裏返  
しは家庭内暴力。

**司会** あなたが何かいうと、まずどうい  
うことなのかっていうことは聞いてくださ  
らないわけ？

**大久保(博)** 聞いてくれないんですよ、一  
方的に自分の意見なんです。

**司会** だけど、自分が意見をいう種がない  
わけでしょう、向こうは。

**大久保(博)** だから私が物をいっちゃいけ  
ないんです。親に「おはようございます」  
っていっても殴られましたから。「うる



大久保れい子さん

せえガキ！」ガーンって。

**司会** とにかく口きいちゃいけないわけ？

**大久保(博)** はい。ただ親の顔うかがって  
びくびくしてた。会話じゃないんですよ。

おれに従っていれればいいんだって感じで。

**司会** 何をどうしておけ、とかさういう感  
じの命令なわけ？

**大久保(博)** はい。口答え一切しない。

**司会** お母さんも？

**大久保(博)** はい。

だから私が、父親に何かいいたいときは、  
母親を通していってもらう。

**司会** 母親もいえないんでしょう。

**大久保(博)** いわないと話になんないから、  
いってもらわないと。ただ、いったことに  
対してまたがーっとか母親がいわれちゃう  
から。

**司会** 例えばどんなことを「これお父さん  
にいつてよ」っていうわけ？もうちょっと  
小遣い値上げしてくれとか。

**大久保(博)** 小遣いじゃないんですよ。学  
校の給食代を請求するだけでも恐いんです  
よ。サイフ握っているの父親だから。家計  
簿も細かくつけてて、チェックするんです

よ。で、ポテトチップ一個買ってきただけ  
でものすごいケンカになる。

**安村** 息が詰まりますよね。

**大久保(博)** だから顔色見て、びくびくし  
ていた。

会社の人とかお客さんきたり、電話かか  
つてくると、ころつと変わるんですよ。電  
話の会話聞くと、お父さん、こんな面があ  
ったのって、びくくりしちゃう。

**司会** あなたがうんとちっちゃい、記憶し  
ているかきりにおいて、そういう不安って  
あったわけ？

**安村** 新聞とかではあるんだと思うけど、  
やっぱり間近に聞くとねえ。

**司会** もう、自分は大きくなったから、よ  
し、あいつを一つ殴ってやろうとか思わな  
い？

**大久保(博)** いや、父親は父親だし、私は  
私で別だと思ってるし。

アダルトチルドレンって知っています  
か。

**司会** このごろさういうことがかなり拡  
まってきたっていうか、さういつてくる人  
が増えてきましたね。

**大久保(博)** もしかして金属バット事件って私がやっていたかもしれない。

## 女が話を合わせている？

**司会** 林さんの場合、夫と子供の趣味の方に、あなたが自分を合わせて、自分はほんとはこれしたいんだけど、こつちに合わせているからまあ話がまとまっていくんだよね、みたいな。そういうふうには感じられません？

**林** ちよつとそういうところ、あるんですよね。

娘がやっぱり、昆虫採集に楽しそうに二人でやっているっていうのがなんかいやだったと思うんですよ。二人を見て、嫉妬心みたいなあつたと思うんですよ。それで手芸をやるうとか、お菓子をやるうとかつていい始めて、私は娘とお菓子を作ったりにしているんです。娘との会話は、お菓子のことが結構多くて、今度何を作ろうとかね。**安村** うちは何しろ、無理に相手に合わせないっていうか。

たとえば子供が、「ねえねえ、これやろ

うよ」っていつてきても、自分の気が乗るときはやるけど、本を読んでいるときは「今本読んでいるから」っていうとか。

自分が楽しくないのに無理に子供のためにじゃなくつて、やっぱり楽しく。別に子供がやりたくないっていったらやらせないし。じゃないとどつかにストレスがたまっちゃいますよね。そういう無理せず、楽し



くつてというのが一番かなあつて。

**司会** 私はいつも女性のほうで相手に合わせているような気がするのね。女の努力だけでもつているんじゃないかなつて思うと何となく悔しくてね。なんかしゃくに障ってくるわけ。

**安村** そういうのつてありますよね。女性同士だと井戸端会議でも、自分の興味のない話でも、一応聞きますけど、男の人つて、社会では違うけど、家庭では反応が顕著というか、興味のない話はふーんつて。だから、やっぱ会話を向けたときは、向こうの乗つてきそうな話題を振つたりとかそういう努力はしてるなつて思う。

**和田** いや、女にはもう家庭に入つたら、努力しないでもいいつていう考えがあるのよ。夫に対して努力して、何とか話をしようつて人はかなり努力家だと思っね。

奥さんは家庭のことに関心をもつて欲しいつてだんなに言うでしょ。ところがだんなの生活について奥さんが関心を持つかつていつたら、持たないのよ。

私が女学校の時にね、アメリカ帰りの先生が「アメリカの女性は、インテリであれ

ば皆夫の仕事に関する本を読んで、話題を見つけている」って。「日本の女性は、洗濯と掃除はつきりしてて、本を読まないからダメだ」とかっていわれたのね。その時は意味が全然わかんなかったんだけど、あとになって考えると、やはり夫の仕事なり、夫のやっていることに興味をもって、具体的にそれを知っている努力は全然していない人が多いんじゃないですか。

**司会** だけど家庭は二人共通のものでしょ、だから私はどちらかというと、男の方が悪いと思うんだけど。

**大久保(れ)** それは、母親が男の子を育てるときに、そういうことをきちつと教えていかなくちやいけないことじゃないでしょうか。

**司会** なるほど。

**大久保(れ)** うちのお父さんは忙しくてあただけど、本当は家があっても、ぬくもりのある家庭がなくちやいけないんだよっていうことをね。そうじゃないと、結婚して失敗するよ、逃げられちゃうよっていう感じでね、教えていけないと。いくら仕事人間でもね、ちゃんと家の中は共通の話題

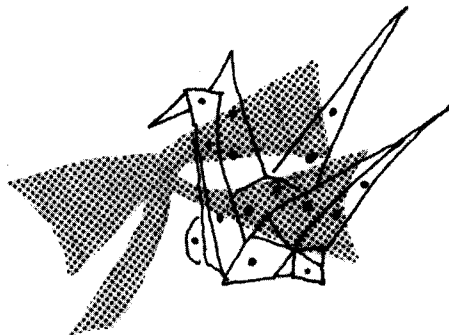
があるようにしなくちやいけないよってことは、もう、子育てで、母親が子どもに教えていかなくちやいけない。

**司会** それも言葉に出して教えないとね。うち見ればわかるでしょう、じゃなくって、お母さんの気持ちとしてはこうなんだよ、って。

## どうでもいいような 日常会話の大切さ

**大久保(れ)** 一般的に、一家のいわゆる夫っていうものが、みんな仕事に追われていて、そこまで配慮するゆとりがないっていうか、そこまで神経が回らない、まあ会社人間ですからそれもあるんですけども。

外国人と結婚した女性がね、外国人は家庭を大事にするからすごくよかったって。そこにすごく魅かれたって。また、外国人の女性と結婚した日本人の男性がね、日本的な社会的な出世とか会社主義とかいうんじゃないかって、そういう規範から自分が気持ちを切り替えられてよかった、っていったのが、すごく印象的だったんですね。





林夏子さん

ですから、やっぱりどうでもいい日常会話っていうのを、常にして行く必要性、努力は必要じゃないんでしょかねえ。

林 さっきのぐちじゃないですけど、とりあえず知つて欲しいことってあるじゃないですか。結果が出るまで何かあつて、結果が出るまでのプロセスをとび越して、結果だけ聞くんじゃなくて、こういうことがあつたから、こうなつて、最後こうになりましたつてというのが、途中少しずつでも話していれば、最後行き着いたときにああそわかみたいになりますでしょ。

大久保(れ) だから、どうでもいい会話の積み重ねが、やっぱり家庭の在り方なんじ

やないかしら。

司会 どうですか、若い方。

大久保(博) 暗黙の了解つていうか。それがある。

司会 やつぱりそうか。

和田 そうよ。日本はそうよ。ひとつ屋根の下に暮らして、おなじじこととして暮らして、会話がなくてもわかりあえるつていう伝統があるのよ。

安村 イヤー。以心伝心なんてうそだよなつて、ダンナといますよ、やつぱりいかなきゃわからない。結婚して十一年目ですけど、やつぱりわかんないですよ。

林 平和な状態だと、なんかもういいかなみたいな、雰囲気だけでいつちやうんですけど。問題が起きたときに、やつぱり話し合ひでつて思うことがありますよ、こつちが。大久保(れ) だつてさ、何か事件があるとさ、会話のない家庭だつたつてよく記事になるじゃない。

一同 (笑い)

司会 私なんかダメ親で、ちつとも息子に話さないけど、たしかに母親から息子に話つていう、そういう伝統はないですよ。

大久保(れ) もう高度成長時代で、労働時

間が長いから、そこまで男性に心のゆとりがないとか、あるいは個室化になつちやつたとか、各部屋にテレビがあるからとか、そういういろんなことが重なつて、こういう状況になつてきているんだから、こういう状態で、これからの社会がいつたら、なんかとんでもないことになつますよ。

なんか私たちは生活の便利さの影に、ずいぶん失つたものが大きくて、今度はそういうたおかしな子どもたちが増えてきたことに対して、経済全体の利益よりも、たくさんのお金をそういう面につき込まなくちゃいけない時代が来るんじゃないかなつていうコワサ。残業しないで帰つてきて、家族と会話があるつてことは、残業したのと同じぐらいの価値があるんじゃないかつていつも私思うんですよ、長い目で見ると。例えば犯罪が起きないとか、家庭崩壊になつながらないとかね。だから、残業をやめて帰るような社会であつて欲しいなあといつも思つております。

司会 本当に同感です。

(え・田中千恵)



# 思春期病

西尾裕子（40歳）

## 小学校六年生の娘が不調だ

この冬、我が家はかぜのウイルスに翻弄された。次男が四〇度の熱を出し、長男と長女が相次いで倒れた。治ったと思っていたら再び悪化するという事態を繰り返し、嵐が去っていったのは、最初の発熱を見た実に一ヶ月後。皮肉なことに嵐は、長女綾乃だけにしつこい不調を残していった。かぜは治ったはずだった。完治して二週間たつ。しかし時折せきがでてい

る。また違つかぜを拾ってきてしまったか。

私は注意して様子を見ていた。娘はしきりに不調を訴える。

「せきが出ると、胸が痛い」

ただせき以外の症状は全くなかった。熱もない。鼻水も出ない。食欲もある。夜、せきこむ以外は全く元気であるし、友達と遊びまわっている。

娘はひどく神経質なところがあって、からだのどこかが少しでもおかしいと、「どこが痛い、ここが痛い」と騒いだ。翌日にはケロツと治っている。

だから私は、また始まったと思っていた。胸が痛いなんて大げさな。

しかしせきは何日も続いた。「胸が痛い」といい、何か大きな病気ではないかと思うらしい。その不安があった。そして、夜、眠れなくなってしまう。眠れないと泣く。

## 二月

小児科でもらった風邪薬も、耳鼻科でもらった鼻炎の薬も、効いているのかよく分からないと本人は言う。学校

生活も楽しく送っているようだし、毎日弟とはしゃぎまわっている。ただせきが出ると胸が痛く、不安に襲われて、夜、眠れない、恐くて恐くて、涙がふれる。

娘はしばしば非常に激しく泣いた。明らかに心のどこかが混乱しているようだった。不安神経症。パニック障害。そんな言葉を聞いたことがある。このような状態をいうのではないか。そんな



な泣き方である。彼女は、漠とした捕らえどころのない不安と、眠りたいのに眠れないいらだちを、とりあえず泣くことで何とかしたかったに違いない。

なくさめてほしかった。正直に言うと、綾乃のパニックに付き合っていたのは夫だった。私は彼女の泣き声に弱い。心の奥にいらだちが見え隠れし、平静になれない。どうし

ても……。

私は綾乃の泣き声を隣の部屋で聞きながら、きっと自分の子育てが悪かったんだと思っていた。私は綾乃に自分の価値観を押しつけ、彼女を自分の思い通りに育ててしまった。綾乃は優秀な、よい子だった。

### 三月

せきは続いている。胸の痛みも気になっっている。綾乃は再び小児科の門をたたいた。

医師は、ここへきて初めて重い腰を上げてくれた。ただのかぜではないらしい。そして血液検査。結果は、「百日咳」ということだった。

「せきが二ヶ月くらい続きます。綾乃さんは、もうじきよくなっていくでしょう」

医師の言葉どおり、せきはしだいに少なくなっていく。胸の痛みを訴えることもなくなった。よかった……、と夫と私は思っていた。親だけがよか

つたと胸をなでおろしていた。

## 四月

頭が痛いという。

そのわりには、公園に行つてひとしきり遊んでくる。友だちとはしゃいでいる。

「頭は？ 痛くないの？」「うん、痛くない」

しかし夜になるときまつて、「頭が痛い」と言い出す。苦痛に顔を歪めて、「ママ、頭が痛い」と言う。

「なぜかねえ。熱は？ 熱を測つてみなさい」

「熱、なかった。でも頭、痛い。何か大きい病気じゃないかなあ。なんか心配」

そしてやはり寝られない。「寝れない。寝れない！」と泣く。

夫が鼻炎を疑つて耳鼻科に連れていった。アレルギーの持病があり、花粉症の時期に鼻をぐずぐずする綾乃である。そして「副鼻腔炎」という病名を

もらつて帰ってきた。頭痛の原因になつていたらしい。

「原因がわかつてよかつたね。薬を飲んで治つていくといいね」私は綾乃に言つた。彼女がなんと答えたか覚えがない。あいまいに受け流したような気がする。複雑な思いが自分の中にあつたのかもしれない。

自分のからだは自分が一番よく分かるということか。綾乃は治らなかつた。

頭が痛い。眠れない。泣けてくる。泣き出すと涙が止まらず、どうしていいかわからない。

夜、綾乃の泣き声を聞きながら、私はひよつとしたら今やらせている勉強のせいではないかと思つていた。教えれば何とかできてしまうので、綾乃は六年生には少し難しい勉強をしていた。どうしよう、そのせいかもしれない。

私は綾乃の不調が彼女の悲鳴に聞こえた。

勉強のせい？ 脳がきしんで、悲鳴

を上げている？

一週間たち再び耳鼻科を受診した。副鼻腔炎はよくなつてきているのに頭痛は引かないとの訴えに、医師は首をひねつて小児科受診を勧めた。「他の病気かもしれないですから」

小児科では、やはり医師が首をひねつていた。

「昔から癩の強い子でしたか？」

そう言われても、癩が強いというのはどういう状態を言うのだろう。そうでもありそうだし、そんなことはなさそうでもある。

「気持ち落ち着ける漢方薬と頭痛の頓服、セデスを出しておきます」

そして少し間を置いて、こう言つた。「綾乃ちゃん、おりこうだから、ちょっといい子しすぎてるんじゃない？」

娘は強く否定していたが、私は自分の危惧がそこにあつたので、そのことが頭に張りついた。

翌日の連絡帳に一部始終を書くと、担任からこんな返事が返つてきた。

「成長期（思春期）に入り、二次性徴

が現れる頃、このような頭痛、あるいは骨の成長の速さと筋力のアンバランスによる、関節の痛みを訴える事例が多くあります。綾乃さんも、成長期に起こる頭痛と考えるとよいのではないのでしょうか。

綾乃さんは、毎日生き生きと学校生活を送っています。担任から見ても心理的ストレスに起因するとは思われません」



成長期に起こる頭痛。

原因は、成長期?!

その言葉は、私を暗いやな場所から救い出してくれる一本の糸だった。しがみついていたれば、光のあるほうへ行けるような気がした。私はもう本当に、自分の子育てを思い出しでは打ちのめされ続けていたのだった。

私は娘に連絡帳を見せて、「綾ちゃん、成長期に頭痛が起こることがある

んだって。綾ちゃんもそうじゃない? だからさ、心配しなくてもいいんだよ」娘は心持ち逃げるように、「うん」と言った。

## 五月

不眠と頭痛によるイライラ、パニックが時折爆発しつづけていた。

何か手だてをこうじてあげないといけない。夫と私の意見は一致していた。精神的なものなのかもしれないが、ほっておけば静まってくものなのかもしれないが、娘が苦しんでいるのだから、何か解決の糸口を探してやらないと。

「一度、大きい病院で全部調べてもらおうか。かかりつけの先生に相談してこよう」

それが脳のMRI検査だった。

予約、検査、結果が出るまで何週間かかった。費用も一万円以上かかった。しかし「異常なし」の声を聞く頃、綾乃はずいぶん落ち着いてきていた。

自然に落ち着いてきた感じがある。頭痛は続いていたようだが、眠れないと泣くことがほとんどなくなつた。

そもそも不眠の件があつて以来、家族全体の睡眠時間が大幅に遅れていた。なんだかんだとおしゃべりしたり、まだ二歳の次男と転げまわつて遊んだり、気がつくとき十時近くになつてしまつていた。それが幸いしていた。綾乃の泣き声がしない夜が続いた。

## 六月

鼻炎で耳鼻科にかかった。鼻の調子が非常に悪い。

それに加えて、学校の検診で視力測定を勧められ、測つてもらつたらなんと〇・〇五だった。

〇・〇五だ。

綾乃の目は手がつけられないほど悪くなつていく。そして不眠。

不眠で泣く事はなくなつたが、時々眠れないと夫を起こしている。頭は相変わらず痛いようだ。

七月には、歯並びが極端に悪いため、矯正歯科に通うことになつた。この歯並びが頭痛の原因かと思うこともあつた。

いずれにせよ、娘のからだは何物かにとりつかれ、内部から蝕まれているように感じる。胸が、頭が、鼻が、目が、耳が、精神が！  
完膚なきまでにたたきつぶすつもりか。

## 七月

解決したのは時間だった。

いや、解決はしていない。しかし、パニック状態は脱した。時間がゆつくり、そう仕向けてくれた。

「綾ちゃん、最近、夜、寝れるようになったの？」

「うん」

「そう、よかつたね、よかつたじゃない」

「うん」

「頭は？ 痛くない？」

「たまに」

「だいじょうぶ？」

「うん」

思春期病ということばを、新聞で見つけた。

このところの不調は思春期病だったのか。担任はそれを言いたかつたのだろう。しかしどこまでがそれで、どこまでが偶然この時期に重なつた彼女の病気だったのか、判断がつかかねてゐる。

もっと正しい対処法もあつたに違いない。私と夫は、ただおろおろと手をこまねいていただけだった。綾乃が自分で現状を受け止めた。そんな具合のこのごろだ。

乗り越えつつあるのを感じる。心が安らう日が来るのを願つてゐる。

もし、このようなことで情報があつたら教えていただきたい。

八月、今でも夜、眠れない時がある。

(え・小沢恵子)



## 情報化の波

神奈川県平塚市 後藤美幸

中学三年の息子の学級懇談会で、ある母親が、娘に携帯電話の購入を迫られて困っているという話をした。そういえば、しばらく前、我が家に野球部の仲間が集まったとき、一人の携帯に、同学年の女子五名から連絡が入り、みんなで冷やかしたりして盛り上がった

ことがあったが、確かに、息子も含めてまだ持たざる子達は一様に羨望の眼差しを投げかけていた。思春期の、異性に関心を持ち始めるこの時期、直接会ったり、面と向かって話すことには抵抗があっても、電話やメールなら気軽にコミュニケーションがとれるという訳で、彼らには、何とも魅力的なツールと映ったに違いなかった。それにしても、中学生で携帯電話が問題になるようになったんだなあ、私は娘のときのことを思い出した。

娘は高校三年なのだが、現時点で、同学年でのその普及率（PHSを含む）は、限り無く百パーセントに近いという。その娘も、購入したのは高校二年になる頃だから、全体の中ではかなり遅く、しかも親子で随分悩んだ末のことだった。

端的に言えば、その必要性と料金のことが問題になったのである。後者については、うちではアルバイトを認めていないので、親が支払をする代わり、かなり低い料金設定にし、超過分は小

遣いから差し引く、ただし、家の電話やテレカはこれまで通り使ってよい、ということでの折り合いはついた。問題は前者である。しょっちゅう会って話をしていて、家に帰れば電話もファックスもある、その上さらに必要なものだろうかというのが私の言い分。それに対して娘の方は、円滑な友人関係を維持するためには必要だと言うのである。ここが私の最も理解し難い点だったが、一連のやり取りの中で、彼女がぼつんと言った、「これがなければ、私は友だちの輪から外れてしまう」の一言は、今でも悲しい響きで私の耳に残っている。そうでなくても、複雑な人間関係から引き起こされる、陰惨な問題の多い時代を思うとき、その一言は、じゅうぶん私の気持ちを揺さぶった。

さて、ここで話はがらりと変わる。

今年、緑まぶしい初夏の頃、私を含めて、学生時代の親しい仲間六名が奈良で集まったのだが、別れる間際に、一人がEメール交換を呼びかけたところ



ろ」、なんと私以外の全員がメールアドレスを持っていたのだった。ちょうど一年前に京都で集まったときは、行き違いがあるといけないからと、初めて家族から借りて持って来た携帯電話が、いざ使う段になってちっとも機能

しなくて大笑いだった。そのおばさん達は、この一年で随分実力をつけていたらしい。

まあ、それはいいとして、奈良から帰った私は、さっそく写真を現像プリントし、各々に一筆認めたくえで一斉送付したのだが、その反応がなんとも鈍いのだ。なかなか返事が来ないのである。そして、間をおいてぼつんぼつんと届いた便りによれば、彼らはその後メール交換をして盛り上がっているらしい。

——ああ、私は友達の輪から外れてしまった。かつて娘が言った言葉の意味を、私はこのとき初めて深く理解した。

「情報化の波」のことを、私はまだ遠くにある高波、つまり近づくときははっきりした形で、一気にどどーっと押し寄せるものかと思っていたが、案外、ほんやりしていれば気づかないうちにひたひたと寄せてくる、満ち潮のような迫り方をしているのかもしれない。

件の友人からの便りには、「早くあなたも一緒にメール交換出来るといいね」と書かれ、また沖縄サミット以降は、「IT革命」の言葉を聞かぬ日はないくらいだ。懸念されている「持てる者と持たざる者の格差」については、小さな経験をしたことになるのだろう。

目下、うちでは、パソコンの買い替えにともなうインターネットの加入を検討中（諸事情により少し気長な話だが）。いずれにせよ、潮に攫われることなく、うまく乗っかってみれば、また何かが見えて来るのかもしれない。

## メルマガ投稿を通して見えてくるもの

横浜市都筑区 ゴル（36歳）

私が今、はまっているもの、それはメーリングマガジンへの投稿です。「メルマガ」は誰でも発行できます。発行したい人がマガマガなどの無料配

信業者と契約し、読みたい人が、マガから送られてくるリストの中から、気に入ったメルマガに購読申し込みをするのです。

そのリストの中に「投稿中心の構成で、夫婦の愛情や、家庭外恋愛について考えよう」というコンセプトのメルマガを見つけ購読してみたら、これがおもしろいのです。

内容はセックスレス、夫婦のコミュニケーション、男女の友情、既成の概念にとられない自由な恋愛（家庭外恋愛）についてなど、三十歳代、四十歳代の既婚者にはタイムリーなものばかりで、投稿中心のリアル度も、申し分ありません。

六十歳代の男性が司馬遼太郎の文章を引っぱってきて、プラトニックラブを熱く語ったり、不倫を繰り返してしまふ三十歳代の男性の告白に、四十歳代の女性が「自分を傷つけるような不倫を続けるより、自分自身を大切にしてほしい」と、メールを出したりと、日常ではあり得ないことが起こってし

まうのがこの世界の不思議なところだす。

中には夫婦で面と向かつては言えないけれど、夫の会社のパソコンにこのメルマガを転送しているという主婦の方もいて、そんな使い方もあるのか、と感心したこともありました。

夫婦間のプライベートな問題は、だれかれ構わず相談できるといったたぐいのものではなく、かといって一人で悩んでいてもらちのあかないこともあります。こんな悩みを、自分の正体を明かすことなく相談できるのは、ネットの匿名性が生かされるメリットだと思います。

投稿にはまっている私自身、メールを書くことで自分自身が見えてくることが多いと感じます。文章にするだけで、訳の分からなかった感情が落ち着いてきて「ああ、本当は私、こんなことを思っていたんだ」と、自分を冷静に見つめられる目を持つところは、「わいふ」への投稿がやめられないのと同じです。

私の場合は、家庭外恋愛推進派で、掲載された私の投稿に対し、「不倫を美化するな」といった抗議のメールが少なからず来たこともあるらしいのですが、編集者という防波堤があるおかげで、実害を被らずに、好きなことを言わせてもらっています。

こんな言動を主婦仲間でしたら、「欲求不満なの？ 旦那さんとうまくいってないの？」と勘ぐられるのがオチでしょう。「今さら恋愛論だったって、結婚してるのに」と、異端児扱いされかねません。結婚してしまつたら、恋愛についてだけではなく、何事につけ、男の人とじっくり語り合うことなど、ありえないことになってしまいます。あつたとしたら、互いのその下心に余計な神経をつかわなければなりません。それがネットを通じてだったら、年齢・性別・肉体（！）にこだわらずに話ができるのです。

「家庭外恋愛」（いわゆる不倫とは、一線を画したいという思いから、主宰者が作った造語です）という微妙な話題





になると、編集者なくして、ネットで語り合うことは不可能に近いことです。必ずと言っていいほど「不倫を美化するな」「浮気される側の気持をないがしろにしている」という批判が来るからです。ホームページの掲示板で

こうなってしまうたら、お互いが見えない分、感情的な中傷合戦はエスカレートするばかりで、掲示板閉鎖に追い込まれるのは必至です。かといって、反対意見もない、一見「マナーの良い」掲示板では、お互いが、なあなあムーブの告白ごっこに終始し、話がダイナミックに展開していきません。一人では限界があっても、大勢で語り合うと思いがけない方向に話が行くところがおもしろいのです。誰かが編集の手を加えないことには収拾がつかず、その点、メルマガという形態はこの話題にぴったりだし、編集者の力量が問われるところです。

このメルマガの編集者のコメントがまた絶妙で、一体どんな人なんだろうとメールを出したら、普通の、同い年の主婦で驚きました。本人曰く、もっと過激に自分の好きなことを言いたいだけけど、主宰者という立場上、中立のコメントしかできず、それが歯がゆいのだとか。この公平さこそ、読者を引き付けている大切な要因でもある

のです。

二十歳代から六十歳代前後までの読者を引っぱる魅力的な編集者と出会えたのもネットのおかげなのですが、ここ一か月以上、メルマガが発行されていないのです。どうやら本人がプライベートなことがらでかなりの苦境に立っているらしく、「人には一度しかない人生なのだから、と書いても、自分のこととなると……」というところが、痛々しく、このメルマガ発行の経験が彼女に道を与えてくれればいいなあと思っています。直接会ったことも、話したこともない人ではありますが、身近に感じてしまう、これもネットならではの体験なのかもしれません。

時々、自分はどうして一銭にもならないことにこうも夢中になるのだろうと、不思議に思うことがあります。肉体を離れ、肩書き、諸々のしがらみを越えたからこそ見えてくる精神の世界に、自分を遊ばせていることがたまた楽しいのです。

(え・栗田笑)

# 嫌疑

野村治子

その朝、治子は歯医者に行っていた。いつものように、八時前に台所に立ってみそ汁を作った。朝食の準備をして、姑のトメの部屋をノックしてあけるといい。朝、ぶらぶらと散歩に出かけることがよくあるの  
で、障子を開けておくのがいつもの合図になっている。

歯医者には、朝一番に順番をとってある。治療を一番に受けて、早く帰ってきたいので朝食はとらずに出た。どうせ夫の務は、九時前でないと二階から降りてこない。待合室にいるとき、

「工藤さん、電話です」

受付けが呼ぶ。夫の務からだ。

「もうすんだか」

「いいえまだ」

「とりあえず、すぐかえってきてくれ」

務のただならぬ声に治子は不吉なものを感じた。

車が赤信号ばかりにかかる。

家に帰りつくと、すでに義妹の山辺夫婦が来ていた。

蒼白な顔の務が、言う。

「ばあさんが首を吊った」

治子はトメの部屋にかけ込んだ。

「もう息が切れとる。どうしたらいいかと思っ  
て待っていた」

務が、治子の指示を待つとは。

「救急車を呼んでも、もういけまいから」

救急車が、けたたましい音をたてて来たら、近所の人がとび出して来て、人だかりになるだろう。とっさに四十年前の、義弟の範男の睡眠薬自殺のことを思い出した。

いま治子の頭には、息子の健のことしかなかった。健のだいたいな結婚の時期に、なんとということをも。

トメが、「健が、健が」と孫をうまく抱き込んだのはなんだったのか。健は充分にそれに応えた。

健の人生の一番大事なときに妨害するとは。治子の胸の中ではトメへの憤りだけが渦を巻いていた。

「とにかく、山中先生をお願いしましょう」

山中医師は、務の幼な馴染みだった。

「それなら頼みにいってこい」

務は動転してしまつて、どうしていいか判らないら

しい。治子だって同じだ。

義妹の山辺千代子の夫が口を出す。

「わしも行くから」

治子は、うわの空で車を運転していた。山辺が受付へ入ろうとする。患者でこつたがえしているのに、この人はそこで言おうとするのか。

「こつち、こつち」

治子がうながして、本宅の玄関へまわつた。奥さんが出た。

「あのおう、ちょっと先生にお願いしたいんですけど。このおばあさんがこれをやってねえ」

首のところへ両手を当てた。医師でない妻に平気でそう言うのを、呆然と聞きながら治子はへたへたと玄関にくずおれた。起こっていることが理解できない。





あまりのショックだった。両手を床のタイルの上のせて、頭をかかえ込んだ。

出てきた山中医師は、治子のようすにおどろいた。山辺が、さつきと同じように、首に掌をもっていつて説明している。

「すぐ行ってみます」

山中は、かけつけてくれた。

トメは山中病院へときどき通っていた。

「ここ一週間ほど、さびしいさびしいと言われるので、きのうも、老人ホームのデイサービスにいつてみなさい、大勢のおつれがありますよと言ったんですけれどねえ。これはみたところ、今朝五時ごろのことですね。すぐ警察に連絡しますから」

「なんとか秘密にはできませんか。うちにはまだ結婚していない息子がいます！」

「外部には隠しても、警察だけは連絡の必要があります。市役所の届けだけ、家の人が行かれたら、どこにも洩れませんか。山辺さんが行かれたら心配ありません」

山中は、親切に言った。

パトカーではなくて、私服で、普通車で来るよう。入る時は裏口から、と治子の言葉通りに山中は警察に手配してくれた。そして患者が多いので、診察をすませてまた来るから、と帰っていつた。

警察官二人がきた。

「何か遺書めいたものはありませんか」

探してみたが、なかった。

トメは、二行ほど書いていたが、義妹の千代子がかこへ来るなり、すぐそれらしいものを探し出して、自分のポケットへ入れたのだ。

「あとのことは千代子によくいつてあるからよろしく頼む」という内容だったらしい。

これを読まれたらたいへんだった。千代子が事前に知っていたことが、務にばれる。千代子はそれがこわかったのだろう。

「そんなもんがありがあ、なんの問題もないんですけど。たいていあるもんですが」

二人の警官は、部屋の中を探し回った。

机の下から、網袋に入ったみかんが出てきた。

「みかんが出たいうことは、死ぬ気じゃあなかったとい

うことじゃ」

山辺がおもわせぶりに言う。とたんに警官が、治子を別室に呼んだ。

このとき、務はもう一人の警官に、トメに関係する生命保険証書の提示を求められたという。金庫から、証書類を全部取り出して見せたが、トメのものがある訳がない。

別室で刑事は、立ちはだかつたままで治子に聞く。

「なんか、原因の心当たりはないかな」

「きのうまで変わりはありませんでした」

「おばあさんとは、うまいこといっとったんかな」

「そりゃあ、嫁と姑ですから実の親子のようだったとは思えませんが、普通だったと思います」

うまくいっていましたと、答えればよかったのかも

知れない。しかし聞かれるままに、治子は思うとおりを答えた。

「朝、なん時ごろに起きたんならな」

六時半ごろ目が覚めた。教員を退職してからというもの、朝の戦場のような慌ただしさからの解放感は、たとえようもなかった。

いつものように、二階の自分の部屋で一時間ばかり、着かえたり、片づけたり、雑誌をめくったりした。それから、行きかけたばかりの編み物カルチャーの宿題を少しした。

「なんのために編み物をするんならな。朝から編み物じやあいうような話を聞いたことがないっ」

「はあっ？」

治子はおどろいた。この人はいったいなにが言いた



いのだろう。

「なにをしたんか、はつきり言うてみんなさい」

怒声に弱い治子はどきまぎした。四十年配の体格のいい刑事が、気味わるいうすら笑いをうかべて、きめつけるような態度で詰問する。

「そう言われてもどうも。あみものをしたのですけど、みせましようか」

刑事が、急に態度を変えてきめつけるような口調でゆっくり言った。

「わしやあ、殺人を疑うとるんじゃ」

後で考えれば、この刑事はなんと短絡的な言葉を口走ったのだろう。しかし、混乱している治子は、この言葉を務に対して言っているものと勘違いした。それで治子を別室に呼んで確かめているのかとおどろいた。その時治子は居なかつたのだから、証明のしようもないのだが。

「そんなことないですよ。いくらなんでも」

「あなたに言いきるんじゃっ」

「へえっ、わたしが」

あいた口がふさがらなかつた。

「朝からあみものと言ったり、妙なことを言うて誰が証明できるんならっ」

そう言われれば、務は寝ていた。ほんやりしていた治子にも、事の重大さが呑みこめてきた。顔からさっ

と血の気が引いて、青ざめた。体がふるえる。

ひどく顔色をかえた治子を見て、警官は務に声をかける。

「ちよつと奥さんに署まで同行してもらいますから」

「へえっ、どうして」

「いやっ、あつちでちよつと聞きたいので」

「家内は居らなんだんですよ。わたしが裏の木からおろしたんですよ」

「しかし、誰もみとらんでしよう。だからこういう時、現場を動かしちゃあならんです。とりあえずちよつと」

争っているときではない。治子は観念した。務と刑事が大きな声を出せば、となり近所に知れわたる。治子は私服刑事について車に乗った。ちよつと山中医師が来るのと入れ違いになった。

警察の小さな部屋に坐った。なんの飾り気もない六畳ほどの小部屋だ。机を挟んで椅子が二脚だけある。さきほどと同じことを聞く。

「朝起きてからのことを、全部言うてみんなさい」

一気おくれして、治子はまともにはしゃべれない。うわずった声で、同じことを答える。うす笑いの警官は変に横柄で、ねばりつくような言い方をする。

ノックして誰が入ってきた。刑事に耳うちする。

「あつ、もうよろしいから、お宅まで送ります。失礼な

ことを言ったかもしれませんが」

「どうしてですか」

「医師の実地検証で、きちんと証明できましたので」

治子には、訳が判らない。許さないという怒りだけはもっていたが、この場で抗議する強さはなかった。

## 木蓮の樹

家に帰る車の中から見える景色は灰色だった。たしかこの辺に、家が並んでいた筈だが……。

治子はもう一度、窓に目をやったが、外は白と黒の絵の具を塗りたくったような感じで、ものの形がぼんやりとしか見えない。

さくらの並木がまだ赤かったと思うのに、なんだか薄汚れた黒っぽい木が、やたらに突っ立っていた。

この治子の色の感覚は、その後も長く続いて、なかなか元に戻らなかった。

裏庭の、トメがくびれた木蓮の木は、ちょうどこの時期、天に向かって、燃え上がるように赤紫の花をつけていた。このいろだけは、何故か治子にはつきり見えた。花裏の白さが不気味に赤紫を際立たせていた。

ときには秋にも花をつけるこの木が、治子は好きだった。だが今はもうみるのも気味悪かった。道端で見

かけてさえ、目をそらせてしまっ。

トメは、ものすごいことの出来る人間だった……。

治子が太刀打ちできる相手ではなかった。共に暮らしたりできる人ではなかった。治子はずくづくトメと過ごした日々を思い返して納得する思いだった。

「あのおかあさんの目付はただごとではない。治ちゃん、この縁談はやめよう。わるいことは言わないから」

結納の三万円を持って、務の母親のトメが初めて来た時のことだ。母の柳は治子にそう言った。しかもトメは、坐っている間ずっと腕組みしたままで、ひざに手を置かなかった。

「務さんのことをどうこう言うつもりはない。しかしあの親はいけない」

治子が、務に好意を持っていることを知っている柳は、いままでこの縁談にはつきり口をだしたことはない。だが、トメに会ったその晩、激しく治子に反対した。

その時柳は言った。

「親の言葉に間違いはなかったと、きつと思ひ当たる日が来る」

この言葉を、四十年後の今になって治子は思い出し

(続く)

(え・小林正子)

# いのち、はるか

## —老親介護の日々—

新潟県中蒲原郡

小林智枝

デイサービスへ  
行きたくない

今までは気付かなかつたが、体が不自由になった母を入浴させることは一仕事だった。最初のころは夫と二人で一時間以上もかかった。退院直後の母は、風前の灯火のように力もなくふらふらし、心もとなかった。風呂場に連れていくことから始まって、台に腰掛けて足を上げたり、手すりに掴まらせたりと、何をするにも一つ一つ声を掛けながら、体を支えてゆっくりとしな

ければならない。

夫は、母が倒れる前から手すりを取り付けてやればよかつたと後悔していた。母のことをよく分かつていた私自身も同じ気持ちだった。そんな気持ちがあるせいか、夫は母にことのほか優しかった。

「はい、おばあちゃん、手伸ばしてください」

「この手すりに掴まってください」

「その角に気を付けてやって」

と、細かく気を使って一生懸命だ。夫が母の体を支えたり、動かしたりし、私が洗ったり、足を上げたり下げたり

した。まだ少し寒かつたので、風邪をひかせないようにと気を使った。赤ちゃんの入浴と同じで、風呂から上がると下着やパジャマを着せて、ベッドへ連れていき、床ずれの手当をした。夫は腰掛け用の台や、浴槽内の足おき台を片づけたりと、目に見えない手間がかかる。母を入浴させるときは、「おばあちゃんを風呂に入れよう」と自分に気合を入れてかかった。それでも入浴後、母が気持ちよさそうにして、ぴかぴかした頬で、ゆったりしてベッドに横たわっている姿を見ると嬉しかった。



我が家から歩いて十五分くらいの所に、町がつくったデイサービスセンターがある。母のこともお願いしたいと思つて、退院するときに申請書をだしてきた。

町役場の保健婦が母の様子を見にきてくれて、審査会で審査の上、決定した。それによりデイサービスの看護婦が打ち合わせにみえて、退院後一カ月くらいしてから、毎週木曜日にお世話になることになった。

デイサービスを利用する目的は三つ



ある。第一に入浴させてもらうこと。第二には、家だけでなくもつてくる老人に、人と出会う機会を作ること。第三に、介護者があるの間、自由に使える時間を作ることである。

デイサービスを利用する人はお年寄りで、体の不自由な人ばかりだ。母が素直に行くかどうかと内心案じていた。母は老人なのに、老人会の行事には参加したことがなかった。私が子供のころから何十年も付き合っている親しい友人たちがいて、毎月集まっている

だが、そのほかの交際はなかった。

デイサービスへ行く初日、送迎バスが午前十時半過ぎに迎えに来た。

施設は新しくきれいだ。広いワンフロアになっていて、ベッドや畳敷きの休むところが奥にある。中央にテーブルがあり、左側に風呂場、トイレがある。トイレは車椅子でも入れるように広いし、風呂場も二つあって広い。午前中に入浴を済ませ、昼食が始まるうとしていた。男性と女性は別々のテーブルで、座れる人たちは畳敷きのほうにいた。母は車椅子でテーブルに着いていた。八人の車椅子のおぼあさんたちは、どちらかという症状が重い人たちで、食べさせてもらっている人や、痴呆かと思われる人もいた。母の向かいの人は母の食事に手を伸ばして食べた。母は小食なので、その人の好きなようにさせていた。食事後それぞれベッドに入ったり、布団に入った。休む前に、洗面台で食後の口をすすいだが、母が「こんな所に居たくない」と言った。やつ

ぱりと思つたが、休憩になつたので私は先に帰つてきた。

母が帰つてきて、行きたくないと言ひ出したら何と言つたらいいものかと思案した。

午後四時前に送迎バスが来た。家の小路をバックしてくるので、ピツ、ピツ、ピツという音で、玄關まで迎へてた。

母はこたつに入るなり言つた。

「もう二度とあんなどこ行かないからね」

とうとうきたかと思ひ、お茶の用意をした。

「我がままだわねえ」

「我がままかあ」

「何がいやなの」

「何もかも嫌だ」

「施設の人たちが不親切なの」

「親切でも不親切でもない」

「おばあちゃんを風呂に入れるのが大変なんだよ」

「……」

「それにね、家にばっかり居るより、

人の大勢居るところへ行つて、気分転換するのも大事だしね」

「どっち見ても気持ち悪い人ばかりだよ」

「気持ち悪いなんて失礼だよ。病気のせいなんだから」

「……」

「私もおばあちゃんがデイスービスに行つてゐる間に、色々用事が足せるから助かるんだよ。結婚式の前にパーマをかけに行くときも、姉さんに来ても良かったりして大変だったでしょう。おばあちゃんのバジヤマ買いに行こうと思つても、おばあちゃんのそばを離れられないから、買ひに行けないでしょう。おばあちゃんがデイスービスに行つてゐる間は、私にも大事な時間になるんだよ」

「……」

「物は考えようだから、嫌だと思へば何もかも嫌になるけど、お風呂に入れてもらつて有り難いと思わなきゃあ」

母は黙つてしまつて何も言わなかつた。その夜姉が心配して電話をよこし

た。

「やっぱり……、でもこれは大事だからね」

と言つた。

次の木曜日に、母は何も言わずに行つた。三回目も行つた。しかし行きたくないのだからと思われた。私はその間に、眼科へ行つたり、バジヤマを買ひに行つたりした。四回目の夜、

「もう、あんなどこ行かないからね、ぼけたおばあちゃんたちと一緒にいたくない」

と言いだした。私はとうとうきたかため息がでた。私も見てきたので、母の気持ちは想像できる。私たちは自分と老人と違うという意識があるから、割り切つてみる事ができるが、隣り合わせにゐる身になると、辛いのもしれないと思つた。

「私も困るよ、用事が足せなくなるから」

と言うと、

「どこへでも行つてくれればいい」と言つた。

「おばあちゃんひとりにして？」

「大丈夫だよ、行つて来ればいい。あんな嫌な思いするところ、もう行かないからね」

母の意志は堅かった。嫌だという弱い立場の母を、無理に行かせるのは老人いじめになるし、そんなしてまで行かせても、私自身落ち着かない。誰にも気がねなく用事を足せる時間がなくなると思うと、黒雲に覆われたような、やり場のない気持ちに追い込まれた。

「おばあちゃんがそこまで言うんなら、仕方がないねえ、行かせる訳にはいかないだろう。そのかわり、思い切つて短い時間出かければいいよ」と夫は言つた。

私もそれしかないと思う心が沈んだ。台所の椅子に腰掛けて、ほんやりしている私に、二男が声を掛けた。

「どうした。元氣ないね」  
「おばあちゃんがアイサービス行きたくないんだって」

「面白くないって言つたね。だいたいい、おばあちゃんを病人扱いするのは

よくないよ。もつと普通の人として接すればいいよ」

「だって、転ぶのが心配なんだよ。いくら言つても分からないし、長く入院して、危ないかどうか分からなくなっているんだもん」

「おばあちゃんがそう言ったの？」

「言わないけどそうだよ」

「それは母さんがそう思っているだけだろう。おばあちゃんがそう言つた訳じゃないんだから」と声がだんだん大きくなつてきた。

「そんなに大きな声だと、おばあちゃんに聞こえるでしょう」

「聞こえて悪いこと言つてないよ。そう思うのは心にやましい気持ちがあるんじゃないのか！ とにかく、普通の人として接すればいいんだよ」

ああ、何ということだろう。二男の言葉に、目からうるろが落ちた。母が転んで以来の張りつめていた糸が切れて、ぽかんと穴が開いたような気もした。

確かに退院直後は、何もかも手を差

し伸べてやらなければならなかった。しかしこんなに回復したのだ。ひとりでトイレへ行きたがつている。一度も連れていつて欲しいと言つたことがない。母の動きで、心配して付いて行つた。考えてみれば、いちいち人に言わなければ動けないなんて、そんなに不自由なことはないだろう。母は自由になりたいのだ。転ぶかもしれない不安よりも、ひとりで自分のことをしたいのだ。どうしてこんなことが分からなかったのだろう。私は母を守ることばかり考えていた。二男の言葉から、母は守られるより、自立したいのだろうと思ひ至つた。

それにしても二男は、何と偏見のない健全な考え方ができるのだろう。その若々しい精神がまぶしく、私の心にはかびが生えているような気がした。心配ばかりしたつて始まらない。転ぶときには転ぶのだと開き直つた。実際によく転んでいる。また入院になったら、今度は兄たちからも順番に、病院通いしてもらうしかないと自分に言い

聞かせた。そうとでも思わなければ、ふらふらと歩く母と暮らしていると神経が参ってしまう。そう思うようにしてから、母に「気をつけて」とうるさく言わなくなった。そして、母は辛い気持ちでいるのだから、したいようにさせて、少しでも気持ちよく暮らせるように配慮してやるしかないのだと思えるようになった。

それにしても私は何と勝手なのだろう。母が入院していたときは、どんな状態になっても看てやろうと思っていたのに、用事を足す時間がないといらにするなんて……。

私は思いきって、短い時間、出かけた。それもさんざん考えて、どうしてもということだけしかできない。なかなか割り切ることができずに困っている。

一方、母に何か生きる張り合いを持たせたいと考えた。そこで二男の新居のために、雑巾を作ってもらうことにした。手先が器用で、木目込み人形や姫ダンス、ちぎり絵などをたくさん作

ってきたが、今は手が震えるし力もなくなり、自分では気に入らない仕上がりのようなだ。それでも縁をおり込んだ丁寧な仕事ぶりは、さすが几帳面な母だと感心した。座椅子に背をもたれ、体を曲げながら一生懸命に針を動かす母の姿に、痛々しいような嬉しいような気がした。

また母は入院するまで、煮干を細かくして黒いはらわたを取り、瓶に入れて使いやすくしてくれていた。道具を揃えて頼んだら、前と同じにきれいにしてくれた。

簡単な手仕事をするようになってから、日中、眠らなくなり頭もすっかりしてきた。

あんなに苦労した入浴も、私と一緒に入って自分で体を洗えるようになってきた。私は危なくないように、浴槽に入るときに手を添えて注意を払う。

デイサービスに行きたくないと言いだしたことから、私と母の気持ちの中間に変化があり、いい方向に向かったような気がする。

母が転ぶかもしれないという不安が消えたわけではない。それは今でも大きい。転ぶたびに、弱った骨に響いているような気がする。最近では転んで打ったところだけでなく、背中全体が痛いと言いだした。しかし開き直らなければ、お互いに精神的な動揺が大きくてよくない。ストレスがたまるだけなのだから……。

私は退職後始めた陶芸教室と、英会話教室と、スイミングスクールを中止せざるを得なかった。健康作りのために、スイミングだけでもやりたいと思うけれど、その間に母が転んでまた入院になることが怖いし、母の状態がいつも安定しているわけではないので、なかなか思いきれないでいる。

## 高齢化社会への不安

母と暮らして、年をとるということの厳しさを感じてきた。それは昨日までできたことが、今日にはできなくなるということの連続だった。体中のあ

ちこちが痛くなり、苦痛を我慢して生活しなければならぬ。

「年をとるのは辛いことだ」と母はよく言う。健康な人は「どこも悪くないんでしょ」と言うが、高齢による肉体の衰えからくる痛みは、元気な人には理解できないようだ。自分で医者へ行くうちはまだいいが、そのうちに足が弱って自分の力では行くことができなくなり、やがて家族が連れて行きたくても行けなくなる。

しかし私の母はまだいいほうだ。記



憶力減退は大きいですが、最近はいっぺりしてきて、物事を公平に見る判断力は健在だ。私ができることを不思議がると、夫は、「それは年の功だよ」と言った。それに限られたことだが、自分のことを自分でやろうとする気力があるし、危ないながらも何とかやっている。最近の本を読むようになった。

世の中にはもつともつと大変な人たちが大勢おられる。

よく、「子供の世話にはならない」と言う人がいるが、この現実をどこま

で分かっているのだろう。必ず誰かの世話にしなければならない、死ぬこともひとりではできない。こういうことを知らなければ、しゃあしゃあと生きていけないのに、知ってしまったために私は辛い。そしてまた一歩、人生の深淵に踏み込んだような気がする。

病院で出会ったおばあさんたちや母をみていると、どうしても自分の老後はどうなるのだろうと考えてしまう。

入院中、母は他の患者や看護婦たちに「小川さんは幸せだねえ」とよく言われた。母を心配する人たちが大勢訪れていたからで、それは母の人徳によるものだと思う。母は苦勞しただけに人には優しく、しっかりと生きていて誰にでも公平なところが、見上げたものだといつも思っていた。これが、自分勝手で我がまま一杯であれば、誰もこんなに心配しないだろう。自分がどんな風に生きてきたかが、いざというときに現れるのだと思った。それは見せかけやその場限りの振る舞いでなく、毎日の暮らしの中に、自然にでてくるも

のであり、人間性の問題だと思った。周囲の人たちと良好な人間関係を築くことの大切さを学んだ。私は今まで母からたくさんのお話を教えられてきたが、病床にあっても、身をもって大切なことを教えてくれている。

## 母と二人三脚の日々

数年前、ある心理学講座を受けたときに、何気なしに聞いていた著名な講師の言葉を思い出す。

「私の女房の母親が痴呆がでてきました、女房は困って、私にどうしたらいいか聞くんですよ。私は自分の親だと思わなければいいよって言いました」

何と理不尽な言葉のようだが、さすがに心理学者だと今になって思う。自分の親には情が深いので苦悩も大きくなるが、自分の親だと思わなければ、悩みが軽くなるかもしれない。

私もきつと自分の親だと思わなければ、もう少し気持ち楽になるのかもしれないが、なかなかできない。それ

は生きてきた記憶を消すことができないからだ。

母が杖を突いて懸命に歩こうとする姿を見るたびに、私の子供たちを連れて、蒲原祭を見せに連れて行ってくれたのとか、私が子供のころに、毎晩夜なべをして着物を縫っていた姿とか、そのほか色々浮かんでくる。おや歩いているねと、何気なしに見ることができれば、平気でいられるのと思うが、その平気がいつも遠くて私の手には届かない。そして疲れる。

毎朝母はなかなか起きない。何かなんだかわからないと言って、ぐったりと弱った感じがする。私は心配な気持ちを横に置いて、夏の暑さや年齢相応なのだと自分に言い聞かせ、「ご飯にしない？」と声を掛けたり、足の裏をくすぐったりして笑い合う。

先日母と入浴しながらこんな会話をした。

「もうなんの心残りもないから、死んでしまいたいと毎日考えているよ」と母が言った。

「私も時々もう死んでもいいなと思うときがあるよ」と、私も本音を言う。

「お母さん（私のこと）はまだだめだよ、なんの心残りもないのは私のことだよ」

「でも、死にたいと思ったって死ねないよ」

「そこなんだよ、だから困っているんだよ」

「このごろ思うけど、今の私の生き甲斐はおばあちゃん（母のこと）なんだよ。いまだに親離れできなくて、おばあちゃんがなくなったら、どうしていいかわからないよ」

「そんなことないよ、さっぱりするよ」

「おばあちゃんは、なんにも手が掛からないし、我がままも言わないし、こんなにいい年寄りはいないよ。したいようにさせておけばいいんだから。それに、家中で大事にしてるでしょう」

「そうなんだよ、こんなに大事にされて有り難いと思ってるよ。でも、もう体があんまり難儀でねえ」

「そうだねえ、生きてるだけで大変だ

ねえ、こんなに大変だと思わなかったね」と私、

「そうだねえ」と、しみじみと母は言う。

「私はね、今の状態が長く続けばいいと思っっているよ。何とかトイレへ行けるでしょう、寿命がくるまでこのままだね、寿命がきたら苦しまないで逝けたいなって思っっているよ」

「そうかねえ」

「死にたいなんて考えてると、元気が出ないでしょう」

「うん、でない」

「おばあちゃんが元気がないと、私は心配なんだよ。おばあちゃんが元気だと、私も元気になるんだよ。だからおばあちゃんには元気でいて欲しいんだよ。死にたいなんて考えないで、元気でいてほしいんだよ」

「でも、もうあんまり情けなくてね」

「オシッコや、うんこなんて、私は何とも思わないよ、そんなこと心配しないで」

「でも情けないよ」

「子供に返るんだよ、この前風邪引いて歩けなくなっただけど、また歩けるようになったでしょう。心配しないことにしよう」



「そうかねえ」

「調子が悪いときは、私が体も頭もみんな洗ってやるから、なんにも心配し

ないでいいよ」

「そうだねえ」

「死にたいと思うと元気でないから、元気でいよう」

と、こんな風に死ぬことを二人で話し合うようになった。

少し前までは「死ぬなんてとんでもない」という気休めを言っていたが、そんな空々しい次元をはるかに超えてしまった。そして母は多分、「全てを終わりにして楽になりたい」と、思い続けているのだろう。先日は葬式の夢を見たと言った。その日、私が友人のおばあさんの葬式に出かけたためかもしれないが、そういう私も、夏の暑さに母がぐったりしていると心配したり、夜中でも、母の寝息を気にかけている。

私ばかりでなく、老親介護をしている人たちは時として、心が正常と異常の境界にさまよったときがあるのではないだろうか。後になって聞いたのだが、おばあさんが膝の手術をして入院している近所の奥さんも、私と同じように

腕が痛くなり、だんだん肩や首まで痛くなったりしたし、胃もしくしくと痛み食欲がないとのことだった。体の変調ははっきりしているが、心の揺れは目に見えず、知らず知らずのうちに蓄積されて、うつ状態になったりする。そのことに自分も周囲の者も気付かないで、ぎくしゃくすることがある。介護者が心身ともに健康でないと、いい介護ができないと身を持って感じた。

娘として母の世話ができることを幸せに思うし、夫や息子たちが母を大事にしてくれるので感謝している。それなのに心の隅で、夫と自由に旅をしたいと思うときがあり、我ながらあきらめが悪いと呆れてしまう。デイサービスでさえ嫌がる母を、ショートステイさせることは無理だと思う。だとすると、母を失う悲しみと引き替えてなければ手に入れることができない自由だなんて、その重さに押しつぶされそうになる。そして、他の姉姉よりも母と暮らした歳月が長いだけ、私には幸せな思い出が多いが、それだけに深い深



い悲しみを乗り越えなければならぬことも分かっている。

母は私たちと暮らすようになってから、いつも幸せだと言っていた。そのことが私と夫にとって何よりのことだった。私と母は、体ばかりでなく、考えることまでよく似ている。きっと二人は来世で、双子になって生まれ変わるのかもしれないと思うときがある。

人が想像する以上に、いのちはしなやかで、したたかだ。そしてその先は、はるか、遠い。

心を強く持って、母と二人三脚の明日を迎えたい。

### あれから四年半

母が退院して、在宅介護が始まってから四年半になった。杖をついて懸命にトイレまで歩いた母も、今は歩けなくなった。少しづつ体も頭も衰弱が進み、いつでも眠いと言って、ベッドでウトウトしている。それでもポータブルトイレで、何とかひとりで用を足し



ているので、私は助かっている。

近所に開業したクリニックの先生が、定期的に往診してくれるようになり、私の不安は軽くなった。ヘルパーさんの入浴介助にも助かっている。その後介護保険制度が始まり、母の状況をよく分かっているクリニックの先生がケアマネージャーとなり、要介護四と認定された。九月からの更新では一ランク低くなり、三に変更されたが、私ที่บ้านに居て介護できるので、今のところ、三ランクの金額に収まっている。「もう終わりにしたい」は、母の口癖になった。

母が元気にしていると私も元気が、弱々しく、ぐったりしていると私まで気弱になって、元気を吸い取られる。私はいつも家の中を動き回るばかりで、いつの間にか時計の針が回り、季節が変わって行く。

できるだけ考えないようにしているが、母はこのままベッドから起きられなくなり、おむつを当てて寝たきりになつてしまうのだろうか。どんなかた

ちで最期を迎えるのだろうか。誰かの最期を看取った経験のない私は、正直言つて怖い。しかし、いつか必ずその時は来る。母の年齢を考えると、何があつても動じないようにしようと夫と話をしている。

「余程のことがない限り、入院させないで、私が面倒みるからね」と、私は母と約束した。

しかし、実際に食事ができなくなつたり、高熱が続いたりしたら、先生から往診してもらつたとしても、家で母の苦しむ姿を見ていられるだろうか。入院させて病院にバトンタッチすれば、もつと長生きできるかもしれない。だが、点滴のチューブにつながれて延命治療を受けることは、母にとつて拷問のような気がする。この数年の母の頑張り、「もう楽になりたい」という願いを思う時、私の答えは決まつている。兄妹たちから異論はあるかもしれないが、どんなに辛くても心を鬼にして、延命治療は受けさせずに母をおくることが、ずっと母を看てきた私の

最後の親孝行ではないだろうか。その場になると、どうなるか自信はないのだけれど……。

昨年六月、二男のところに大きな男の子が生まれた。私の初孫、母のひ孫は元気で一歳の誕生日を迎えた。うれしいことによく笑う。母の顔を見るとニコニコし、ベッドの周りを回りながら、枕元にあるプザーのボタンを押したり、ベッドに登るようになった。無心でかわいい笑顔は、母と私にひとときの希望と元気を与えてくれる。いつもひ孫の夢をみて、親子で遊びに来るのを心待ちにしている。母は自分の命の灯火を、この小さな命に託そうとしているかのように、小さな手を握つて離そうとしない。私には大切な二つの命。

二〇〇〇年十月十六日には、母は九十三歳の誕生日を迎えます。

(終)

(え・佐藤瑞江子)

# 子育てフオーラム

NMSのページ



## 「息子はLD児？」

千葉県船橋市 由美あき子（41歳）

息子を精神保健研究所で診て頂くことになった五月下旬初診当日、息子も私も緊張してしまった。正直私は、精神病院というイメージで受け止めていて、患者の中には危ない人達もいるのではないかと想像してしまっていたのだ。でも伺った所は全然違っていた。

建て物こそ古いけれど、心理療法を勉強する学生たちは居たが他の患者に

は会うこともなく、明るく健康的な場所だったのには驚くとともにホッと胸をなでおろしてしまった。

担当の先生（医学博士）は、「LDの研究で有名」と耳にする方だったので怖い気もしていたけれど、これまた全然違って気さくな小父さんと言った感じの人。

助手の女の先生（医者）は、長野県の子供病院の先生で、勉強のため月一回上京した折に患者を診てくださったというとのこと。

人一倍人見知りの強い息子は、案の定緊張しすぎて声は出ないし固まってしまう、息子の所から見えない席で様子を見ていた私の方が思わず声を出し

てしまった。「いつもの様に書いてごらん」と。すぐに先生に「お母さんは私が質問した時以外は黙っていて下さい」と叱られてしまった。息子は名前を聞かれていても声が出せないでいる。先生は「では紙に名前を書いてみて」と息子に紙と鉛筆をさし出したのだが、息子は反応なしで固まってしまっているのだ。それを見かねての私の声だった。暫く沈黙が続いて息子と助手の先生を残し私は別室へ呼ばれて先生とお話した。さすがの先生も息子の固まりように驚いておられ、「息子さんは、とても傷つきやすくてデリケートな面があつて、心の方も強くしなければいけませんね」と言われてしまっ

た。初対面でももの十分くらいの間  
先生は息子の一面を見ぬいてしまっ  
た。本当にそうなのだ。息子はデリケ  
ートな子で、傷つきやすい。入学以来  
担任の先生は声をそろえて息子のこと  
を「優しい子」と言っ下さる。でも  
その優しさが伝わらないことが多いの



だ。今の学校生活においては……。  
息子のことをクラスメイトの中に  
は、「馬鹿なんじゃないの」とか、「何  
も言わないから判らない」とか、本当  
に誤解したことなど色々言ったり思っ  
たりしている人がいるみたいなのだ  
が、担任の先生は息子がクラスに居る

ことで、クラスの皆が優しくなれてい  
る。息子が居ごちが悪いと言出し  
たら、このクラスは問題のあるクラス  
になってしまう。だから息子が居るこ  
とはこのクラスのパロメーターなのだ  
と言っ下さる。

先日、国語のテストを持ち帰った  
また白紙だった。担任の先生は「家で  
やり直して提出しなさい」という配慮  
をして下さる。私は、もう息子を叱ら  
ない。それより共にテストに取り組む。

息子は白紙答案を持ち帰っても全然  
動じていない。あせるのは親の方で、  
息子にとって学校の存在は何なのだろ  
うか？ 中学、高校と進むことを考え  
ると不安はつのるばかりだ。その上、  
今春年中入園した五歳の妹が今、文字  
の読み書きに夢中で少しなら本が読め  
るし、私によく手紙を書いてくれる。

こんな様子を見ていて、息子は息子  
なりに成長しているものの、妹の方が  
はるかに覚えが早く、何より自分から  
興味津々で喜々として文字の読み書き  
を覚えようとしているのだ。

息子の年中時代のクラスメイトらのように、妹が順調に成長している。これからは成長のペースの違いから、新たな問題が起こるのであるが、息子なりの成長と娘の成長を見守りながら、妹が兄を馬鹿にすることなく育てること、次々と課題がでてくる。八月下旬に息子は四回目の検診を受けるが、少しずつ先生に心を開き始めている。

## 宿題奮闘記

茨城県龍ヶ崎市 柴尾恵子（49歳）

なんとなくゆとりのある今年の夏休み。いつもと何か違う。そうか。子供宿題の手伝いがないのだ。

去年の八月三十一日は、自転車盗難防止のポスターに振り回された。中三の息子に、  
「早く描かないと乾かず時間もいるの

だから」と朝から小言を言い続けていた。彩色に入る前の構図を描くところから、作業はなかなか進まず、もう何日もかかっている。明日は始業式である。やっとポスターらしくなってきた午後は、

「明日からは、受験勉強の毎日が続くのだから、今晚は花火大会をやりよう」と、友達からの電話があった。行きたくてたまらない息子の筆は急に速くなったが、四ツ切画用紙のポスターはそう簡単には仕上がらない。夕方になると、別の友達からも次々と早くおいでと誘いが掛かる。私が電話にでて、「さつきちゃん。もう宿題は済んでるの」と尋ねると

「おばさん。もうバッチリですよ。待ってまーす」の答え。息子にみんなは宿題が済んで遊ぼうと言っているのだ。宿題が済まない者は行くことはないと言っていると、彼の落胆振りに私の方が悪しくなった。結局、十時には戻って続きを描く約束で出してやることにした。

大喜びで、行ってきまーすと出ていった様子では、十時には戻らないかもしれない。手伝ってやるしかないかと、娘と残りを描いて十時頃やっとポスターは仕上がった。

「ただいま。ポスターの続きをやります」と、くたびれたが満足して十時半に戻った息子は、仕上がったポスターに気付いた。そして、きちんと正座をして、

「お母さん。お姉ちゃん。有難うございました」と頭を下げた。だが、これは毎年の事なのである。毎年夏休みの終わりに、

「来年は一人でやります。有難うございました」の繰り返して、今年も高校一年生になった。

このポスターは入選し、文具券二千円分をいただいた。姉に全部渡すように言ったが、半分ずつになったらしい。いろいろな考え方があって、私は宿題を手伝う事になっている。私が小学校四年か五年の時だから、四十年も昔の話であるが、「廊下を走らない」

という主旨のポスターを描くことになった。昔の木造の小学校の廊下は狭くて薄暗く、今のガラスに比べると割れ易く、ガラス破損の事故も結構多かつ

た。ポスターを描くといっても、水彩絵具とクレパスしかないし、ポスターとはどう描くのかも詳しくは習っていなかったように思う。二時間の授業で



描き終わらなかつた者は宿題となる。

数日後、素晴らしい作品が提出された。デイズニーのキャラクターの小熊が、STOPという文字のかかれた矢印を両手で肩に背負い、矢印の先は廊下をイメージしてデザインされた絵を指している。文章で絵を説明するのは難しいが、そのポスターは私の目に焼き付いた。英語ではあるがSTOPという、小学生でも何となく理解できる英語が冴えていた。たぶんポスターカラーで仕上げられていたのだと思うが、色もあきららかに違って美しかった。このポスターを提出した生徒の叔父さんがデザイナーで、手伝ってもらったとの事だった。先生方は、この素人離れたポスターを褒めそやし、学校の何ヶ所かに掲示して廊下の事故をなくそうということになった。先生方の手で大きく描き上げられたポスターは、廊下に天井から吊り下げる方法で掲示された。その下を通るたびに得意気なその生徒がうらやましかった。

私の親は宿題を手伝ってくれること



はずなかつた。絵は大好きだったので、この時も夜遅くまで一人で一生懸命描いた。私の作品は二番目の出来だと廊下に張り出されたものの、出来映えの差が明らかで、とても嫌な気持ちだったのを覚えている。私にもアドヴァイスをして、手を取って教えてくれる人がいたらなというのが素直な気持ちであった。

長女の小学一年生の宿題に、原稿用紙三枚に読書感想文というのがあった。あいうえおがやと書けるようになった一年生に、この課題。担任の先

生に宿題をやるためにどのような指導をされたのですかと尋ねると、感じただけの指導で三枚の原稿用紙を埋められる子が何人いるのだろう。親が手伝わずにできる宿題なのだろうか。

娘と一緒に本を読み、感じた事を簡条書きにさせてみると、子供の感性の素直さや奇抜さに驚かされた。根気のある作業だったが、簡条書きを組み立てて、子供と二人で三枚の読書感想文を書き上げた。

二年生では統計グラフに取り組ん

だ。二週間分の新聞のちらしの種類と枚数を調べ、かわいらしいグラフにした。夏休み明けに賞に輝いた作品を見学したが、これは母親のレベルで手伝える分野ではなかつた。緻密なグラフと美しい色彩の作品が並んでいた。

長女が小学一年生の時から、長男が中学を卒業するまで九回の夏休みを一緒にずいぶん勉強したものだ。中には私が手伝った作文で市長賞をもらったこともある。工作も習字もやった。

夏休みは給食がない分、母親は忙しい。パート勤務はあるし、家事もある中、よくやったと思う。

子供達も大変だ。夏休みにやらなければいけないのは宿題だけではない。部活動・ピアノの発表会も夏だった。塾にも行ったし、地域の行事もある。プールにだつて行きたいし、祖父母にも会いたい。

どうして夏休みは、こんなに宿題が多いのだろう。

もう宿題に追われない夏がいい。今年のような静かな夏がいい。

## 電車大好き

東京都新宿区

林 直美

小学二年生の息子は、物心ついた頃から電車が大好きである。我が家には



車がないのでどこへ行くにも電車を利用することになり、接する機会が多かったこともある。そのためか山手線の色は黄緑、中央線はオレンジと、色を電車で重ねて覚えた。駅名の表示を見て聞いてくる息子に答えていたら、彼はいつのまにかひらがなを覚え、今では主要な地名を漢字でもほとんど読むことができる。

息子の希望を聞くといつも“電車に乗りたい”だった。それで私は、時間とお金に余裕ができると、息子と“電車乗り”にでかけた。都心部の電車にはあきるほど乗っているが、ある日、秋田新幹線に乗りたいと言うので、“こまち”に乗って秋田まで出かけた。が、駅前のホテルで一泊しただけで、次の朝には再び車中の人となった。生まれて初めて秋田へ行ったというのに、観光はもちろん、駅以外の景色さえ見ず、名物も食わず、私にしてみれば何とも言えない複雑な胸中である。しかしながら、盛岡では新幹線の連絡の様子や青森へ向かう特急電車を見学したりして、輝くような息子の表情に、とりあえずよしとした。幸い(?)実家が四国なので、その帰省時に途中下車をして、大阪をはじめ西日本の電車にも乗せた。電車以外にも興味を持つようになり、去年は初めてフェリーに乗せた。すでに飛行機には何度も乗っているのです、今年には長距離の夜行バスに挑戦した。

友達の多くは、塾や体操教室、プール、ピアノ、習字と、低学年ながら結構通っている。しかし、息子はなぜかお稽古事には行きたくないと言いつつ、どこにも通っていない。その分の費用を私は教育費だと思って電車乗りかぎに費やしている。私には多少の不安も残るが、息子の生き生きとした顔付きが、彼にとつて（電車乗りかぎに連れていくことが）悪くはないだろうことを予感させてくれる。

息子は一人っ子である。そうするつもりはなかったのだが、時期的に夫が体調をくずし、私のアトピーも悪化して薬を飲んだりして、結局息子は一人っ子のままである。今のところ、親の事情も何となく理解しているし、まだ甘えん坊で男の子でもあるせいかな、弟妹をほしがったりすることはない。しかし、いずれ淋しいと思うことが必ずあるはずである。

世間の人は、どういう事情かも知らずに兄弟がいまいいかかわいそうとか、親の勝手とか、結構主観的な意見を押しつけてくる。体験から言うなら、誰しもたった一つのパターンしか知らないのによく非難できるなど、私はいつもあきれてしまう。

何でもそうだが、きょうだいがいることも一人っ子であることにも、それぞれ長所、短所がある。私は、親が身軽に行動でき、どこへでも連れて行けるといふのは、一人っ子のいいところと解釈している。夫の仕事でアメリカへ行つた時も、私は息子を連れて一緒にアメリカを楽しんできた。

行きたいと息子が切望すれば、どこへでも気軽に行くことができる。行く人は子どもが何人いようと行くのだから、私にとつては、子どもが二人以上いることを考えると、とてもそう簡単には出かけられないと思うのだ。

私の偏見かもしれないが、その利点を精一杯息子に示してやりたいと思っている。いつか兄弟がいまいかことで、必ず淋しい思いをするだろうが、その時に少しでもその悲しい思いを減らす

ことができるように、各地へ行った思い出をたくさん残してやりたいと思うのだ。一人っ子であることの欠点を感じた時に利点をも思い出して、一人っ子である現実を前向きに考えてほしいと願っている。

運動が苦手だが、電車博士だとクラスの友だちから認められていて、今のところいじめもないようだ。息子自身、乗つたという体験からくる知識もあって、彼の中で大きな自信になつていくようにも感じられる。息子が健やかに成長してくれることを、私はいつも祈

## 娘と私

東京都世田谷区 後藤 晶

っている。

子供に依存して生きていく親（大人）のことが、時々問題になる。

人の話を讀んだり聞いたりは、



客観的にはわかったつもりでいた。子供は親の道具じゃないのよ、子供の問題を親が取り上げてはいけない、と。

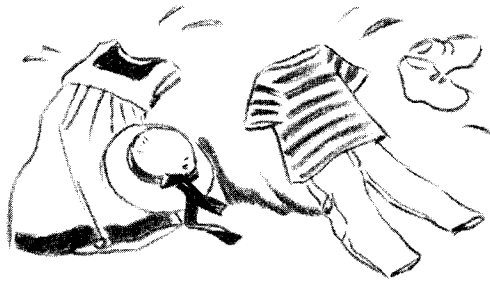
ところが、私自身にもその部分があったことを最近思い知らされている。

十歳の私のかわいい娘が、なんということか、ワンピースを着ないのである。

そして私は、一時的にせよ深く傷ついた感情をおさえられなかった。

娘は今、少女特有のすらっとした体型。自分の希望で髪は長く伸ばし、清潔の習慣が身に付いていて、出しゃばりではないが、はきはきと返事ができる。宿題や学校の持ち物も親の手を借りることもなく、毎日自分のペースで退屈せずに生きている。しかもルックスは、私から見ても十分におしゃれしがいがある。それなのに……。

ジェンダーフリーの考えを強く持っている私は、息子と娘に対して「男(女)らしい」とか「女(男)っぽい」という表現を使わずに育ててきた。私自身がいわゆるひらひらの服では育てら



れずそれで満足しているのが、子供たちにもシンプルだが個性的な私好みの服を着せてきた。自然と娘はスポーティーな格好を選ぶようになったが、それも活発な小学生にとっては当然だろう。洋裁が好きな私は、自分と娘の趣味に合い着心地のよい子供服を次々と縫っては着せて楽しみ、人からうらやまれることすらあった。なのに……。

夏休みには、簡単にで涼しくプールでの着替えも楽な手製のワンピースをいつも着せていた。木綿のレース地やチャエックのサッカーで、既製品にはないすっきりとしたデザインワンピース。それは私自身の夏休みと同じなので、帰省したとき母も懐かしそうだった。

そんなワンピースを、今年はこちらと見て娘は「着ない」というのである。「まっすぐならいい」。ウエストの切り替えからスカートがギャザーになっているのがいやだという。だけど、去年長すぎたのとか、今年もう私の判断で作ったものとか、すでに四枚もある。



それにスリムなシルエットのワンピースの型紙は、なかなか本には載っていない。

頑として、ワンピースを着ない娘。私は真新しい四枚をどうしたらいいのだろう。

一回きりでもいいから、着てほしいと思う。母親の趣味を拒む娘が憎たらしい。優しく言っても強く言っても、

着ない。着てくれない。私は、まっさらのワンピースをはさみでずたずたに切り裂きたくなった。

しかしもったいなくて思いとどまり、逆に娘がふだん着ているTシャツや短パンを捨ててしまおうかと思つた。服がなければワンピースを着ざるを得ないだろう……。

そんな葛藤に戸惑って、私は自分に

も子供への依存があることを思い知らされた。息子はいつも親に試練を与えてくれるが、さすがに母と娘ってわかりやすいなあ、自慢の娘よ、と得意だったのがこのありさま。娘やお前もか、と嘆きたいが、冷静に考えると十歳の今でよかつたとも思える。

今まで親の期待をたいして裏切らなかつたよくできた娘の存在に、私の虚荣心は満たされ、膨らみつつあったのだ。ちようどいい時に気づかされた、

ファッションは個性の表現。清潔、人と同じでなくていい、その場にあつた服装、そんなことを子供には伝えてきたつもり。そしてたしかに伝わりつつあるなら、ワンピースを着なくても認めねばなるまい。

だけどもっさらのワンピース、誰かにあげるにも、手作りって難しいのよね、気を使わせるし、好みもあるし。しばらくは取っておいて、完全にふつきれてからフリーマーケットに出しましょうか。

(え・西宮さき)

健康双書

## 化学物質過敏症家族の記録

小峰奈智子 著



小峰奈智子 著  
農山漁村文化協会  
本体1500円＋税

宅である。住む人はたちまち病気になるってしまっそうだ。

本書の著者一家が住んだのはこうした新築住宅ではなかったが、借りて入ったアパートの畳の下に、多量の有機リン系殺虫剤がまかれていたため、夫と子ども二人とともに一家全員「化学物質過敏症」にかかってしまった。これはもう、たいへんに厄介な病気なのである。

今、私たちの周囲にはじつに多種類の化学物質が充滿している。目に見えないこれらが果たして人間の体に無害であるのかどうか。それはほとんど分かっていないのが実状だといふ。たいていの人は目に見えないから平気で暮らしているわけだが、いったん過敏症になってしまつと、あらゆる化学物質がさまざまの有害

性を現して襲いかかってくる。

頭痛、筋肉痛、ひどい倦怠感、疲労感、微熱、下痢、腹痛、視力異常、集中力思考力の低下、健忘、不眠、ジンマシンなどなど。数え切れない多彩な症状が出てきて、社会生活がほとんど不可能になってしまふ。乗り物に乗れない、他人の家に入れない、子どもは学校生活ができない。食べる物も農薬や添加物が付いていればたちまち反応を起こすので、どんどん範囲が狭まってくる。

著者一家は北里大学病院で診断と指導を受け、「解毒」のための運動や入浴、ビタミン療法などを始めるが、改善は遅々たるものである。心身症やアレルギーと診断されている中に、この患者は多くいるのではないかと著者は言う。

東京都八王子市 和田好子

「呪われた家」という怪談はよくある。住んでみるといろいろな怪異が起こつて、住人は恐怖に駆られ、または原因不明の病気に襲われる。

たいてい死霊の祟りというのが結論なのだが、この世紀二〇〇〇年の現代、「呪われた家」はたくさんあるらしい。「シック・ハウス」といわれるのがそれで、化学物質が多く含まれた材料、塗料で作られた新築の住

# FREE TALK

## フリートーク

### 家を建てるまで

匿名

事の起こりは、義母の一言から始まった。

「おまえは、うちの年寄りも長生きで困ると言う！」

と私に向かって突然言った。身に覚えがないことだ。第一、そんな言葉を言える訳がないじゃないか。人間として。そりゃ、内心そう思うことだってある。

結婚と同時に同居して二十六年、色々なことがあった。義母には、さまざまなことを言われて来た。冒頭のよきな言葉は、今に始まったことではない。何度もこんな言葉を言われ続けてきたが、ひたすらがまんをしてきた。それは子供達のためだったような気がする。別居を夫に何度も希望したこともあったが、一人っ子の夫は同意しなかった。

義母と一緒に暮らさないためには、夫と別れることも何度も考えたが、これを打ち消してきたのは子供達の存在であった。

しかし、先の言葉を聞いた時の私は、怒りで体が震えしばらく止まらなかつた。悲しくて、情けなくて……。何が、私の心の中で音をたてて崩れ落ちたのだ。

それからというもの、心臓は不定期にドキドキ動く。夜はねむれなくなり、体はギブアップしていた。

もう自分を解放してもいいだろう。今まで精一杯やってきた。子供達も大きくなって、自立してやっていける年齢にもなった。夫と別れよう。そうすれば義母と一緒に暮らさなくてよくなる。これから残された人生を、自分らしく、静かに生きたい。

数日後、夫に告げた。

「私と別れて下さい。一つだけお願いがあります。これから生活する分のお金を下さい。それは二十六年分の慰謝料だと考えて下さい。子供達は自分の

意志で親を選んでくれればいいです」

私は切羽詰まっていた。いつもの私の愚痴でないことを、夫は察したのだろうか。それから少しして夫は言った。

「家を新築しよう。母とは別々に建てよう」

夫の言葉は、私にとっては意外であった。夫は、姉も妹もいない一人っ子なので、親から離れられない人だぞっと思っていた。

さあ、家を建てる方向へと一気に向かった。今まで住んでいた家は、夫が十一歳の時義父が建てたものだ。築四十二年で、さらに十年前には瓦、水ま

わり、外壁、内装など大改装をしたものだから、壊すには惜しい家に見えた。

義母にとっては、建坪百坪の家は自慢であった。夫にとっても、四十一年の歳月はたくさん思い出があったであろう。しかし、私にとっては、この家での良い思い出が何一つないのは悲しい。台所に立つても、居間にいても、あんなことがあった、こんなことを言われたと、思いたしたくもないことばかりだった。やさしい言葉の一つでもあったなら……。嫁とは、こんなものかといやというほど認識させられた日々であった。毎日諦めて生活してき

たように思う。

さて、どんな家を建てようか。家族でモデル住宅を何度も見に行き参考にした。そして家族にあった家の図面を、私達で何回も引いて検討した。最後にやっと一枚の図面に決まった。大工さんは、友人に紹介してもらった。金銭は、義母の家は現金で、私達の方は全額ローンで計画した。

平成十年十二月、家と庭のお祓いを宮司さんにやつてもらった。最初に義母の家を建てるために、今まで住んでいた母屋の一部と子供部屋を壊した。年が明けた一月のことだった。

壊した壁をビニールシート一枚でおおってもらったが、この辺の一月二月の寒さは特別で、外気を遮断することには出来ない。ストーブを炊いても、どこを暖めているのかわからない位だった。

そんな最中、息子は肺炎になり入院してしまった。私は仕事をしながら、病院へ行ったり、家の片付けに追われる毎日であった。



二十六年住んでいた家の中は、物であふれていた。この際だから、思いきり捨てることにした。やっとなんとか片付けが終わったのと同時に、義母の家が完成し、義母だけ引越したのは、平成十一年三月三十日だった。それと同時に私達は借家へと越した。引越しをしてから娘が第一声を放った。

「狭いながらも、楽しい我が家」借家は二十坪のままに狭い家であったが、娘は今までどのように見て、どのように感じてきていたのだろうか、ふと私は思った。

私達の引越しと同時に今までの建物がすべて壊された。建てることには時間がかかるが、壊すのは二日で終わってしまった。ガラクタ化した我が家を、夫と歩いてみた。私は心の中で、これですべてを忘れよう。そしてこれから新しく生きようと決めていた。

四月には、棟上げとなった。骨組みが出来、壁が付き、床が張られ段々と家らしくなっていく。キッチンや洗



面台を決めたり、クロス、カーテンを決めた。その都度、家族でワイワイ言いながら一つずつ決めていった。

休日には、子供達と一緒に建築中の家を見に行き、まだ階段も付いていない二階へハシゴをかけて上り、ここが誰々の部屋だと見てまわったりもした。

ペランダから見た山々は、以前と同じでありながら、こんなにもちがって見えるのは不思議だった。

夏が過ぎ秋になり、いよいよ完成間近になった。以前より新築祝の日を夫と決めてあった。十月二十三日が義父の十三回忌にあたるので、新築祝と法事を兼ねてやる計画になっていた。

工事は二十三日の前日夜おそくまでやっていたが、なんとか完成した。当日、親戚一同久し振りに顔を合わせ、法要と内祝を済ました。

その次の週、私達家族と猫は新しい家へと越すことが出来た。

忙しく過ぎた十一カ月であった。一生に一度あるかないかの新築のこと。

忙しい中にも楽しさやほりあいもあった。義母との同居も、毎日あきらめの気持ちで暮らしていたが、こんな形で別々の生活をするとは思ってもいなかった。庭を挟んで義母と私達は暮らしているのだが、距離のある生活の良さを初めて知った。穏やかな日々が送れるようになったのは、ひとえに夫のおかげであると感じてやまない。

## 本土の人とは 結婚させない

永田道子

今年の七月は沖縄サミットのせいかテレビは沖縄ラッシュ。私は沖縄というとすぐ知人のA子さんのことを思い出す。

A子さんは若いころ、近くに住む沖縄出身の大学生と交際していたが、彼は大学を卒業すると沖縄へ帰ってしまった。

当時沖縄は日本に復帰していないの

で、A子さんは「ビザをとって沖縄へ。ビザが切れると日本に帰り、ビザをとって沖縄へ」という生活をしていたら赤ちゃんが生まれた。

正式に結婚しようとしたが彼の母親が大反対。その理由は「A子さんが本土の人間だから」「日本がアメリカと戦争をしたとき沖縄は本土防衛の盾とされ、住人の三人に一人が本土の捨て石として命を奪われたので、沖縄の人は本土を恨んでいる」とのこと。

その心情は充分私にもわかる。でもA子さんに赤ちゃんが生まれたのは戦後二十数年もたっていて、世の中は平和になっていたのに。

そしてA子さんに戦争の責任がある訳でもないのに、戦争の後遺症で愛する二人が別れねばならないなんて、私は納得がいかなかった。

奇しくもこの原稿を書いている日は八月十五日。テレビ、新聞では終戦記念日の行事や戦争体験を語っている。沖縄の方々をふくめて戦時中、家を焼かれ、食料難に苦しみながら生き抜い

た私達は、その日だけ戦争を思い出すのではなく、次の時代に戦争の恐ろしさを伝えていかねばと感じた。

さいわい、A子さんは沖縄の彼とは別れさせられたが、その後優しい人にもめぐりあい、子供を連れて再婚された。現在、子供さんと三人で幸福に暮らしている。

## 怒りも後悔も

静岡県浜北市 森茉美（39歳）

うちの娘は高校二年生。吹奏楽部に所属している。部活三昧の日々で勉強の方は最低。でも毎日楽しそうに学校へ行く。密かに「あんな成績でよく行けるなあ」と私は思っている。

娘の通う高校はいわゆる良い子が通う、それなりの信用のある伝統校だ……しかしこの夏、生徒に対する学校の姿勢について、不信任は頂点に達した。



娘の言い分しか聞いていないから、公平ではないのは重々承知で言わせてもらいたい。

問題は吹奏楽部の顧問である。彼は指揮が出来ない、音楽的センスもちょっと怪しい。指揮をやりたくて顧問になったそうで、指揮者に対する執着があると聞く。当然生徒達はいい迷惑で「指揮が分からない」とぼやく。本人は努力しているとはいうものの、三年たっても、いっこうにうまくならない。そこへ今年、他校から指揮も指導力も折り紙付きのA先生がやってきた。

にもかかわらず、顧問はその席を譲らないばかりか「彼は無関係、手伝ってもらう必要はない」と言った。

怒ったのは生徒達。定期演奏会の前にも顧問と話し合いをしたのだそう。ださるとおっしゃっているのだから、指導して欲しい」と生徒が言えば「校長先生の許可が下りない」と言い、「では、私達があした校長先生のところへ行ってお願いしてきます。それならいいですか？」と言えば、「じゃあ僕の方から言うておく」とうやむやに

してしまった。この時は相当険悪な雰囲気だったらしく、こんな話し合いは二度としたくないと娘は言う。

なんとか定期演奏会は成功したものの、事件は七月の終わりに起こった。クラシックの大会のいわば一回戦、彼女達の実力からいったら、当然勝てる大会だった。

しかし、当日、顧問は大失敗をしてしまったのだ。失格にはならなかったものの、動揺したため、後半の指揮はめちやくちゃになり、「ただでさえ分りにくいのに、手が震えちゃって、どこで入っていいか分からなくなっちゃったのだ」だそう。緒戦でつまづいて彼女達の夏は終わった。娘にとって最後の大会だったのに。全国大会は無理でも、その前までは行きたいと話していたのに。

後で、楽器のパートを指導してくれる先生に言われたそう。一度顧問と話し合ったほうがいいわね。顧問を変わることも含めてね

今更そんなことを言われても、二年



生にはもうチャンスはないのだ。散々顧問に言ってきたことは他の誰にも知らされず、取り返しのつかない結果を生んでしまった。音楽が好きで、みんなと演奏するのが好きで、それに打ち込んできた娘にとってこの結果は余りにも残酷ではないか。

顧問は自分がやりたいからというだけで、わがままを通したとしか思えない。どんな競技でも実力がなければ選手にはなれない。教師として、その前に一人の大人として、「生徒にとって何が一番良いことか」を最優先にするべきだ。学校側も、もっと生徒を主体にして、生徒の声を聞く姿勢を持つて欲しかった。

しかし、一番悔やまれるのは、娘の話聞いていながら、校長先生なり、部活動後援会なりに、直訴しなかった私自身の親としての行動力のなさだった。高校ともなると敷居が高く、まして学業のかんばしくない生徒の親にとっては、なかなか声をだしづらい。いつかもつと学校という場所が開かれた

ところになったら、こんなことは無くなるのかもしれない。わがままと自己主張をきちんとわきまえて、お互いが話し合う事が、当たり前前に出来たらすばらしいだろうと思う。

ただ望むだけではなく、自分に出来ることからやってみなくてはいけないかった。

皆さんだったら、どうしましたか？

## コンクール余談

大阪市鶴見区 家守恭子（70歳）

数年まえ、大阪の堺ピアノコンクールに出場して知り合った人が、その翌年N国際コンクールに入賞し、披露演奏会のチケットを送ってきた。料金のところは消してご招待としているので、当日は聞きに行つて「おめでとう」と声を掛けて済ませていた。

今春私もそのコンクールを受けた。テープ審査を経て本選に臨み、特別審

査員賞と言う賞を頂いた。同時にその通知書にはチケットノルマ二十五枚×三千円を振込んだ上で表彰式と演奏をするとのこと。つまり七万五千円支払つて表彰状を受取り、ドレスアップして五分余りステージで弾くと言うことである。その後、本選に前後して出た人からTELがあり彼女は三位入賞、賞金は一万円頂けてもチケットノルマが三十枚と言う。

結局彼女は九万円を振り込んで出場し、私は辞退した。若い人ならコンクールに挑戦して受賞の箔を付け、ステージの上で腕の程を聞いて貰うのもよいだろう。私の場合、同じ曲を繰り返して弾き込みその評価を頂ければそれでよいのであり、ましてステージドレスなどは気恥ずかしいしサマにならない。

さて、そのN国際コンクールは年三回くらい催されている。今夏の出場要綱には「入賞者は必ず表彰式と披露演奏に出場すること」となつたらしい。

事前のテープ審査料と本選審査料の

二万円では主催者側は採算に合わないのか、入賞者がチケットノルマを果たさないのは気に入らないのか、いささか考えさせられる。他県から参加して入賞した方は「旅費が掛かるのでチケット差し上げて悪いし、売るのも尚更出来ない」とチケットを束にして持っていた。

文化とか芸術は道楽とも一脈通じるさらいは否めないが、これから伸びる若い芽に、気軽に応じられるチャンスを提供するのが、結果としてはよいと思う。

## 地獄の果てまで ダイエツト?

アメリカトリロック市

伊藤琴子(42歳)

私は今まで生きてきた歳は四十二歳だが、精神年齢は二十五歳。大学で若い学生に囲まれていつも若い!と言われている。でもね、この歳になると友人たちの中には親を亡くすのが出てく

るし、本人が死んじやったりして、「人生ってほかない」、そう感じざるを得ない日もある。気持ちだけ若くても確実に時は過ぎていくし、加齢してるのよね。この間准教授に昇格したスチーヴは、「君、問題は「今、いくつ」という年齢ではなく、健康。体が丈夫かどうか。それが大切だよ」と言っていた。

私の教え子には、二十代にして癌になり亡くなったのが二、三人いるし、治療中のものもある。友人のケイの伯父さんは九十九歳だけどピンピンしている。今年九十三になるヤモメのボブはガールフレンドが欲しい、と言っている。歳じゃない、健康が一番。

ま、どれだけ長く生きるかは、人それぞれであっても、この世に生まれた以上は、人は絶対に死ぬ。確率的には百パーセント。団塊の大多数が老いてる今、老人ホーム、老人保険、老人病院、老育園(老人用デイケア)、葬儀屋、仏壇店などが、これから儲かる商売だよ。と、言っている私もいつ

か死ぬ身である。保証付。

アメリカのお葬式は普通フューネラル・ホームといって、日本の結婚式場のお葬式版のようなところで行なわれる。キリスト教の祭壇も、集会場もすべて揃っている。日本の檀家みたいに、家族で属していて毎週通っている教会のある人は、そこでする。いずれにしても、死体を家にもって帰るといふことはない。

アメリカ人は、死というものを語りたがらないが、テレビなど見ているとフューネラル・ホームがしっかり宣伝(コマーシャル)していて、中にはローンも受け付けます、そういうものもある。土葬にする場合、お棺にはいろいろ種類があり、「壁紙」がビロードだったり、白いフリフリのレースがついていたり、お値段もピンからキリまである。

私より十五歳上のケイは、もうすでに自分の火葬した灰を入れられるよう骨壺を買ってある。環境のことを考えると火葬の方が場所をとらないのでい

い、とか彼女は言っていた。まだ四十代の私は骨壺を買うほど、将来のことは考えていないのだけど、このまま独身でいたら、子どももいないし、誰が葬式を出すんじや、という疑問がある。そして、その葬式代を私は今から貯めなくてはならない。結婚式同様、お安くないわよ。

うーん。考えてしまおう。

このことを仏教をやっているエリックに話した。

「キンコ、大病院に献体したらいいじゃないか。葬式代も、高い棺桶代も浮くし、このまま独身でいても、いつ

死んでも心配いらぬよ」

「お前、アツタマいいな」、私は感心した。

「死んでからも社会のお役に立つなんて君らしいしね……」うまいことを言う奴だ、今度お寿司おごつてあげる。

うふつ。私はなんだか嬉しくなった。

献体をするにより、高い葬式代も、棺桶もいらぬ。これから私は自分で稼ぐ給料がすべて自由になるおこづかいになり、思う存分お金を使って、遊びまくって、死ぬその日まで楽しく、心配なく暮らせるのだ。やったあ！

私はその日のうちに大病院の解剖



科とコンタクトをとった。だって、電話急げ、つて言うじゃないですか。以下、その会話。

私「ハロー、あの献体したいんですけど」

病院「すばらしいわ」

私「インフォメーション送っていたんだけどいいんですが」

病院「その前に、貴女身長おいくつ？」

私「四フィート十インチ半、十一インチかな」

病院「体重は？」

私「一二八ポンド、いや、今ちょっと増えて一三〇ポンド」(サバ読んでる)

病院「骨は？ 太い、中太、細い？」

私「太いです」

病院「あなた太りすぎよ。骨の太いことを考えても、最低十ポンドは減量しないとね」(私は脳ミソが重いので、人より！)

私「はあ……」

病院「体重が減らないと、貴女には献体の資格がないわ」

私「資格って、死んでる人にも資格があるんですか？」

病院「そうよ、太った人はいらぬの」私「あのおう、私はまだ四十代で明日、あさつてに死ぬ予定ないんです。それに父の方も母の方もみんな長寿で、八十はおろか、九十ぐらいまで、ちよるいもんです」

病院「ま、四、五十年あれば、太目の貴女も縮んで軽くなるだろうから、申し込み用紙送りますね」

地獄の果てまでダイエツトか……お金をうかせたいなら体重を減らせだなんて……。

二、三日して、「ギフト」プログラムのインフォメーションが送られてきた。解剖科にしてみたら死体もギフトになるんだよね。すごい呼び方。人間の体を学ぶには、本物の人間の体を使うのが一番、十八歳以上で、精神衛生上健康な人なら誰でも応募できる。

「献体は、カトリック、プロテスタント、そして一部のユダヤ教でも認められてるので宗教的に問題はありませ

ん」

「事故死などで死体に傷のある場合、肝炎など伝染する病気にかかっていた人、癌を患った人、普通以上に太っている人、極端にやせている人は、献体をお断りしています」

「解剖が済んだら、火葬にされ、家族のもとに灰は返されませんが、家族のない人の場合は州の墓に埋葬、または他のところにまかれることになっています」……云々、と、そのパンフレットには書いてある。

州のジ・アナトミカル・ギフト法によるインフォメーションも同封されていて、死体、もしくは灰がどのように利用され、誰の手に渡るのか本人が希望を伝えられるようになっていた。この文書には、二人の証人の署名と本人の名前、署名、住所、電話番号、そして国民（外国人も含む）登録番号でもあるソーシヤル・セキュリティ・ナンバー、誕生日を記入することになっている。

これらの文書を目のあたりにして私

は複雑な気持ちでいる。確かに誰にも迷惑をかけず、死んでも医学に貢献し、生きている内はお金を使いたいだけ使って遊び、そしてそのためにせつせと働きキャリアを積む。ま、生きてる内はそれでいいさ。でもね、死体という物体になってしまった自分のことを考えるのってちょっとつらい。骨と皮、そして私は脂肪のたっぷりのつた、トロクハマチならさぞおいしいであろう体、それを伊藤琴子さんにして自分分というのはどうなってしまうんだろ……大学病院のまな板の上でお刺身になつてる自分……考えられないよね。

この間読んだニュー・エイジの本に、体というのはあくまでも借り物であり、魂は永劫なのです、と書いてあったけど、図書館に本を、空港にレンタカーを、返しに行くのとちよつとわけが違うもんね。結局、私は病院からの手紙はひき出しにしまったまま、毎日運動をして減量には努めている。

(え・渡辺美帆)

# 情報コーナー

## 「育児何でも相談室」開催

私達は、子育てについて、自分の親のやり方・子育ての先輩等の経験や助言を見よう見真似で育ててきた経過がありました。

しかし、核家族化の進んだ現在、子育ての先輩がまわりにいず、沢山の情報が氾濫している中にある、混乱し迷っている親たちが大勢います。

そして、一人で迷い、誰に相談していいかわからず、困っている方もいらっしゃることを思います。

ヒューマン・ギルドでは、そ

んな子育て中のお母さんに「子

育ては楽しい」「子どもといると心が和む」「子どもが活き活きしているのを見ると元気づけられる」と思ってもらえるよう育児

のあらゆる疑問・質問にお応えし、日常の効果的しつけ（何度もくり返さない）についても助

言・提案をいたします。妊娠中のお母さんから子育て中のお母さんまで、幅広くご相談を承ります。また、子育ての成功談・失敗談を参加者から聞ける機会

としてもご利用いただけます。子どもさん連れで参加されても大歓迎です。

相談は0歳児保育の経験があり、養護施設の保育士として働いてきた経験もある心理療法師の坂本洲子が担当します。

お友だち作りの苦手な方でも知らない間に人付き合いがうまくなることでしょう。

開催日は月一回 午前十時か

ら十二時迄の二時間です。

九月二十五日（月）十月十九日（木）

十一月二十日（月）十二月十一日（月）

参加費 一、〇〇〇円

会場 新宿区天神町六 Mビル

四F ヒューマンギルド研修室

三三三五一六七四

三三三五一六六二五

子育て日記「ミセス裕子の恥さらしな日記？ 子育てはヘンタイじゃなくて大変だ」

子育て日記を本にまとめました。「わいふ」に掲載された「アトビー日記」「おねしょ戦争」「発熱（熱性けいれんの後に）」も入っています。正直に自分の気持ちを書きました。虚構はありません。少し内容の紹介を。

「九歳の壁を越えて」いつもイライラしている長女。これが

八王子市本町一の一

〇四二六―三三三〇七

九歳の壁？「隣の入院」原因不明の高熱で長男が入院してしま

う。「ことばの習得」次男は二歳になってもまだ全くしゃべらない。

ぜひ、買ってください！

▼定価七〇〇円＋送料三〇〇円

▼問い合わせ先

梶川真理子

〒〇四六八一〇〇五八名古屋市中

天白区井口二丁目二〇一

（〇五二）八〇一―二七二一

Email: gwe@spice.or.jp

風変わりで個性的な幻想絵画

「武藤直美 油絵個展」

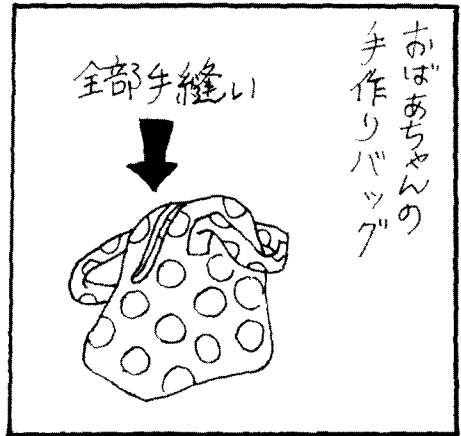
本誌イラストレーター、カステラネンコ（武藤直美）の世界。十月二十六日より三十一日まで

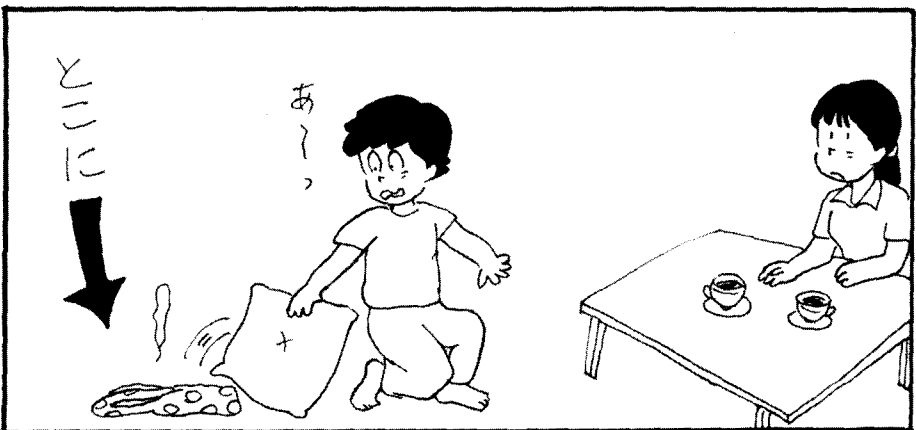
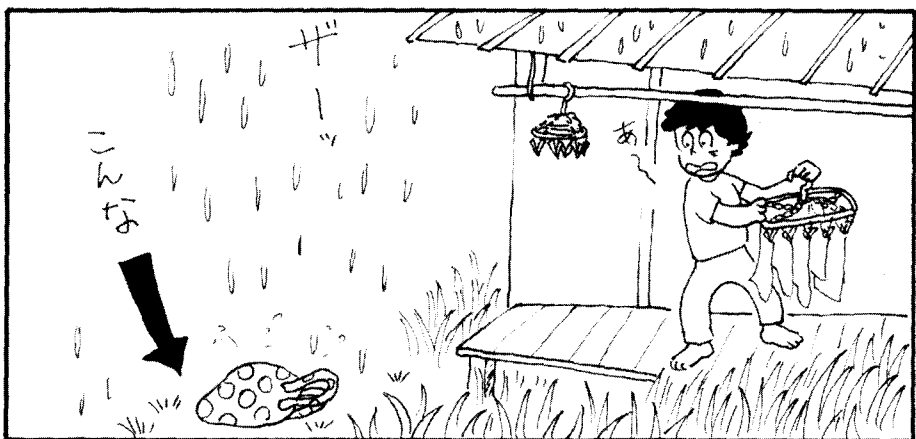
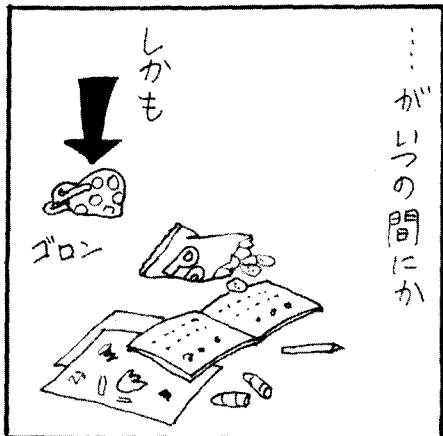
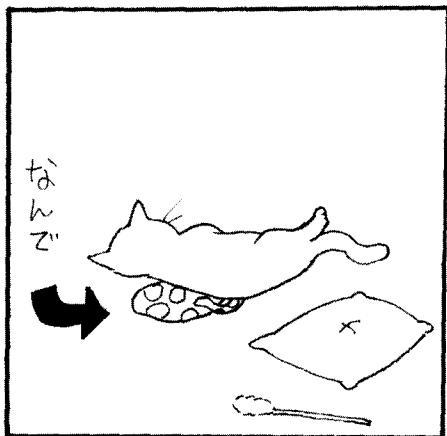
いずみ画廊

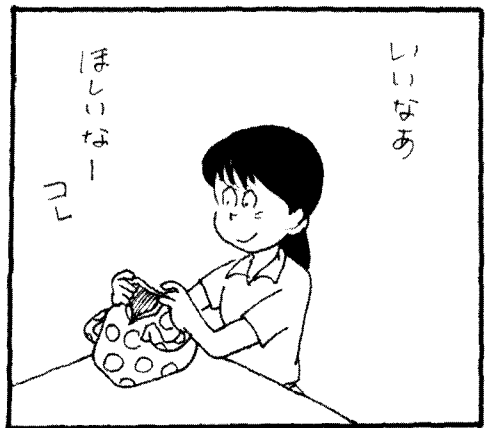
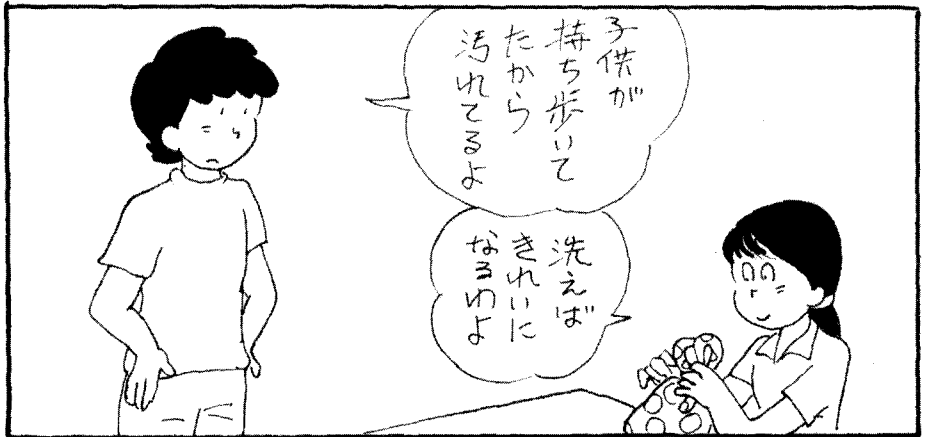
八王子市本町一の一

〇四二六―三三三〇七

これが  
**子供の生きる道**  
 栗田 光













れません。私はきっかけになつたのはやはり音羽事件なのではと思いません。そこまですまんしてグループに属さなくてもという意識が芽生え始め、自由になつた半面、属することを恐れるようになつてしまつたのではないでしようか。

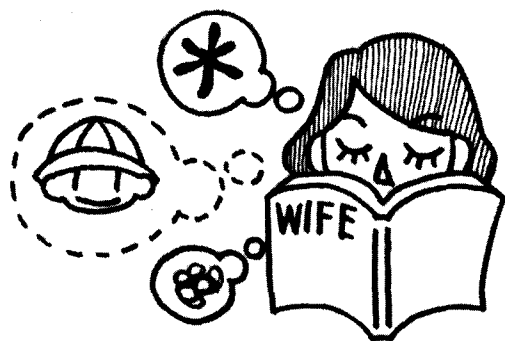
集団での楽しさ、安心感というものもあると思います。しかしそれに背を向けているママ達も多きうことは事実なのです。

## 林直美様へ

横浜市港北区 森田章代 (37歳)

二八四号のわいふは、私が初めて手にした「わいふ」でした。林直美様の書かれた「父の死」は、私の父も四月から癌で二度目の入院をしていたので身につまされました。両親は京都、私は横浜と遠く離れて暮らしていること、小学校低学年の一人

息子がいること、似た立場の人もいるのだと、林様の文章が他人事には



思えませんでした。私の父は七月末に亡くなりました。学校は夏休みなので、実家で約一カ月過ごして、横浜に戻り届いていた「わいふ」二八五号を開けました。見覚えのある御名前の方が、今度はお母様の病氣のことを書かれていたので心底ドキリとしました。私には二号続けて、林様がこれからの私の不安を先取りして書かれた様なめぐりあわせでした。お母様は順調な回復で本当に良かったですね。

海林寺ひろい様へ

快適カップルよ、  
なぜ？

千葉県印旛郡 末永真理子 (35歳)

あなたの「ひとこと」に憤り、一言もの申す。

少子化の一因として、あなたのような考え方が増えてきたことが挙げられる。あなた方カップルが、

子供を生まないからではない。「子供が嫌い」「自分達だけの快適生活を送りたい」という自己中心的な考え方に問題がある。

四人プラス一匹の子育てをしてきて、周りの人達に望むことは「温かい目で見守ってほしい」ということだけ。何を手助けしてほしいわけでもない。

「子供は嫌いだ」という心で見られると、冷たい物を肌で感じる。それって以心伝心？

子育てには努力と忍耐が必要である。それを乗り越えた者にも、何物にも代えがたい喜びと達成感がある。(現在、努力と忍耐なんて言葉、死語かしら？ それも少子化の一因?)

子供への虐待、大きな社会問題となっている。虐待するのは大多数が親であるのをご存じか。虐待する側だってやりたくてやっているわけではない。何かに追い詰められて……世間の目とかみんなの目とかに。そ

の目は、海林寺さん、あなたの目かもしれない。

「嫌い」というマイナスの感情は、決していいものを生まないと思う。これから共存して生きていかなければいけない社会の中で、「他人も認める」という姿勢、とても大切と思う。

海林寺さんに勧めたい女流詩人がいる。金子みすゞさん。みすゞ宇宙(コスモス)に是非一度。絵本になっているものもあり、子供から大人まで幅広く親しめる。

次世代を育てるといって最も大きな仕事をしている人達を、広い心で、温かい目で見守り支援しよう。「子供は国の宝」

ちなみに「老人も国の宝」いろいろな世代がそれぞれ孤立せず、認め合って助け合って支え合っていく社会こそ、理想であり実現すべきだと思う。

「みんなちがって、みんないい」(金子みすゞ)

## あきらめないで、

### 男女共同参画

東京都羽村市 太田知子(45歳)

二八五号の「私の男女共同参画体験記」を書いた森さん、四面楚歌の中での孤軍奮闘、いかに大変だったかお察しします。なぜなら、私も現在、市の男女共同参画推進会議の委員だから。

男女共同参画社会基本法ができようが男女雇用機会均等法が改正されようが、世間一般の意識って概ねこんなもんなんですよね。ただ、森さんのいる日市の委員の人選はあまりにひどい。市職員が推進委員を設置する目的や意識が全く分かっていないからあんな人選になったのでしよう。職務怠慢としかいえません。

どこの市も大方そうかと思いますが、行政は自分の市を男女平等の市

にしようなんて、本音ではサラサラ思っていないんです。国や県の指導でしかたなく、あるいはイメージアップのためにやっているに過ぎないのです。

そんな中で私のすむ市は、日本の中では大分進んでいる自治体かもしれません。委員十五人中、五人を公募したのですから。そして私はもちろん、公募で委員になりました。わが市の委員にも、「子供は母親が家にいて育てるべきだ」とか「今こそ、良妻賢母教育が必要」など、時代錯誤のことを言う男性委員（これがなんと、学識経験者として委員になった大学の先生！）もいて、私は必死で反論しました。森さんの市と違うところは、私の意見に賛同してくれた委員（公募の男性委員）がいたことです。女ばかりが反論するとケンカになるだけ、というのが関の山でしょうが、男性の応援を得たのは心強いことでした。そして今、推進会議はとていい形で進んでいます。

H市の中で、森さんが投げた石の波紋は決して小さくありません。きつと市内に同志がいるはず。どうか、これからも石を投げ続けてください。

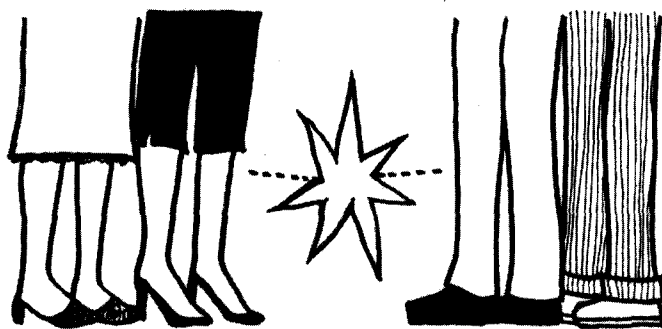
## やっぱり黒い

埼玉真大宮市 新井純子

特集「美容と私」興味深く呼んだ。意外だったのは「化粧しない」にたどり着いた方々が割りにいらっしやるという事実だ。

さて、パプアニューギニアで暮らしていたころ、私たちは外で過ごす時—プールに入る、ゴルフ、テニスをする、ヨットに乗るなど—は、サンブロックを塗るといのが常だった。

当時小学校低学年の息子は、それを怠り日焼けすると小さな赤いプツ



ブツができて痒がった。

夫の姉が遊びに来て、シユノーケルを楽しんだ時は、曇り空でしかもサンブロックを塗ったにもかかわらず、ほんの一時間ほどで、軽いやけど状態に陥った。帰りの飛行機のなには大変だったらしい。

美白を望んでいたわけではないが、こんなトラブルが起こるので、



日焼けには気をつけていた。それでも私は夏休み明けの小学生のように真黒に日焼けしていた。ゴルフ仲間には「サンブロックを塗っていないのは純子だけよ」と言われ、旅行にでかけると「日本人」とは決して言われなかった。

サンブロックを塗っては、日に何度もシャワーをあびるという暮らしを三年送った。私の生活はシンプルだった。体を洗う石鹸で顔も洗った。免税店で買う化粧水だけをたっぷりつけ、リップクリームを塗って終わりだった。心安らかな日々だった。

日本は四季があり、空気は汚れている。さらに私も年齢を重ね、パパアニューギニア時代と同じスキンケアだけでは、気持ちのよいお肌ではいられなくなった。と想っていた。しかし、今回の投稿、ある人の「基礎化粧品って界面活性剤を使っている肌をポロポロにするんだよ。化粧品会社の陰謀だからよく選んだ方がいいよ」という言葉に、本来めんど

くさがり屋の私は、これ幸いと何もしないことに決めてしまった。今年の夏も子どもたちと同様黒い。

二八五号の石井しのぶ様へ

## 治療した歯から ダメになる

岩手県紫波郡

小笠原安紀子（45歳）

奥歯の詰め物が欠けて食べ物が噛めなくなつたので、数年振りで歯医者さんの門をくぐりました。欠けた金属の部分を取り取りきれいにし、そこに新しい金属を入れるのでどうしても自分の歯が減ることになります。このあいだまで自分の歯だったところに新品の銀歯がキラリ。食べ物が噛めるようになったのはうれしいけれど、これでまた歯の寿命

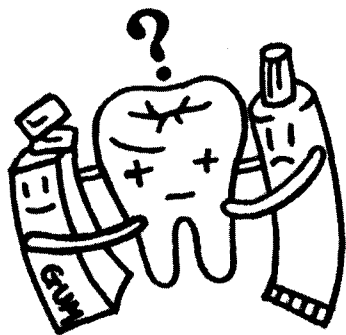
が縮まったと思いました。

「一度歯を削り銀歯にすると銀歯の下から虫歯になる（二次カリエス）銀歯の下で虫歯が進行し数年後には再治療となる。歯は治療すればするほど悪くなり、治療した歯からダメになる。それを証拠に老人の歯で自分の歯として残っているのはたいいてい治療したことのない歯である」以前こんなことを聞いてから歯の治療に関してはためらいを感じるようになりました。

小中学校の頃、虫歯は早めに治療しましょうと繰り返し言われ、私はまじめにセッセと治療に通い銀歯を増やしました。これ以上銀歯を増やさないよう歯磨きにもまじめに取組み、当時奨励されていたローリング法（上の歯は上から下へ、下の歯は下から上へ）でゴシゴシセッセと磨きました。力を入れて磨いたので歯がちよっとすり減ってしまいました。磨いているにもかかわらず虫歯は増え、その後ある時を境にローリ

ング法は世間から消え去りました。

早期発見早期治療については今でも学校ですすめられています。我が子が通う学校の保健室だよりには「虫歯は早めの治療が肝心」と書かれています。学校検診で虫歯のなか



った子どもの名前は発表され、治療が終わった子どもの名前も発表されます。うちの子どもたちは歯列矯正に通っており、同時に虫歯のチェックも定期的に行なっているのですが、それでも「治療の必要な虫歯があります。早めの治療をおすすめします」のお便りをもたらしてくれるのです。学校の歯科検診をきっかけに沢山の子どもたちが治療を受け、歯を削られ銀歯になっではないでしようか。私が子ども頃と余り変わらない歯科をめぐる状況があるように思います。

そんなわけで、歯医者さんを選ぶときはなるべく抜かない削らない、予防に力を入れている先生を選ぶようにしています。予防に効果あるといわれるキシリトールやフッ素にも関心がありますが、ローリング法での苦い経験があるので、なにごとも信じすぎないように心がけています。

(エ・イシノフミ)

知ってホッとする「からだ系」の疑問



産婦人科医 中村はるね 監修  
からだ系コイダス編集部・編  
講談社+α文庫  
本体640円+税

遠距離介護の上手なやり方



太田差恵子著  
かんき出版  
本体1400円+税

在宅介護 これならもっとラクになる



在宅介護 これなら  
もっとラクになる  
片山蘭子著  
青春出版社  
本体1100円+税

医者に行つて診察を受けるほどではなく、また面と向かつて聞くにはちよつと恥ずかしいような、女性のからだのあちこちの悩みに答えている本。

ちまたに流布されている迷信めいたことにも専門医が回答している。イラストと漫画で説明されており文章は軽いタッチなのですぐに読めてしまう。

この本から体の変化が病院での検査を必要とするものか、しないものかの判断が付く上、信頼できる病院の選び方も示され大変参考になる。

女性ならこれぐらいのことは知っておくべきだと思われる豆知識も付くが、更年期のことには触れていない。十代後半から三十歳代向け。(十)

夫の転勤で北海道から東京に移り住み、はや十年。故郷に住む夫と私の親の、「一万が一」の時を考えると憂鬱になる。各親とも「住み慣れた土地を離れる気はない」と口を揃えるし、Uターンは仕事が不安。では、親が介護を必要とした時はどうすればいい？

そんな悩みを解決してくれるのが本書。遠く離れて暮らす親のケア法をまとめてあるのだ。効果的な介護のポイントから福祉の利用法、介護貧乏&疲労にならないためのお金や時間の使い方まで、遠距離介護に必要な知恵とコツがギッシリ。いざという時の頼りになる全国ネットの福祉機関連絡先なども明記されており、心強い。(S)

在宅介護は突然始まる。経験もなく、何をどうすればいいのか分からないのに、現実には待つてくれない。不安、疲れ、イライラを抱えながら、手探りで学ぶしかない。そんなとき、介護についての知識があれば、少しは心に余裕が持てるだろう。

本書は、介護する人、される人にも愛情をもって、介護の仕方を具体的に示している。丁寧な説明付きの絵や、写真などで分かりやすい。

著者は、介護、看護の実習指導や講演をしながら、訪問看護婦としても患者に接するベテランである。プロならではの視点で書かれた、突然の在宅介護の備えとなる一冊です。(小)





## 自費出版は 「わいふ」へどうぞ!

「わいふ」編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとももいたします。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実に安いのです。事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

ちなみに最近では、読者からのご依頼により、「紅の雲」、「春のかたみ」、「出会いに合掌して」などを制作いたしました。

皆さまも人生の記念に計画されてはいかがでしょうか。

私の意見

あなたの意見

子どもの小遣い・  
わが家では

埼玉県浦和市 麦穂

高校一年の息子と三年の娘に今は五千円ずつの小遣い。小学校の頃は学年に応じて三年生の時は三百円、四年生で四百円、中学一年では千円、二年に

なると二千円。大きな節目でグレイドアップ、その後一学年上がる毎に小遣いもアップ。そうすると高三の娘は七千円のはずだが、職を転々とする父親が二年弱前に四度目の転職。そこで見事な減給。自分の小遣い及び家族の娯楽費にしようと思っていた私のパート代も生活費、教育費に回さざるを得なくなり、子どもたちの小遣いアップも当然ストップ。

「家族の生活は保障する」と断言しての転職だったのに、最近のこの惨めな暮らしぶりは何？ 土日もゴロゴロしてないで私のように働いたら？……と夫への文句はまた違う機会にでも。

子どもたちも年齢が上がると共に、手にしたい物も高価になってくる。高校生になった途端息子までが携帯電話を持ち始めた。たった（？）五千円の小遣いはその使用料だけで二人とも消えていくに違いない。よそ様の話を聞くと（子どもは息子と同じ高一）携帯の使用料は全部親持ち、その上小遣い五千円という家や、ぼっきり一万円上

げてそれで携帯と小遣いを賄わせている家などがあつた。しかし私は子どもたちが携帯を持つこと自体腑に落ちないので（場所確認や、早く帰ってこいってな時には便利ではありませんが）、その分を払ってあげる気になれない。足りない分は時々出かける私の実家で、「顔を見せてくれた」と喜んで渡してくれる子ども達の祖父母からの臨時収入、お年玉や入学祝いなどの貯金、そして娘は受験を控えて辞めてしまったが、バイト半年分の貯蓄でどうか賄っているようだ。

祖父母の差し出す小遣いに笑顔でちゃっかり手を出す娘と、「あついいっす」と遠慮する息子。そんな息子だったがさすがに最近苦しいのか、「ありがとう」と素直に貰っている。行くだけでそれも遠い田舎ではない、車で小一時間の所に「行くだけで」、お金がもらえらるというのには教育上よろしくないでしょと思っていたが、背に腹は代えられない。親としてはこれ以上出してあげられないのだから「貰っておき

「なさい、貰っておきなさい」と黙認である。両親だって仕事をリタイヤして何年も経ち、年金暮らしたというのに。

学校では基本的にアルバイトは禁じられている。私としては社会を垣間見られ、他人の中で責任ある行動をしなければならぬアルバイトは、してみてもいいんじゃないかと思っていた。そして自分で得たお金の喜びや充実感も味わって欲しいと思っていた。半年ではあったが娘もパン屋さんで売り子をして、目立った精神的収穫は見あたらないが、きつつか何処かで役に



立つことが仕入れられたことと思う。少なくとも小さな出会いと思い出は出来た、そして勿論収入も。しかし先日新聞で「アルバイトでやっていける自信がついた」と増加する一方のフリーターの言葉を見て、アルバイト如きで生活していけると思ってしまうのか、家族を築くことが出来ると思ってしまうのかと愕然とした。それから暇そうに夏休みを過ごしている息子に、アルバイトを勧めるのをためらっている今日この頃である。

(え・渡辺美帆)

私の意見・あなたの意見

★わいふバックナンバー

- 260号 トラブル旅行記
- 263号 わが家の親子ゲンカ
- 264号 ふるさとの伝統行事
- 265号 私の初体験
- 269号 再就職を得た仕事・得られなかった仕事
- 272号 カウンセリング体験
- 273号 子どもとテレビ
- 274号 引越騒動
- 275号 料理と私
- 277号 不妊治療・私の場合
- 278号 「おけいごと」との格闘
- 279号 あなたの夫は何番目の男?
- 281号 思い出の地・再訪
- 283号 私の読書歴
- 285号 美容と私
- 2001年度版 二〇〇〇円＋税
- シリーズ最後の暮らし
- お年寄りが安全に暮らすために 一五〇〇円
- 変わる主婦・変わらない主婦 一五〇〇円
- お申し込みは ☎〇三二三六〇一四七七

# アメリカの老人ホーム探訪記

福島県安達郡

桜井淳子 (68歳)

## 姑を老人ホームへ入れて

私は現在、福島県に住んでいる。生まれ育った東京を離れ九年になる。その間に、夫は肝硬変、胃静脈瘤、化膿性脊椎炎を病み、私は看病した。

それに加えて、姑の病氣（骨折や腰痛で入院回数）で私は心労が重なり、味覚喪失症やうつ病になった。高齢化社会の荒波をもろに受けた私は、二人の病人の看護ができず姑（当時九十一歳）を夫の姉妹、または弟に面倒を見てもらうか、老人ホームへ入居させるよう半病人の夫に頼んだ。

夫の弟、姉妹たちもそれぞれの事情があり母親を引き取ることはできなかった。

結果として老人ホームへの入居を決めた。

特別養護老人ホームへの入居は順番待ちで何時、入居出来るか分からなかった。福島市の軽費老人ホームを訪ねたが、年を重ね柔軟さを失った自尊心の強い姑には、その共同生活に耐えられるだろうかと心配した。

福島市にある、聖ハートフルケア福島「十字の園」という有料老人ホームを訪ねて、始めて姑を安心して預けられる場所と決めた。

福島駅の近くにあり、住宅地の中の建物は立派で、高級ホテルを思わせる。

廊下も広く、医療設備も整い、従業員の質も高い。同様に、この地方にしては入居一時金もずば抜けて高く、毎月の経費もかかる。

広い部屋（Bタイプ、通常夫婦で入居する部屋）なので入居一時金は二千万円だった。

現在、姑は九十六歳である。

巷の噂では首都圏では、入居一時金が五千〜六千万円ぐらいの有料老人ホームはざらにあり、中には億を越す超高級老人ホームもあるという。誰が入居するのだろうか。バブル時代のあだ花だろうか。年を取ってからの幸福も、金額に依って差別されるのだろうか。

## テキサスの高級ホームを見る

五月十日、私はアメリカン・エアラインズ60便、成田発一七時五五分、同日ダラス着一五時二〇分に乗っていた。ダラスからは国内線を乗り継ぎ、テキサス西部の町、サン・アンジェロへと飛ぶ。

アメリカ、テキサス州サン・アンジェロ在住の友の好意で一か月間のアメリカ旅行に招待されたのだ。私を招待した民子へイマーは女学校時代からの親友である。

十余時間の機上で私は仮眠した。夢の中で幼き日に読んだ物語が鮮明に蘇った。

小学校の四年生だっただろうか。外で遊ぶよりは、家の中で、絵本や童話などを好んで読んでいた私は、衝撃的な一冊に出会った。それは、姉が購読していた少女倶楽部の付録の薄い本だった。

「あの丘越えて」という題名で、アメリカの貧しい一家の話だった。飲んだくれの夫と六人の子供を抱えてけ

なげに生きる母親が、二十年後、それぞれの事情で子供たちは誰も面倒を見てくれず、丘を越えて養老院へと行くのである。何と悲しい物語かと涙した。そしてアメリカ社会の冷たさに憤慨した。

当時の日本では家族制度が確立されており、祖父、両親、子供たちがひとつ屋根の下で暮らすのが習慣だった。

後年、その物語は映画化されたりした有名な小説で、それを子供用に易しく書き直したものと分かった。

「養老院」とは身寄りのない老人を集めて世話をし、生活させる施設。と国語辞典には記されている。

夢から覚めて愕然とした。

日本の現実もかつてのアメリカ社会と同じではないか。老人ホームと名称は変わっても面倒を見られなくなった親を送る施設が養老院だ。

アメリカにいたら真つ先に老人ホームを訪ねよう。

半世紀以上も昔に読んだ可哀想な物語が今も現存するのだろうか。

テキサスは広い。三百六十度の視野に地平線は果てしなく続く。その中をまっすぐな道路が走っている。

民子は私の願いを快く承諾して、サン・アンジェロの老人ホームへ車を走らせた。

民子の運転技術も英会話も完璧だ。日本を出てから、四十余年の歳月が彼女をアメリカ女性に変身させてい

た。

最初に訪れたのは、丘の上の広い敷地に聳え立つ宮殿を思わせる豪華な建物。それがサン・アンジェロのグラント・コートだった。

民子の流暢な英語で日本から老人ホームを取材に来た記者だと、私を紹介した。

係員は遠来の客をていねいに案内してくれた。この施設はかなり裕福な人々が入る場所と思われる。

経費を聞くと、日本とは生活、習慣、食事、文化の違いがあり、一概に比較できないが、

自立出来る人の部屋は広さにより月額\$1,300〜\$1,900。

要介護の部屋は月額 \$1,800〜\$1,900。

(この価格は三度の食事、管理費込み)

電話代、雑費は自己負担となる。

次に訪れたのは、ヴァレイ・ビュー通りにあるマイリティウッド・アシステッド・リヴィング・コミュニティという介護を必要とする老人ホームだった。車椅子や歩行器の必要な老人たちが明るく生活をしている。そして別棟には、寝たきりの老人たちが介護されていた。美しい環境の中、建物は清潔で明るい。

手にした案内書には規約や条件、いろいろと詳しく述べられているが、経費には触れてない。入居を決めた時に契約書と一緒に経費の額も説明されるのだら

う。

最後に訪れたのは、リオ・カンチヨウ・ウエストという場所にあるリタイヤメント・コミュニティで、現役を引退した人々の住む集合住宅地だった。一戸建てや、長屋が緑に囲まれて点在していた。普通の住宅と変わらない。

ただ、その住宅地の真ん中にセンターがあり事務室、医療機関、リハビリ専用室、娯楽施設、ロビー、食堂、美容室、郵便局など生活に必要な設備が完備してある。一戸建ての家は、2LDKで日本では、家族が住めるほどの広さで、設備も立派。

家の広さによるが、\$68,000〜\$127,100。

これらの家は買取である。不要になったり移住する時は、次の入居者に売却する。

この他に毎月の経費、光熱費、保険、緊急警報装置、など\$200〜\$300ぐらいは必要。

人口九万人弱の小さなアメリカの町でさえ老人施設や、福祉行政が整っている。

日本の老人ホームと比較した時、大きさ、広さ、設備の豊かさに圧倒された。

だが、私の訪れた施設はアメリカでも比較的豊かな町で、町が引退生活者に豊かな暮らしが出来るように取り計らっているのであった。

## リタイヤメント・ヴィレッジに 住む九十二歳

テキサスに着いてから、一週間後、民子と私はニューイングランドのコネチカット州、ノース・ストニントンに住む、ジーン・マックナット夫人（七十六歳）を訪ねた。

国内線を乗り継ぎ、灼熱のテキサスから北東部のコネチカットに着いた時は肌寒く、気候は夏から冬へと逆戻りしていた。

ジーンと私たちの関係は、私と民子と同じように長い付き合いである。

女学校を卒業すると民子も私も英語で身を立てようと約束した。私は英語教師の薦めで当時としては、最先端を行く英文タイプ of の教習所に通い、技術を習得して、法務省特別審査局へ就職した。現在、オウム関連事件で脚光を浴びている公安調査庁の前身である。

民子はいきなり、当時、日本に進駐していたアメリカ軍将校の家にメイドとして就職した。それは、彼女が最も早く英会話を習得したいと願ったからだ。その家がマックナット家だった。若く美しい将校夫人のジーンは、熱心に学ぶ民子に英会話とアメリカの家庭生活を教えた。私は民子の友人として何回かジーンの家

に呼ばれた。まだ十代の頃である。

その後、民子は英文タイプを独力で習得し事務職に転じた。民子と私はお互いに何度か職場を紹介し合い、同じ職場で働いた。民子が職場の同僚ヘイマー氏と結婚しアメリカへ渡るまで。ジーンは民子の親代わりとなり、国際結婚をした民子を助けた。

コネチカットの首都、ハート・フォードの空港でジーンに会った時、私は時の流れを痛いほど感じた。かつての輝くようなブルーネットの髪は、ブラチナ・ブルンドに変わっていた。

十数年前、私が東京のニュー・サンノーというアメリカのホテルに勤めていた時、日本を訪問したマックナット夫妻は私の職場まで訪れてくれた。その時の活気にあふれた熟年の面影はなかったが、空港に出迎えるに来たジーンは重ねた年輪に磨かれた上品な美しい容姿だった。

十六エーカー（約二万坪）もある自然林の中に建てられたジーンの家は美術館のようだった。東洋の美術品が惜しげもなくどの部屋にもさりげなく配置されている。二年前に夫をなくした未亡人が住むにふさわしい、優雅な佇まいだが一人で住むには寂しく広過ぎる。私は、ジーンにニューイングランドの美しい風景も見たいが、この地の老人施設や福祉の在り方を勉強したいと伝えた。



左から民子、ジーン、私

ミステイック・リバーホームズ・リタイヤメント・ヴィレッジに住んでいるジーンの友人を訪ねることにした。  
緑豊かな傾斜地にその施設は建っている。三階建て

の建物は大きくゆつたりと構えている。

ジーンはまず、事務所に行き、私たちの訪問の目的を話し、入居者の友人を訪ねたいと申し出た。

日本人の訪問者が珍しいのか、係員は興味深げに私と民子を見つめた。そして、館内を案内した。

館内は管理事務所、応接室、娯楽室、工作室、図書館、美容室、その他に洗濯室、ごみ処理場が各階に設置されている。

三人は施設を一巡すると、ネルの部屋を訪ねた。ネル（九十二歳）は一人でホームに住んでいる。部屋は小さなキッチンと、訪問者を迎えるに十分な広さのダイニング兼リビング、おなじ面積で隣にベッドルームとバスルームが並んでいる。家具類は全て自分の所有物を持って来られたという。こざれいに整頓された部屋の壁や棚には、家族の写真が飾られている。

「幸せな毎日を送っている」とネルは言う。

私たちはネルの生活環境の話題や、雑談に時を過ごした。

宗教や人生観の違いだろうか、それとも髪や肌の色の違いだろうか、着ている服が明るい色彩だからだろうか。そこで生活している老人たちはいきいきと輝いて見える。

このホームに入居する条件のひとつに、一人の場合には年収が\$30,900を越えては不可。



二人の場合は\$35,350以下。  
毎月の経費は日本円に換算すると十八万円ぐらい。  
入居一時金なし。  
その他、いろいろと詳細に規約が記述されている。  
これらに適合すれば、国籍、人種、宗教、などを越えて入居できる。

## 病む老人のための施設

ネルを訪問した後、ミスティック・マノーという養老病院を訪れた。ここは、最後まで年老いた病人を看護する病院。

閑静な丘の上にその病院は佇んでいる。ジーンは病院の関係者と顔なじみらしく、気さくに挨拶をし、民子と私を紹介し、若いケア・ワーカーの案内で病院内を一巡した。

先に訪問した老人ホームの笑い声にあふれ明るい雰囲気無比と、空気は重たく静まり返っている。病室から呻き声も聞こえる。医者や看護婦の姿も忙しく廊下を行き交う。

民子は私と二人になると、ジーンの夫、ウォルターも町の病院から、「できるかぎりのことは尽くした」と宣告され、最後の一週間をこの病院で過ごしたと言った。このミスティック荘園は、病院で見放されたり、終

焉の場として選ぶ病んだ老人たちの最後の砦だった。  
次の日、ジーンはもう一人の友人、フローレンス（九十六歳）の入居しているオーリングフォードにある広大なマソニック・ジラアトリック・ヘルスケア・セ



私とネル（92歳）



車椅子のフローレンスからいろいろと話を聞く私

ンター（マソニック老人病健康管理センター）に私達と行った。

それは、ひとつの町を思わせるほど広く、車でリタイアメント・ホームの点在する地域を一巡りするのには、

車で数分はかかった。このハウスは入居するのに\$70,000を支払う。例え、一か月で、その家を出るとしても払戻はない。余剰金は全てセンターに寄付される方針になっている。その反対に、そこに何十年いようとも、一回の入居金で良いという。もちろん管理費や生活費は各自が支払う。

公園のような美しいハウジング・エリアを回り、センターの入口近くに建っている、立派な病院に私たちは入った。

どっしりとした構えの建て物は私に威圧感を与える。ジーンは管理事務所で、前と同じ説明をし館内を案内してもらったことにした。案内をしてくれる人が見当たらないためにまっすぐに、フローレンスの部屋に行った。

フローレンスは不在だった。二階の廊下を歩いていると、車椅子に乗ったフローレンスが私たちを追いかけた。

ジーンは、フローレンスに今回の訪問の趣旨を説明し、私と民子を紹介した。

そして、フローレンスに私にこのセンターでの生活を話して欲しいと言った。

自動車事故で骨折し、足と手に補強器を付けているフローレンスはゆっくりと分かりやすい英語で私に話し始めた。

「ここでの生活に私は満足しています。皆様はとも親切で優しく、毎日の生活が退屈しないように、楽しいプログラムが組まれております。食事はおいしく飽きないように工夫されています。私のような車椅子の生活者にも十分な配慮がなされ心配はありません」

音楽教師をしていたというフロレンスは朗らかな声で話した。

毎月の経費はネルとほぼ同額。

センターから案内人が来たので、私たちはフロレンスに別れを告げた。

案内人のステイビーはこの老人センターに入居しており、ボランティアでここを訪れる人々を案内しているという。がっしりとした大柄な男性で、八十二歳という。妻と二人で入居したが、妻に先立たれ今は一人だそうだ。

彼の案内で広い館内を見学した。階によって病人の状態が区別されている。痴呆症、寝たきり、介護なしでは生きていけない人々の症状に胸が痛む。

マソニック・ジラアトリック・ヘルスケア・センターを離れながら、私はいずれ訪れるだろう自分の老後を思い、アメリカの老人病学総合センターを羨望した。センター付属のホスピスもコネチカット州には数か所ある。

日本にこのような老人病学総合センターのような施

設があるのだろうか。

## リタイヤメントセンター見学

ニューイングランドから帰り、一息付くと数日後にオクラホマへと旅立つ。

民子の夫（チャック）の運転する車で、八時間の長距離ドライブであった。（華氏110度、摂氏40度を越す）猛暑の中を車はひた走る。真平らな土地に定規で引いたような広い道路。行けど行けど同じ風景の連続。これがアメリカの南西部テキサスとオクラホマ。オクラホマに入ると緑が濃くなり、目に涼しさを感じる。

一年前から、老人ホームへ入居したという米利子ウオーレス夫人（八十歳）を訪ねてのオクラホマへの旅である。

西部劇の映画や舞台で登場するオクラホマ・ラン・ラッシュのあつた緑の大地。その中に聳える高層ビルの群れ。オクラホマの首都オクラホマシティだ。

その郊外の広大な敷地にパピラスト・リタイヤメント・センター・オブ・オクラホマはある。

米利子はそのセンターの一角にある四軒長屋の一隅に住んでいる。中は日本であれば、四大家族が住めるほどの広さである。十五、六畳ほどのリビング・ダイ

ニングと小さいながら設備の完備された台所、バスルーム、広いベッドルームは間仕切をすれば二部屋に使用出来るだろう。それが一人用の住居という。夫婦で入居する場合はもつと広いスペースだという。

家賃は、月\$600、光熱費、電話代は自己負担。水道料は無料。入居一時金なし。

周囲は緑の芝生におおわれ、緑の風が樹木をそよがせる。

米利子と私たちの間柄は、かつて、民子と私が働いていた米空軍通信施設の上司と部下の関係だった。

二世だった彼女は戦時中に日本の女子経済専門学校に留学したが、日米戦争勃発のため帰国出来ずに、終戦を迎えた。日本政府から要請され、通訳として米軍に勤めた。

右も左も分からなかった民子と私に、タイピストとしてアメリカの書類作成のノウ・ハウや雑事を教えてくれた。

民子と私は彼女の帰国後も絶えることなく文通を続けてきた。

現在、彼女は、ボランティア活動として、本部がオクラホマにあるFAA、フェデラル・アヴィエーション・エンジニアリング（連邦航空管理局、世界各国から研修生が訪れる）の日本人研修生の世話をしている。日本語を使うので楽しいという。現在の日本情報も研

修生たちから知らされる。

彼女の案内でアシステッド・リヴィング・ホームやパーソナル・ケアを必要とする人々のすむセンター・ビルを見学した。

コネチカットで見たマソニック老人病学総合センターと甲乙付け難い施設だった。

日本は老人病学の分野で遅れているのだろうか。それとも、私の訪れた施設がいずれも高い水準の病院や老人ホームだったのだろうか。

ネル、フロレンス、米利子たちは私の友人知人で平凡なアメリカ市民である。老後をこのような恵まれた施設で暮らすことを約束されている。

一方、アメリカの低所得者層、黒人やヒスパニック系の人々が住む地域では、老人ホームの悲惨さがテレビで放映され、社会問題に取り上げられているという。

日本人でも、国際感覚豊かで、アメリカ社会に融合出来る人ならば、老後はアメリカで暮らすのも経済的に有利かもしれない。

五月晴れの五月に日本を発った私は、老人ホーム見学も含めじつにいろいろな体験をして、梅雨空の成田に六月十一日に帰着した。

（写真提供・筆者）

新制高校の誕生

## 若葉出づる頃

関 千枝子著



関 千枝子著  
西田書店  
本体1500円+税

東京都新宿区 田中喜美子

この本を引き受けてくれる出版社がなかなか見つからなかった。という話を聞いて、出版人の見識のなさに驚く。著者もそれをおもんばかってか、前書きに「『新制高校の草創期の物語』といっても、何それ？と言う人が多いかも知れない」と書いている。

たしかに「新制高校」という呼称自体、すでに死語であるかも知れない。

い。しかし死者の物語が、現実の物語よりはるかに深い意味を持ち、はるかに人の胸を打つことはいくらでもある。そしてこの作品こそこうした本の一つである。

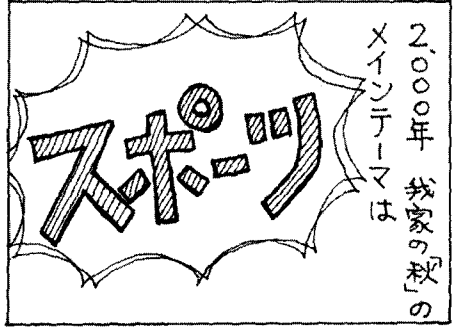
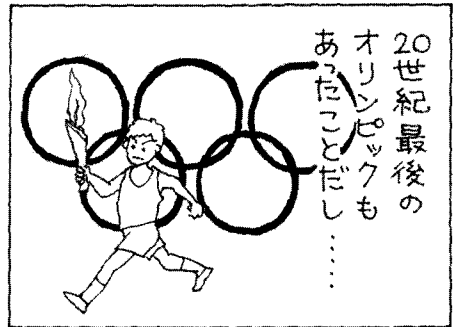
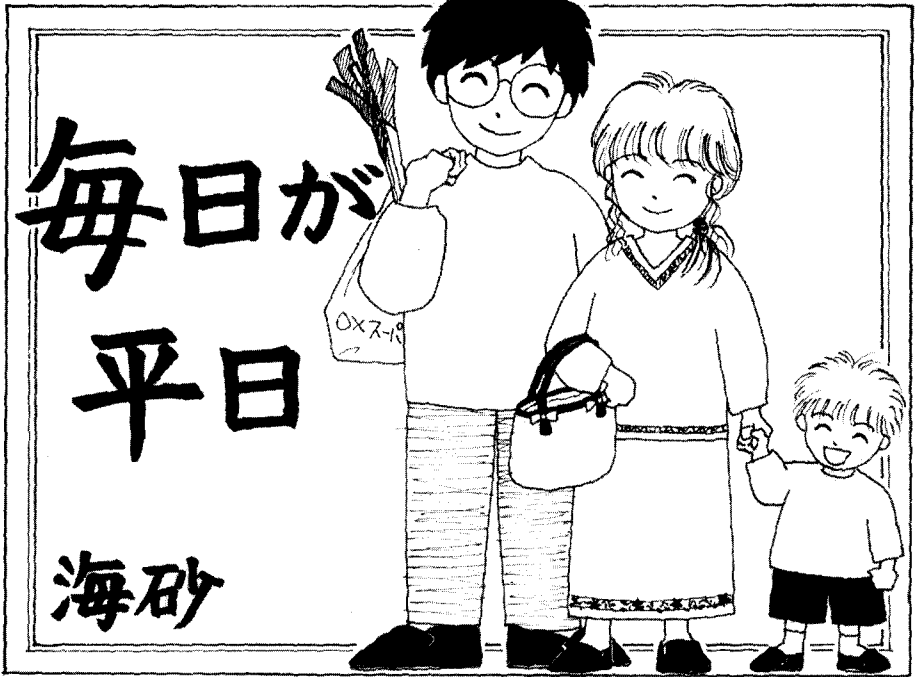
日本が戦争に負けた後、それまで「女学校」「中学校」だった五年間の中等教育は、中学・高校それぞれ三年間という現在のシステムとなり、中学は義務教育となった。著者はこのとき、あたらしく発足した県立「国泰寺高校」に男女共学の第一期生となった。

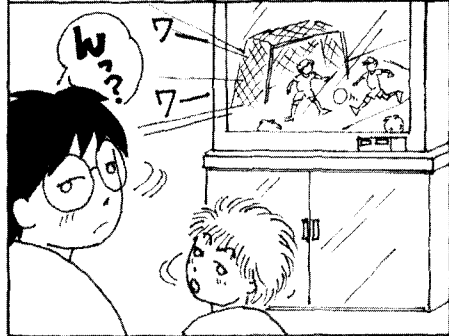
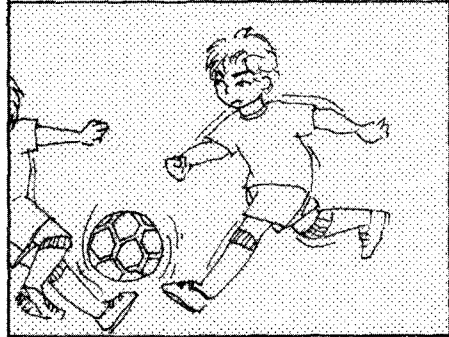
この作品を読むと、「戦後教育が日本をダメにした」という言葉がいかにはずれのものであるかがわかる。戦後数年間のこの時代こそ、日本の公立教育が初めて手にしたすばらしい時代だったのだ。

「楽しくて楽しくて夕闇が迫っても学校から帰りたくない。そんな学校を今の若者は想像できるだろうか？」

学校はぼろぼろで、暖房もなく寒さに震え、教科書も足りない。だが戦時下の厳しい管理、押しつけから解放された明るさが漲っていた。教員も生徒も、なにかやりたい、という意気に燃えていた」

この明るさは、学校の設備はとどのい、子どもたちはこざれいになった現在の学校から失われている。そこにあるものは「理想」であり、友人同士の「信頼と協力」であった。日本の教育はなぜそれらを失ってしまったのか、「豊かさ」のなかで荒廃している学校の現実を立てなおすためにも、この一冊を読んでほしい。





# 私もひとこと

## 観光客いろいろ

千葉直佐倉市 渡辺巨土苗

この夏スペインを旅した。連日、四十度を超え、日向は肌が焦げるように熱い。この中を片耳ピアスのお兄さんやお臍ピアスのお姉さんが乳房をユサユサ揺らしして闊歩している。

若いファミリイも多い。国の習慣に従ってシエスタ（昼寝）したファミリイは、二か月位の乳児から幼児まで、おしゃぶりを食わえさせベビーカーに乗せて、日没の九時から夜の十一時頃まで平気で大人につきあわせている。ほとんど面倒を見ていたのはパパだった。

## ライク・マドンナ(マドンナみたい)

東京都世田谷区 小林薫子(44歳)

マドンナの近影を見た。アメリカのあの女性歌手のこと。相変わらずの過激ファッション。妊娠中の彼女は丈の短いTシャツに、ふくらんだというか、パンパンのおなかの下まで、下げたパンツという出で立ち。面目躍如といったところか。でも驚いたのは、そのファッションでない。その年齢。四十一歳。私と三歳しか違わないの！ 何だか、いろいろと負けられない、と少し元気になった私。

## 嬉しい御縁

大阪市城東区 布施幸子

子供のころ、宝物のように読んだ新美南吉の童話集。若く逝ったその童話作家が安城高女の英語の先生だったと最近知りました。

そして教え子だった方とペンフレンドになりました。六十路半ばを過ぎ、雑事難問山積で疲れていたとき、思いがけぬ嬉しいできごとにも出会えたのです。そのお友だちから「わいふ」をプレゼントして頂き感激です。心して何か書いてみたいと念じています。

## 質問 相談所を開くには

藤沢市 本間美恵

新聞紙上で、困り事を相談にいつてもまるつきり解決できないという話がしきりに目につきます。そこでこれではと思いたった人たちと、「民」で相談所を開けないかという話が出ました。

これを立ちあげるにはどうしたらいいかわかる本、または体験談などお教えいただけませんか。

## フリーの歯

大阪府大阪市 浅田節子(68歳)

アメリカから初めて日本に来た六歳の孫娘が「おばあちゃん、フリーの歯はどうしたの」と言う。一瞬ハッ！ とした私。

あー入れ歯のことかと気付くまで三秒位かかった。部分入れ歯は奥歯なので、笑うと無いのが分かる。はずした歯はどこへ？ と思った孫。

その部分入れ歯を、「フリーの歯」とは素晴らしい表現……友人知人に話すと、まさにそのものズバリと皆に大ウケした。



## 孫は来てよし帰ってよし

山形県山形市 加藤智恵子 (70歳)

夏休みに東京の孫達がやってきた。最高の笑顔で迎えた初日。が、日がたつにつれ粗食になり家事労働を強い、孫と対等にやりあい疲れ果てる。でも帰る日「楽しかった、また来るからね」の一言に癒され、自戒の念止み難く急に優しくなる。なに帰ってすぐ、余韻の残る部屋を元通りに片付けてしまふ心の内は一切何なのか。かくしてまた老夫婦二人だけの静かすぎる日にもどったのであった。

## 孫

千葉県流山市 栗林八重子

四歳から育てた娘が初めての子を出産した。奇しくもその日は私の七十四歳の誕生日であった。出産経験のない私だが、産みの苦しみに立ち向かう娘の腰をさすり続けた。三時間の苦しみの末男の子が誕生した。大役を果たして安らぐ娘の顔と、元気な赤子の顔を見て、心底安堵して自宅に帰った私は、久しぶりに疲労こんぱいしてふらふら。そこへ上の娘から電話「お誕生日おめでとう、ビックなプレゼントだったわね」だって。ほんとに！

## ムダな薬

東京都文京区 トト安田

介護の仕事をしています。お年寄りの皆さんは、一杯薬をもらっています。一つの受診料だけでなく、二つも三つも違う科にも掛かっていらつしゃって、毎日飲む薬も相当な数です。湿布薬を箱一杯にため込んでいる。老人もいらつしゃいます。薬の整理を時々します。飲み忘れ、薬のもらい過ぎ等から古い薬がたくさん出てきます。結局捨てます。いつももったいないなあと思います。

## 触発されて

岩手県紫波郡 小笠原安紀子

わいふを通じて知った二人の方の文章が同じ号に載っていました。一人は回覧ノート仲間のKさん、もう一人はメールでやりとりしているSさん。回覧ノートは一年に一度回ってくるか来ないかのスローペース。メールはすぐ返事が来る。どちらも良い。この二人の文章に触発され購読九年目にしてはじめて投稿しました。

## 感謝します

茨城県電ヶ崎市 柴尾恵子

わいふに、初めて投稿した私の文章が載った。うれしい。自分が書いた文章なのにドキドキしながら読んだ。添削していただいて読みやすくなっている。またうれしい。締め切りギリギリのため、東京の郵便局から速達で送ってくれた夫。原稿をきれいに清書してくれた娘。「僕が携帯電話をなくしたから、作文が書けたんじゃないか」と息子。そうだけれど。とにかく皆様感謝。ありがとうございます。

## リラの花桜の花楽しみだ

千葉県印旛郡 末長真理子

吸い込まれるように読みふけてしまふ。それは小説ではなく、浅野季子さんの人生そのものだからか？

私には到底まねできない文章のうまさ、それ以上に自立した生き方、自分で決断し、いろんなことを乗り越えてきた彼女に嫉妬しているのかもしれない。

これからも目が離せない。

## 口よけ

神奈川県平塚市 後藤美幸

いわゆる東南角部屋に住んでいる。真夏の明け方から照りつける、太陽の眩しさと暑さは耐えがたい。よしずを買えば収納に困るので、シーズンオフには枯れてくれる、ヒマワリと朝顔を植えた。が、時期が遅すぎた。八月下旬の今、ヒマワリはやつとつぼみをつけ、朝顔は一株寂しく咲く程度。季節外れのヒマワリはまあ許せるが、朝顔の失敗は小学生以下。よしし、来年も再挑戦。

## 伊藤家のメモ

リトルロック市 伊藤琴子

その昔、祖父は宴の席で祖母のことを「この人は『ネコ』じゃでね」と、魚の好きな彼女を言及した。高齢者となった父は母のことを、「お母さんは『イヌ』だからお父さん一緒に歩くのいやだよ」と言っている。散歩に出るとすぐトイレに行きたくなるからだ。おむつするわけにもいかないしね……。私はこれから歳をとっていく弟が自分の妻をどう呼ぶのかとても楽しみである。

## メール友だち

岡山県 吉田淑子

メル友をと呼びかけると、たくさんのメールが送られてきて、パソコンを始めてよかったとあらためて感激した。田中編集長のこんな本がいいですよとか、和田先生の……、などとは知らせてもらえぬ。先日は、わいふ二八五号の公園育児のこと、自分も経験がありますとあった。読んでみると明るいムードの座談会なのに内容は重い。春奈ちゃん事件が納得できた。

## 毎日がためいき(?)

千葉県 山橋ゆり(51歳)

三八度五分の熱のある子のおでこに「冷えピタ」をはって登校させるママ、お迎えを頼めば茶髪にミニスカ、土曜日は夫婦揃って昇降口で子どものお迎えゾロゾロ、そのままファミレスへ昼食に。キャミソールや深いスリット姿で学校に来るのも当たり前顔。ごく一部とはいえ、そのごく一部も以前にはなかった光景。ためいきをつく職員室は高齢化の波……。

## 再会

世田谷区 太田啓子(42歳)

高校時代の友人三人と、久しぶりに再会した。JとFには五年ぶり。Mとは実に十七年ぶりである。かつて合唱部に属し、恋や未来を語り合った仲である。夕食を共にしたが、親の病氣、介護、死といった話題で持ち切りになった。日々の暮らしに右往左往している間に、「若さ」を過去に置いてきたという事を忘れていた。が、人生まだ半分。私達の「これから」についても、話したかったな。

## やりたい放題

東京都東久留米市 藤野恵

夏休みに、子どもと二週間帰省した。夫は東京においてきたので、日付けが変わる頃に帰省する彼の夕食を、睡魔と闘いながらパジャマ姿で温めなおす仕事がない。子どもを親にあずけて、夜友人には会えるし、冷蔵庫のビールは飲み放題。習字や生活科の宿題は、得意な父母にオマカセ！ こんな夏休みが、あと何年おくれるか判らないが、これも親が元気で平安な証拠と、今夏もやりたい放題。

## 『母と子』購読ご案内

『母と子』は、(父母と子どもの立場から教育や学校について考える)という編集方針の下に、紙面の充実に努力しています。

PTAや地域・職場の教育懇談会などで仲間の輪を結ぶにふさわしいテキストとしてご利用ください。

★『母と子』通常号は、定価五〇〇円(本体四七六円・税二四円)です。送料六八円

★年に二回、臨時増刊号を発行します。定価各一、〇五〇円(本体一、〇〇〇円・税五〇円)。毎月の通常号とともにご予約ください。(予約はいつからでも可)。

★年間予約購読料(書店への予約)

◇通常号のみの場合は六、〇〇〇円

◇臨時増刊号(二回)を含む場合は八、一〇〇円

★書店でお求めになれない場合や、母と子社からの直接送本(定期購読に限り送料は当社負担)をご希望の場合は、直接、母と子社へお申し込みください。

★『母と子』の見本誌(旧号)を差し上げます。購読を勧める際にご利用ください。必要な冊数をご連絡いただければ、すぐに送ります。

見本紙 お届けします。お問い合わせ下さい。

草の根は

伸びつづける。



女たちの情報紙  
ふえみん  
f e m ♀ n  
婦 人 民 主 新 聞  
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

からだのしんばいはたらくもんだいころのえいようさべつへのいかりアジアのうごきあんぜんてなに?きこのうまでのみちあしたへのみちわたしのいけんあなただのいけんおんなというちから。

世の中に?をもち始めた、男たちにも。

創立以来、無党派の立場で50年。  
女の視点で創る、もうひとつのメディア。

新聞代  
(送料込)  
1ヶ月 750円  
3ヶ月 2,250円  
6ヶ月 4,500円  
1年 9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301 大阪府協 大阪市北区中崎西3-1-5  
TEL 03(3402)3244,3238 TEL 06(371)2429  
FAX 03(3401)3453

ふえみん 婦人民主新聞  
婦人民主クラブ責任編集



## 今

年の夏休みは四万十川で漕いできました。夫と犬のラクと、はるばる四国高知までカヌーを乗せて車を走らせた。

あこがれの四万十川は遠かった。強い日差しにもまいってしまったが、自然のままの川の姿に、わくわくする気持ちで元気に漕ぎました。透明度も高く、川底が見えます。鮎もよく釣れるそうです。瀬は吉野川のほうが断然良かった。

(水産)

## へ

タペタ。パタパタ。ポコポコ。今夏の渋谷はこの音が熱いコンクリートの道を鳴らしていた。ミュールとか厚底サンダルとか言うらしい。どちらにしても歩きにくそうな靴だ。階段を降りる時は、さらに大きな音でパタンパタン。膝が曲がり背中が猫背になっている。昔も同じ靴がはやり、穿いた私

は転んで、抱いていた子供を落とした。危険！

(野村)

## 特

養ホームでおむつたため、のボランテアを二十年続けた母。紙おむつに代わり、仕事がなくなつたのと、持病の心臓が悪くなり、出掛けるのを控えるようにと言われたのが重なつた。年はとりたくない、悲しい。踏切に飛び込んだほうがましだ。そんなことはかり言うようになった。痴呆症という病気がかかっていた。

(望月)

## 赤

坂の迎賓館を参観してきました。ベルサイユ宮殿を模したネオ・バロック様式の日本で最初の洋風宮殿です。緑青の屋根・花崗岩の外壁もみごとですが、各部屋の装飾類も調和がとれ華麗な美しさでした。

昭和四十九年より国の迎賓館

として使われているのですが、海外から来た国賓の方々は、この東洋のベルサイユ宮殿をどう

見ているのでしょうか。(成井)

## 目

の前を茶髪の若者たちが道いっぱいに広がって、くたくた歩いている。前へ進めず後でイライラしている私。

「すみませーん！」と若い女の子が走ってくる。「○○です。

兄の墓に来てくださったのは貴

方たちですか」。頷く若者。「あ

りがとうございます。私、妹の

ハナです」と深く御辞儀した。

顔をあげたハナさんの目から、

涙。きれいだなあ。

(山本)

## 秋

祭りも終わった。二十五年前からの「連合みこし」は、各町会が競い合う。見物人も含めて千人以上の参加者で、今年には社会人になった娘もか

いだ。祭に夢中の男たちは、お

祭り真最中にもう来年の話で盛り

り上がる。夫もその仲間。やつ

と今年「みこしの熱もさめてきたし」と言い出した。被害者だ

った私は、ご加齢によるもので

すねと返事をした。(菊池)

## 夫

はガーデンング・マニアである。昔から花と共に野菜も作ってくれていたが、近頃キッチン・ガーデンの流行に乗って、スペースを増やした。

もともと八百屋で売ってるよ

うなものは作らず、珍しい野菜

を好んで作った。

そして今年「ポーランドの

食用葉ケイトウ」が繁茂してい

る。おいしいです。

(和田)

## 寝

つかれなくて困っています。夜中の二時三時、時には朝の六時にならないと眠れません。一度眠ると今度は当然、昼近くなるまで眠りこけてしま

い、どうにもなりません。

お酒を飲むと、二、三日でオ

ナカをこわしてしまうという情

ない人物です。どなたかこうし

た「入眠障害」を直すよいチエ

を貸して下さい！ ホント参っ

ているのです。(田中)

## 「ファミ・ポリテイク」より

●「教育改革国民会議」のメンバーに起用された「プロ教師の会」の河上亮一さんに会ってきました。河上さんは第一分科会に所属していますが、やはりこの分科会所属の曾野綾子さんが、国民会議全体の報告として「日本人へ」という文章を書いて内容をまとめ、発表しています。もちろん各分科会の内容も盛り込まれているのですが、それを読んでも、河上さんの言った一番大切な部分が全然飲み込めないことに驚きました。まとめとはダメなものです。

●「一番大切」な部分とは何かというと、学級崩壊をもたらすどうにもならない子どもは、一般の子どもと別にして分離教育したほうがよからうということ。あなたは思うられますか。

日本は「すべて平等」のタテマエでやってきた国ですが、いまやそれではやっていけないほど追い詰められているのです。

## NMS研究会より

●NMSが発足した当時から問題になっていたのは、このシステムは三歳までの乳幼児をもつお母さんへの子育てアドバイザーなのに「うちの子はもう五歳なので受けられないでしょうか」などというご要望が多いこと。下のお子さんが一歳で入会されたのに、相談の内容は上の四歳のお子さんのことばかり、というケースも始終です。

●子どもが大きくなればなるほど子育ての誤りがはつきりしてくるので無理もなく、だからこそNMSは「三歳まで」を強調しているのですが、最近あまりにもご要望が多いので「三歳までが対象」の原則を変えざるべきかも、と悩んでいます。

●子どもたちの自律力・自立力はますます衰えてきています。どうしてそうなるのか、NMSでははつきりその原因を把握しているのですが、厚生省も含めて真実の見えない人ばかり。ほんとうに大変な世の中になりました。

## 老人ホーム情報センター便り

最近の電話相談から。

「八月にオープンしたホームに入居契約をしたが、入居者が少なく、契約した部屋のフロアには他の入居者が一人もいない。なかなか気味が悪いので、まだ自宅で生活している。それでも毎月の管理費の支払いが馬鹿にならないから、入居しようかと思っているが、迷ってしまう」と。現在有料老人ホームはなかなか満室にならない。

人によってはオープンしたらずぐに入居し、人間関係で優位に立ちたいという人もいる。一日でも早く入居すると先輩顔が出来るかと考えているらしい。この話をするところ「そうですね」と少し元気になった。

入居後は心楽しく生活してほしい。自分の意志をしつかり持って、自立して行動することが、大切だと痛感する。

# 募集します

## 特集テーマ

特集テーマ原稿

二八八号(二〇〇一年二月一日発送)

のテーマは「車と私」です。

以前、真つ赤なフォードのオープンカーを買って、町の人気者になり、生活がすごく楽しくなった方の投稿が載

りましたが、思えば現代日本人の暮らしには車はペットのように溶け込んでいます。

あなたはいつごろから車を運転するようになりましたか。乗るのは好きですか、嫌いですか。車をどんなふうに買い替えてきましたか。いまは何に乘

## 座談会 私も言いたい

二八八号のテーマは「やってみました通信教育」です。

女性の一生は長く、子育て後かれこれ四十年もあるのかというわけですから、夫の世話をして過ごすだけでは中々間が持てません。世話などしたく

ないという人もあるでしょう。

そこで再就職を考えたり、趣味に生きたいと思ったり、さまざま路線が分かれて来ます。どうもそのとき多くの人の頭に浮かぶのが「資格」らしく、資格をとろうと通信教育に申し込むのが一つの定型。

## 私の意見・あなたの意見

二八七号のテーマは「賛成? 反対? 英語を第二公用語に」です。

日本人の英語下手は世界的に有名らしく、中学・高校で六年間みっちり学習するというのに、簡単な会話ひとつ交わせず、外国人に道を尋ねられても

オタオタしてろくな返事もできないというありさま。これから待ち構える国際社会に、これでいいのか。

この現実についてはもう三十年前から「日本の英語教育はどうなってるんだ」という苦情が絶えませんでした。

それが高じてか、官庁関係の書類を

って、どんなふうにご利用していらつしやいますか。

車にまつわる悲喜こもごもの思い出を含め、あなたと車の付き合いをぜひ聞かせていただきたいと思えます。

字数 二千字〜四千字程度  
締切り二〇〇〇年十二月十日

どんな成果が上がったか、上がらなかったか、経験者のお話を伺いたいです。高校、大学の通信制はいささか質が違うので、除外します。

日時 十一月十日(金)PM二時〜三時半  
場所「わいふ」分室  
申し込みは十月二十日までに電話で。

英語で作成し、議論も英語で行うようにすればよいという「英語第二公用語説」が出現したのですが、みなさまはどうお考えでしょうか。ぜひ意見を聞かせてください。

字数 千字前後  
締切り 十月二十五日

# きまり

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。  
投稿の前に以下を必ずお読みください。

## ◆グラフィア「わが家の歴史写真」

どこのご家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそってでも、ただ古い写真を並べてもけっこうです。

お申込みは電話で編集部まで。

## ◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページを「ご覧ください」。

## 一六〇〇字のコラム

(どのコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します)

## ◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

## ◆ズバリ一言

オピニオン、評論を。独自の意見で。

## ◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

## ◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子。どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。あり

のままの関係を描いてみませんか。

## ◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦労話を。

## ◆今これに夢中

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多はず。あなたは何に夢中ですか。

## ◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマを。自由なコーナー。

## 八〇〇字のコラム

## ◆あなたへスマツシユ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

## ◆ことばでハッピー

ことばの使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて面白い話題を。

## ◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り回されている人、体験談を。

## ◆おすすめの一冊

書評のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。お読みになった本について感想を含めて、ご紹介ください。

## 四〇〇字のコラム

## ◆笑える！

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまう楽しい話を。

## ◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直な意見を求めます。

## その他

## ◆私もひとこと(一四六ページ参照)

どんなことでも気軽に書きください。

## ◆わいふネット(一四六ページ参照)

教えて欲しい、聞きたい！ それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

## ◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(一四三二〇行にまとめて)



# 投稿の

## ◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適當と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩・短歌・俳句を除く)

## ◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

## 注意

●原稿はお返しできません。

●投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマッシュ」「おすすめの一冊」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶつても可。

●締め切りは原則として偶数月の二十五日。郵送で当日必着。(読みにくいので、ファクスではお送りにならないようお願いいたします)

●他誌との二重投稿はお断りします。

●写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。

●誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●原稿の最初に次のようにお書きください。

原稿用紙は必ず開いたまま右上1カ所を留める

ペンネーム・匿名希望の方は明記

コラム名	ペンネーム・匿名	住所	年齢
	住所	住所	
	会員番号	住所	
	本名	住所	
	電話番号	住所	
タイトル			
本文……			

なくても可

① ページを明記  
(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を載せるかどうかを明記

●四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。ワープロ打ちは二〇字×二〇行を一枚に、行間一行おきにあけること。字間はとくにあげないで。

へあて先 〒162-0815 新宿区筑土八幡町一―二―二〇一

わいふ編集部

投稿のきまり

# 編一集一だ一より

◆今度も特集はたくさんのご投稿をいただきました。喜んでいきます。

予想どおり皆さんさまざまなことをしていらつしやるが、鴨川典子さんの「骨量が多い」と言うお話。この方は確かミカン農家の奥さんでした。農作業で日にあたるので、紫外線を防ぐのに帽子を離さないとか前号にありましたが、日にあたればカルシウム吸収がよく、骨量が多いのですね。編集の人間は日の当たらない場所です仕事をしているので、さぞかし骨量は減っていることでしょう。

◆グラビヤに出てくださる方がないので困

## 購読申込は……

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様です。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

っています。古い写真をお持ちの方、ぜひお申し出ください。

◆初投稿の方が増えてきました。なるべくお載せするようにしていますが、ボツになった場合は「ボツのお知らせ」に、「ボツの理由をお聞きになりたい方はお問い合わせください」とあるように、ぜひお電話を頂きたいと思えます。その文章のどこが悪く、どこがよいかをご説明しますので、ご参考になるはずです。

◆特集、座談会で取り上げて欲しいテーマもよくお寄せ頂いています。とてもありがたいことで、引き続きよろしくお願ひいたします。

◆すごい残暑でした。皆さまお身お大切に。

## 購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

## 「わいふ」トップの古稀を祝おう!

「わいふ」が東京で再出発してから二五年。田中喜美子編集長・和田好子副編集長が共にこのたび七〇代を迎えられました。新旧の仲間が集まって、お二人のみずみずしい古稀を祝うパーティーを開催いたします。

日時 十一月二十六日(日)二時～五時

場所 飯田橋レインホール二A

費用 六千円(記念席代含む)

申込 原田静枝へTEL・FAXを

〇三十三三九九七三〇

締切 十月二十日(金)

発起人 原田静枝・早川裕子・鈴木由美子

## わいふ◆286 (隔月刊)

- 発行日 2000年11月1日
- 編集 わいふ編集部
- 定価 620円(本体590円)
- 年間購読料 4224円(送料共)
- 印刷 平河工業社
- 発行所 (株)グループわいふ  
〒162-0815  
東京都新宿区筑土八幡町  
1-3-201  
電話 (03) 3260-4771  
FAX (03) 3260-4773
- 郵便振替 001503-110430  
加入者名 わいふ編集部



# 定年、気がつけば二人旅

吉武輝子著 ◆夫と妻 共歩き人生への再出発 「定年離婚」にならないうちに、人生の長い午後をどうすごすか。子育て後・定年後の新しい夫妻関係のつむぎ方のヒント満載。二〇〇〇円



# 介護保険最前線

◆日独の介護現場の取材から 日本に先行して実施されたドイツの介護保険の実情と、導入に混乱する日本の現状を丹念な現場取材を中心に書き下ろす。二二〇〇円

斎藤義彦著

# 新・介護保険総点検

川村匡由著

◆各制度はこう変わった 利用者、施設、病院、社会協議会など、それぞれの立場からみた介護サービスの变化と課題。新データ満載の待望の改訂版。二四〇〇円

# 倒産する老人ホーム

## しない老人ホーム

わいふ編集部編 ◆安全確実な選び方 かしこい消費者としての有料老人ホームの選び方を紹介。一八〇〇円

いま注目のリハビリの専門家の仕事を紹介！シリーズ最新巻

## ⑤ 理学療法士まるごとガイド

日本理学療法士協会監修／資格のとり方・しごとのすべて 福祉・医療の現場で幅広く活躍するリハビリテーションの専門家の仕事をわかりやすく紹介。一五〇〇円

## ⑥ 作業療法士まるごとガイド

日本作業療法士協会監修／資格のとり方・しごとのすべて 日常生活動作の訓練や障害を補うため新たな能力を開発する指導を行う専門家のすべてを紹介。一五〇〇円

まるごとガイドシリーズ 好評既刊書

各二二〇〇円

## ① 社会福祉士まるごとガイド

日本社会福祉士会監修／資格のとり方・しごとのすべて

## ② 介護福祉士まるごとガイド

日本介護福祉士会監修／資格のとり方・しごとのすべて

## ③ ホームヘルパーまるごとガイド

井上千津子監修／資格のとり方・しごとのすべて

まるごとガイドシリーズ姉妹書 好評発売中！

## ケア・福祉のしごとまるごとガイド

田端光美監修 だれにでもわかる分類で、いま注目の福祉の仕事を紹介する98の職種・52の資格。一五〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 宅配可・価格は税別  
TEL.075-581-0296 FAX.075-581-0589 <http://www.minervashobo.co.jp/>